成り代わりリンクのGrandOrder　外伝

文月葉月

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここでは、別枠で連載している『成り代わりリンクのＧｒａｎｄＯｒｄｅｒ』の外伝、もしくは番外編にあたる作品を投稿していきます。

本編を既に読まれていることが前提の設定、展開などを随時盛り込んでいきますので、ご容赦ください。

現状では『ゼルダの伝説』の要素しか出ていませんが、後にＦａｔｅに繋がっていくのを前提として書いていること、本編と時間軸が合わないイベント関係のストーリーなどは今後こちらで書いていこうと思っていることから、『Ｆａｔｅ』のタグを入れてあります。

目次

ゼルダの伝説　最終章
伝説が始まる日 ―― 1
最初の戦い ―― 13
魂の記憶 ―― 18
発覚 ―― 27
故郷からの旅立ち ―― 32
王宮で過ごす日々 ―― 36
伝説を知る者 ―― 41
嘆願と実力行使 ―― 49
二度目の旅立ち ―― 54
ラネール地方 ―― 59
デスマウンテン ―― 68
ヘブラ地方 ―― 75
ゲルド砂漠 ―― 88
ハイラル王国各地 ―― 102
剣術大会 ―― 113
ＶＳ　ライネル ―― 120
顛末と成果 ―― 125
在りし日のハイラル ―― 131
赤き月の夜 ―― 140
退魔の剣と勇者 ―― 143
破滅への抵抗 ―― 147
片割れの苦悩 ―― 150
『力』の魔王 ―― 152

『勇気』の少年 ―― 157
『知恵』の姫 ―― 161
伝説は繋がる ―― 170

ゼルダの伝説　最終章
伝説が始まる日

最初の記憶は、『今生』の母の腕の中。
揺れる木漏れ日の下、心地よい春の暖かさの中で恐怖と混乱に泣き叫ぶ俺を、彼女は優しくあやしてくれた。

世界が一変したその時から、赤ん坊が少年へと成長するだけの、決して短くはない年月が流れた。
十二歳の誕生日を迎えた今日は、めでたい成人の祝いの日である。
よそでどうなのかは知らないが、少なくとも今の俺が生まれて育ったこの村では、十二歳を子供の大きな節目とする風習があった。
流石に酒やタバコの解禁まではされないけれど、成長の区切りを祝うものだと思えばおかしなところは無い。
……そう、祝ってもらえること自体には文句は無いのだ。

「あんなに小さかったお前も、もう成人の年なんだねえ…」

赤ん坊の頃に父を、更には幼少期に母を失った俺を一人で育ててくれたばあちゃんが、目尻に涙を浮かべながら晴れ姿を喜んでくれている。

嬉しいし、喜びたいとも思うのだが、生憎と俺の口から出てくるのは渇いた苦笑いばかり。

照れて、緊張しているとばかり思っているばあちゃんには、ありがたいと同時に申し訳なかった。

だって、今俺が着ている、ここ『カカリコ村』で成人を祝うための晴れ着というものが……。

「勇者の緑衣を纏ったその姿、お父さんとお母さんにも見せてあげたかったよ。

不思議だねえ……まるで最初から、お前が着るべき服だったかのようにも見える。

本当によく似合っているよ、リンク」

緑の上着に、後頭部に長く垂れさがる緑の帽子。

さらに言えば、俺自身の金髪と青い瞳、顔の両脇で長く尖った耳。

ばあちゃんに促され、姿見の前に立った俺の目に映ったのは、正しくあの、世界的に有名なゲーム会社の看板タイトルのひとつ。

『ゼルダの伝説』の、緑衣を纏った勇者リンク。

それが、困ったような、諦めたような笑みを浮かべながら立っていた。

『俺』がリンク……そんなバカなと、何の冗談だと、今までに何度

思ったことか。
子供の頃から大のゲーム好きで、特に『ゼルダの伝説』は全シリーズを隅々までやり込んだ。
ハイラルの地も人々も、リンクも、ゼルダ姫も、ガノンドロフだって好きだったけれど、自分が当人になりたいと思ったことなんて一度もない。
冷静な第三者だけでなく、贔屓になりがちなファンの視点から見ても、勇者リンクの冒険は大変な苦難に溢れているのだ。
家族がいなかったり、親しい仲間や友達と死に別れたり、そうでなくとも永遠に会えなくなったり。
リンクが必死に抵抗した世界の危機自体が秘められたもので、世界を救った英雄でありながら、秘密や心境を誰とも分かち合えない孤独をたった一人で抱え続けたりもした。
孤独と別れの物語……『ゼルダの伝説』をそう称した誰かの言葉を前の俺は否定しなかった、むしろ納得すらしていた気がする。
それが当の『リンク』にとって苦痛だったか、重荷に感じていたかはわからない。何しろゲームの中のことだから。
勇者ならば当然だと、これが俺の果たすべき使命だからと、揺るがぬ誇りと自信を持って戦い続けていたのかもしれない。
……それが『リンク』だというのなら、俺には無理だ。
何の因果か…ゲームの中の世界だった筈のハイラルに『リンク』として生まれた俺は、ある種の虚無と諦めを抱きながら、幼少期を半ば惰性のように生きていた。
自棄になって家を、村を飛び出したり、いっそ死んで自由になろうだなんて、実行どころか考えることすら出来なかったのは、ばあちゃんから孫まで奪う訳にはいかなかったから。
本当に、ただそれだけ。

「リンク、もう部屋に戻ってしまうのかい？
折角の晴れ姿なんだから、村を回って来ればいいと思うんだけどねえ」

「見せたとして誰が喜んでくれるのさ、こんな変わり者の成人なんて」
「リンク……」
「大丈夫、ちゃんと今日一日はこの格好でいるから」

ばあちゃんの心配そうな、悲しそうな表情と声から逃げるように、俺はさっさと部屋のドアを閉めてしまった。
申し訳ないとは思う、だけど実際にその通りなのだ。
紛れもなくこの村で生まれ育っておきながら、村人達から一歩引いて、壁を作りながら生きてきた上に、十年ちょっとの人生の大部分を理解しがたい『奇行』に費やしてきた俺は、同年代の子供達どころか大人からも変人として遠巻きにされていた。
成人を祝い、緑衣を纏って紛れもない『勇者』の装いとなりながらも、俺の日課は変わらない。
窓際の机に腰かけ、引き出しから紙の束を取り出し、使い込みすぎて子供の愛用品とは思えないほどに年季が入ったペンを取り、既に手慣れた様子で昨日の続きを紡ぎ始めた。
誰にも見せない、見せられない物語のタイトルは、『ゼルダの伝説』である。

『ゼルダの伝説』シリーズの大きな特徴のひとつに、『シリーズ内における時系列がタイトルごとにハッキリとしている』というものがある。
全ての始まりは、勇者のみが扱える神剣『マスターソード』が完成するまでを描いた『スカイウォードソード』。
その頃はまだ、勇者リンクの衣装としてお馴染みの緑衣は、何の変哲もない騎士学校の制服でしかなかった。
それが今の世で成人の晴れ着となっているということは、ここは既

に『緑衣を纏った少年が偉業を成した後の時代』ということになる。
過去と未来を行き来する冒険を繰り広げたビッグタイトル、『時のオカリナ』においては時間軸が一気に枝分かれを成している。
今ここがそれ以前なのか、以降なのか、以降だとしたらどのルートなのか。
少なくとも把握はしておきたい、何しろ危険度に相当の差があるのだから。
勇者が魔王に敗北し、後を引き継いだ賢者達によって辛うじて封印が成された、その後幾度となく復活した魔王の脅威に晒されてしまう世界。
勇者が魔王を倒し、その後元の時代に帰ったことで、『時の勇者が魔王を倒した』という伝説が後の世に伝わった…しかし、勇者そのものはいなくなってしまった世界。
勇者が帰った元の時代、魔王がもたらした恐怖の時代は最初から無かったことになり、その後を生きた勇者の血筋が遺された世界。
有志による考察まで行われていたそれを、自分が今ハイラルのどの時代にいるのかを判断する為にまとめ直そうとしたことが、いつ終わるとも知れない膨大な執筆作業の始まりだった。
この世界で、この場所で生きている実感がどうしても乏しかった。
自分は今、虚構の中で生きているという感覚がどうしても拭いきれなかった。
ばあちゃんという楔を失った後の自分がどうなるのか、自分でも判断しきれない。
そんな不安を払拭してくれた、自分をこの世に繋ぎとめてくれたのは。
皮肉にも、世界が虚構であることの証明でしかなかった筈の前世の記憶と知識だった。
記憶が薄れてしまう前に、改めて『情報』として形にし直そうとした行ないが、その後の俺の…『今』の人生を大きく変えた。
コントローラーを握りながら辿ったリンクの冒険を…驚き、圧倒された世界の真実を、文字へと変えて綴るたびに。

その旅路が、『彼』が守り駆け抜けたハイラルの美しい光景と、そこで生きる人々の姿が鮮明に、泣きたくなるほどの愛おしさを以って、魂の奥から込み上げてきたのだ。

ゲームをプレイしていた当時の自分は、そのシーンでそこまで感動していただろうか。

そもそもゲームでは、そこまで詳しく描写されていただろうか。

そんなある意味当然の疑問は、その記憶が、その光景が疑いようもない『本物』であるという、圧倒的な自信と確信でもってあっという間に掻き消された。

抱いたものは、『感動』や『喜び』だけではない。

恐ろしい強敵を前にしてしまった時の『恐怖』を。

守り切れなかった、もしくは間に合わなかった時の『悲しみ』や『口惜しさ』を。

何よりも、それらを幾度となく乗り越えさせてくれた決して諦めない『勇気』を。

まるで、本当にその時代の『彼』そのものになって冒険をしているかのような追体験を、執筆活動と同時進行で経ているうちに、『この世界は偽物だ』なんて考えは、感覚は、いつの間にか消えていた。

この鮮やかで美しい世界が、精一杯に生きる人々が、魂から込み上げるこの気持ちが虚構（フィクション）だなんて、そんなことある筈が無いのだから。

（あれは勇者の、『リンク』の魂の記憶って奴なのかなあ。

……だとしたら、何で俺みたいな余計なのが混ざり込んだんだろう。

女神ハイリアが、何かミスでもしたのかな）

たまたま、何かのタイミングで運悪く、尊い魂の中に混ざり込んでしまった紛い物。

だとしても、こうなってしまった以上は、借り物の『リンク』の名と魂を汚すことの無いように精一杯やっていくしかない。

いつかこの魂と記憶を、本当の『リンク』に、この世界の一員とさ

せてくれたことへの感謝を込めて返すまで。
それが今の俺の、この世界で生きる意味。

「……いっ！
おいリンク、開けろ!!」
「……ったく、うるさいなあ。
鍵なら開いてるよ、バド」

いい感じに集中してきたところを、窓枠越しでも聞こえてくる大声に妨げられた俺は、これ以上の作業を諦めてペンを置いた。
ここが二階だという事実を一蹴するわんぱくぶりで窓から入ってきたのは、村一番の変わり者たる自分を相手に、昔からしつこく絡んでくる村で二番目の変わり者。
部屋からほとんど出ることのない自分にとって、唯一の友達と言える少年だった。

「用があるならちゃんと玄関から来ればいいだろ、何でわざわざ二階の窓まで登って来るのさ」
「行ったら頼まれたんだよ、お前のばあちゃんに。
心配だから、こっそり部屋の様子を見てきてくれって」
「……ばあちゃん、俺もう成人なのに」
「区切りがついたからって、そう簡単に変わるわけないだろ。
特にお前の場合、母ちゃんが死んだ後が酷かったからなあ」
「……まあ確かに。
死んだ目で、反応も鈍くて、余計な心配をかけた覚えはあるけど」
（あれは母さんが死んだショックというよりは、この世界と自分自身に現実感を持てずにいたのが原因だったんだよな……）

こんなこと言える訳がない、余計に心配させてしまうのが目に見えている。
もう数年も頑張れば、『ゼルダの伝説』を書ききることが出来るだろう。
その頃には、『リンク』と呼ばれる度に感じてしまう『それは俺じゃない』という違和感に、自分のものではない名声と偉業を振りかざしてしまっているかのような罪悪感に区切りをつけ、勇者と同じ名を持つだけのただのハイリア人として、本当の意味でこの世界の一員となれている筈。
その為にも、早いところ執筆活動に戻ろうと思っていた俺は、バドが口にした思いもよらない提案を受けて、つい呆気に取られてしまった。

「行商の馬車を迎えに行こうって。
……確かにそろそろ来る頃で、今から行けば隣町までの途中辺りで会えそうだけど。
でも、何でわざわざ」
「んんっ、それはだなあ……」

首を捻り、唸り声を上げながら、俺を納得させられる理由を一生懸命に考え出すバドの様子に、耐え切れずに思わず吹き出してしまった。
彼は、昔からこういう所があったのだ。
友達を作らず、外で遊びもせず、部屋で何かを書いてばかりの俺を、あの手この手で連れ出そうとした。
今回もそんなものだと、バドなりの成人祝いなのだと考えた俺は、未だ悩み続けるバドに助け船を出す心地で声をかけた。

「わかったよ、折角だし急ごうか」
「あっ…ああ、そうだな!!

……前に王都に送った馬車に混ぜたあの本の返事が、早ければ次の馬車で来てる筈なんだ。
リンクの成人祝い、上手くいってるといいけど……」
「バド、今なんか言った？　本？」
「いいっ、いやいや何でもない!!」
「あっ、本と言えば……おい、バド！
前に俺の所から勝手に持って行ったあの本、いい加減に返せよ！」
「今はムリ」
「今は、って……まさか、破いたり失くしたりしたんじゃ」
「そんなことないって！
ほんと、もう少しだけ、大事な用が終わったらちゃんと返すから!!」
「あれを書くのにどれだけ苦労したと思ってるんだよ、もう一度なんてごめんだからな!!」

賑やかなやり取りと共に階段を駆け下り、そのままの勢いで出かけて行く。
着替えることをすっかり忘れていた俺とバドの後ろ姿を、ばあちゃんはホッと安心したような笑みで見送っていた。

ガタン、ゴトンと音を立て、その度に荷台を揺らしながら、大量の商品を積んだ馬車が次の村を目指して街道を進む。
そこそこの規模があり、牛乳や革製品といった特産品に恵まれていることで住民達の懐も温かいカカリコ村は、商人にとって訪れるのが楽しみな馴染みの村だった。
食糧から日用品、嗜好品といったいつもの品を大量に積んだ荷台に、今回は珍しいものが紛れていた。
明らかに一般人とは違う、剣のような鋭い気配を纏った女性。
そして、そんな彼女に守られながら、美しく愛らしい顔立ちを異様に強張らせている少女。
大量のルピーと引き換えに、何も詮索せずに二人をカカリコ村まで送ることを依頼された商人は賢明な判断でそれを守り、おかげで村まであと僅かというところまで辿り着いている。
白く、小さく、傷ひとつない手を、膝の上で固く握りながら震わせている少女の肩を、女性は優しく抱き寄せる。
自身の不安と緊張を慰めようとしてくれたことを、心から嬉しく、ありがたく思いながら。
……それで少しも安心出来ていない自分に、少女は申し訳なさを募らせるばかりであった。

「……ごめんなさい、インパ。
兵士長たるあなたを、私の我がままに付き合わせてしまって」
「お気になさることはありません。
誰よりも先に会ってみたい、話を聞いてみたいと思ったのでしょう？
あの本の執筆者と、城を飛び出すことも辞さない覚悟で」
「その理由が問題なのです。
魔物の被害を、兵の損傷を少しでも食い止めようと、私なりに一生懸命に考えていたのに。

あの本は、あの本の執筆者は、そんな私……いえ、城の者全てを一瞬で置き去りにしてしまった。
かの者を戦術顧問として迎え入れようという、お父さま達の考え自体には、私だって賛成です。
だけど……どうしてもその前に会っておきたい、私の考えていた拙い施策などは小娘の戯言だったと一蹴してもらいたい。
嫉妬と悔しさのあまりに、取り返しのつかない失態を犯してしまう前に、きちんと諦めさせていただきたいのです。
……迷惑以外の何ものでもないですよね、いきなり、こんな勝手な」

遂に堪え切れず、両の瞳から涙を溢れさせてしまった少女を、女性は堪らずその胸に抱き寄せた。
縋りつき、顔を押しつけた胸元に嗚咽がしみ込む。
外に零さないのは、少女の最後の意地と言えた。

（誰か……誰かいないのか。
姫様の、ゼルダ様のお心を理解してくれる者、共に歩んでくれる者は）

少女を慰め、その胸中を一心に案じるあまりに。
商人から前もって、定期的に見回りがされているおかげでこの街道は安全だと断言されてしまっていた、柄にもなく油断をしてしまっていたが故に、彼女は気付かなかった。
深い森を横切る、薄暗い街道を急ぐ馬車を、木々の影から獲物を定めた眼差しで見る者達がいたことに。

『伝説』の始まりはその時だった。
後の世で皆がそう口にする瞬間が、もう間もなく訪れようとしていた。

最初の戦い

隣町へと続く街道をバドと共に進んでいたリンクだったが、その歩みはいつの間にか、戸惑うバドを置いていきかねないような駆け足へと変わっていた。

「おいリンク、どうしたんだよ!!」
「わからない、だけど…っ!!」

根拠なんて何にもない。
なのに『急げ』と声が聞こえる、取り返しがつかなくなるという確信がある。
それは間違いなく、他の誰でもない、自分自身の魂の叫びだった。
ちょこちょこと跳ねていた小鳥や、木の実を齧るリスが慌てて開けた道を駆けた先の、カカリコ村へ向かう際の最後の難所となる森の中。
そこで少年達が目にしたのは、積み荷をぶちまけながら無残にも横転した馬車と。
狩りの成果が満足のいくものだったのか、『何か』を囲みながら歓声のような雄叫びを上げる魔物達の姿だった。

「ま、魔物!?」
「ボコブリンだ!!」

『今生』では初めて目の当たりにする魔物の個体名を正確に口にしたリンクは、ゲームとはまったく違う『目の前』の『生きた』魔物の生々しすぎる存在感に、バドと共に足を止めてしまった。
渇いた喉が、辛うじて唾を呑み込んだ音を鳴らす。
新たな獲物が現れたことに気付いたボコブリン達が振り返り、耳まで裂けて大きな牙と舌を覗かせる口が幾つものおぞましい笑みを形

作った。
バドが、恐いもの知らずのガキ大将がヒュッと息を呑み、歯を鳴らしながら立ち竦むことしか出来ない、恐ろしいその姿。
それが、リンクには見えていなかった。
ボコブリン達が振り返り、輪が崩れたことで視界に入った、此度の狩りの『成果』。
傷つき、倒れながらも剣を手放さず、尚も必死に立ち上がろうとしている女性と。
恐怖に体を震わせ、見開いた眼に涙を浮かべながら、幼い腕と体で彼女を必死に庇おうとしている少女。
その姿を目にした瞬間、リンクは、自分の体が震えていたことも忘れて飛び出していた。
彼女を助ける、彼女を守る。
それは宿命であり、運命であり……自分自身で決めた、誓った、掛け替えのない使命なのだと、魂が叫びを上げていた。
身を竦ませる恐怖を必死に払って、バドが上げた制止の声を聞きながら。
自身の存在に気付いた彼女の、恐怖と後悔しか無かった瞳が、別の色を滲ませながらこちらを見るのを感じながら。
走りながら引っ掴んだ木の枝を、リンクは、一番手前にいたボコブリンの脳天へと渾身の力を込めて振り下ろした。
到底武器とは言えない枝切れは、たった一撃でへし折れてしまったが、それでもボコブリンを怯ませる程度の役目は果たしてくれた。
目の前に星が散ったことで、思わず取り落としてしまったこん棒をすかさず拾い、元の持ち主へと容赦ない二撃目と変えてお返しする。
何故か動く、何故か戦い慣れしている心身への疑問を今は置いておき、目の前の魔物を倒すことのみに集中する。
最初の一匹は偶然と思ったのか、ボコブリン達の戦意は衰えず、むしろ『身の程知らずに思い知らせてやれ』とでも言わんばかりの勢いで襲いかかってきた。
それに対してリンクは、焦らず、怯まず、一匹ずつ確実に対処する

ことで、二匹目三匹目と仕留めていく。
自分達の攻撃は当たらないのに、数ばかりが減らされていく。
『偶然』だの『身の程知らず』だのといった考えが的外れであること、目の前の少年が明らかな脅威であることは、もはや明確な事実だった。
不利と判断した残りのボコブリン達が、これ以上の戦闘及び略奪行為を諦めて森へと逃げていく。
これで終わったと判断し、落ち着いて気を抜いても良かっただろう。
大打撃を被った状況で、それでも少しくらいは成果をと思ったのか。
逃げる間際に少女の小さな体を担ぎ上げ、泣き叫ぶ彼女を連れ去りさえしなければ。

「あいつら何てことを…っ！」
「バド、急いで村に戻って助けを呼んで来てくれ」
「それはいいけど。
……お前、まさか」
「巣の場所によっては、村からの助けを待っていたら間に合わないかもしれない。
……大丈夫、群れを丸ごと相手にするような無茶はさすがにしない。
あの子を助けたら、どこか隠れられる場所を探して、皆が助けに来てくれるのを待っているから」
「わ、わかった……本当に、無茶はするなよ」
「行商のおじさん、その人を頼みましたよ！」

荷馬車が横転した際に、僅かな隙間に挟まれてしまっていたらしい行商人が、やっとの思いで這い出しながら頷いた。
彼自身も危ないところだったのは確かなのだが、おかげで魔物に襲われずに済み、結果的には無傷で済んだことを考えると運が良かった

としか思えない。
そのせいで、たった一人で魔物と戦わせることになってしまった女性の身を案じるその表情には、安心して任せられそうな誠実さが窺えた。

「待、て……頼む、待ってくれ」

森へと向けて走り出しかけたリンクを、後ろから聞こえてきた弱々しい、しかし確かな力と意思が込められた声が呼び止めた。
振り返った先に見たのは、傷ついた自身を案じる行商人の手を一旦拒みながら、必死に体を起こして。
剣を、戦う術を、あの少女を救う役目を託そうとする、女戦士の姿だった。

「どう、か、あの方を……ルダ様を、助けて」
「必ず」

自身の力で大切な少女を助け出せないことが、どれだけ悔しく、腹立たしいことか。
剣と共に、その想いを確かに受け取ったリンクは、彼女のように腰に差すには長すぎる剣を背に負って。
改めて、今度は決して振り返ることなく木々の向こうへと消えていった。
それを見送った女戦士…インパはなぜか、自分でも疑問に思ってしまうほどに、リンクが考えていたような悔しさというものを感じていなかった。
王都では見かけない緑の服を纏った少年の、姫を追う小柄な後ろ姿が、彼が行ってくれるのならば大丈夫だと、この状況で何故か安心してしまえる程に頼もしかったから。
張り詰めていた精神の糸がここで遂に切れたインパは、姫と彼が笑い合う、そんな見たことの無い筈なのに懐かしくも思える光景を幻視

しながら、その意識を手放した。

魂の記憶

いつもは誰もが当然のように向けてくれる気遣いなど欠片もなく、多少壊れても構わない荷物のように乱暴に運ばれながら。

それに対する文句など言えようもない状況で、ゼルダは堪えることも出来ないままに泣いていた。

恐怖ではなく、後悔のあまりに涙が溢れる。

勝手な我がままで、インパを連れ出してまでこんなところにやって来て、挙句にこんなにも惨めで無残な最期を迎えてしまう……ことが理由ではなかった。

（魔物の集団に襲われることが、こんなにも厄介で恐ろしかったなんて。

私の案なんて何の役にも立たない、下手に採用などされていたら余計な犠牲が出ていたところでした。

……あの本を書いた人に、下らない嫉妬など抱いている場合ではなかった。

出来ること以前の、もっともっと学ぶこと、知らなければならないことが、私にはたくさんあったのに）

日々大変な責務に追われている父や城の重鎮達を少しでも助けたい、力になりたいと、ゼルダは幼い彼女なりに必死に務めを果たしていた。

国を悩ます問題の、課題のひとつひとつに真摯に取り組み、懸命にまとめた案を提出するも。

父を含めた大人達は、それを幼い姫の執務ごっことしか思ってくれない。

自分には何が足りないのか、どこを直せば自分の話をまともに聞いてくれるのか、自分は何を頑張ればいいのか。

そんなことを涙ながらに、本気で尋ねたことだってあったのに。

返ってきたのは、「政治は遊びではない」という呆れた窘めの言葉と、「姫様は十分頑張っておられます」という、問いの主旨を全く理解していない猫なで声のご機嫌取りだけ。

王の娘たる姫として、国のためにと一生懸命に努力した末に、ゼルダは今や『変わり者の姫様』として城内ですっかり浮いた存在となってしまっていた。

そんな彼女の危うい精神状態に止めを刺したのが、少し前に王都へと届いた、カカリコ村からの献上品が積まれた荷馬車に紛れていた一冊の本だった。

題名は無く、本職の仕事とは思えない拙い手つきで簡単に綴じられていただけのその本は、魔物の種類や特徴、対処法に至るまでが事細かに記されているという、目を疑うような代物だった。

魔物関係の問題は昔から深刻で、その対応だけに長年に渡り多くの予算と人手が割かれてきた。

この本に記されていることが本当ならば、その労力を一気に削減することが出来る。

普段から魔物の脅威に体を張って対抗しているだけに、「そんなことで本当に」と半信半疑だった兵士長のインパが代表して、討伐任務の際に実践してみた。

その結果、いつもの倍の成果を、半分の労力で叩き出す大成果を上げ、本の内容が紛れもない真実であることが証明された。

たった一冊の本で、これだけの結果を出したのだ。

『著者』その人を城に迎えれば、どれだけの働きを見せてくれることか。

相応しいだけの能力を持つ者が現れず、長年に渡り不在だった『戦術顧問』の席にその者を迎えたいという王の言葉に、重鎮達も賛成した。

自分を一度も認めてくれたことがないその口で、まだ見ぬ本の著者をこぞって称える。

そんな様を、暗い瞳と表情で見ていた少女がいたことにも気づかずに。

彼らに、国にとって幸いだったのは、ゼルダが真の意味で誇り高く聡明な姫だったことだろう。
かの本の著者に非など無く、知らないところで勝手に抱かれた暗い感情を向けられるような筋合いなども、全く以って存在しない。
それを十分に理解していたゼルダは、城から送られる使者に先んじて著者に会い、自分の気持ちにきちんと折り合いをつけるべく、唯一信頼できるインパに同行してもらいながら短い旅に出たのだ。
……その目的は、想定していたものとは随分とかけ離れた形で達成されていた。
内容そのものはいくら真剣に詰めたとしても、所詮は本や伝聞でしか物事を知らない者の机上の空論でしかないような案を、生々しい現実の恐怖や苦労と日々相対している者達が簡単に受け入れてくれる訳がない。
自分に必要なことは、自分がすべきだったことは、諦めずに案を出し続けることでも、皆が認めてくれないのだと不貞腐れることでもなかった。
認められるだけの実績や下地が備わっていないことこそを認め、『今』に振り回されるのではなく、『未来』の為に多くを学び、そして知る。
そんな過程を怠り、すぐに出せる安直な結果のみに囚われてしまっていたことにこそ、父達は呆れて咎めていたのだと今はわかる。
今のゼルダは、心からそう思うことが出来るのだ。
今すぐ城に帰りたい…帰って、今まで迷惑をかけてしまっていた者達に謝り、そして改めて教えを乞おう。
そんな、いつもならば願うまでもなく叶えられる日常が、彼女が今いる現実からは遥かに遠い。

「助けて……」

虚しい懇願が口から零れる。
その言葉を向けた相手、脳裏に浮かんだその姿は何故か、信頼する

インパのものではなかった。
緑の服をまとった、名前も知らないあの少年……初めて会った人の筈なのに、何故かそう思えなかった。
何故か異様に、泣きたくなる程に懐かしかった。
誰かが自分を助け出してくれるのならば、それは『彼』だと、今も何の根拠も無いまま思っている。
そんな彼女の信頼に、どこからか飛んできてボコブリンの頭に直撃した『何か』と、一瞬遅れて聞こえてきた背筋に怖気が走るような『羽音』が応えた。
ゼルダよりも先に音の正体に気付いたボコブリン達が悲鳴を上げ、形振り構わず逃げ惑い始める。
存在を一瞬で忘れられ、邪魔な荷物の如く投げ捨てられたゼルダが、間もなくこの身を襲うであろう痛みを少しでも和らげようと目を閉じ、歯を食い縛る。
そうして覚悟した痛みは、訪れることはなかった。
正しく身を呈したと言ってもいいような状態で受け止めてくれた者の、緑の帽子と金の髪がゼルダの瞳に映る。

「怪我はない？」
「は、はい……あなたのおかげです、ありがとうございました」
「礼を言われるのはまだ早い、ちょっと待ってて」

怪我は無いものの立てずにいるゼルダを、剥き出しの土よりは比較的マシな草の上へと下ろした少年は、見覚えのある剣を背中から抜いて、未だ混乱状態にあるボコブリンの群れへと飛び込んでいった。
離れた所から、落ち着いて状況を見渡せるようになった今になって、ゼルダはようやく不快な羽音の正体に気付くことが出来た。
「……そういえば。
確かあの本にも、あの種の魔物は蜂が苦手だと書いてありました」

人間を脅かす恐ろしい魔物が、小さな蜂を相手に成す術もなく慌てふためいている様は、実際に目の当たりにしなければとても信じられないだろう。
訓練を積んだ兵が束になってようやく対処していた魔物の群れを、少年は投げつけた蜂の巣ひとつで翻弄し、その混乱に乗じて一匹ずつ確実に仕留めていった。
もう大丈夫……少年の雄姿を前にそう思った、安心してホッと息をついたゼルダだったが、それはほんの束の間の安らぎだった。
荒く生々しい呼吸音を森中に響くような勢いで轟かせながら、ボコブリンとは比べ物にならない巨体が、木の幹ごと枝葉を薙ぎ払う轟音と怪力でもって森の奥から姿を現した。
大きな角と長い鼻、丸太のような手足を持つそれは、ボコブリンよりも遥かに強大で厄介な魔物。

「嘘だろ、何でモリブリンなんかがこんな村近くの森に…っ!!」

危なげなくボコブリンを一掃することが出来た少年が、予想を遥かに超える強敵の登場に目を剥き、声を上げる。
まともに相対するのは無謀だと思ったのか、背中の鞘に剣を収めながら駆け戻ってきた少年が、言葉を失ってしまっていたゼルダの手を引いてこの場からの撤退を促す。
……しかし、それは叶わなかった。

「立って、早く……頑張るんだ、頼むから!!」
「あ…う、あぁ……」

見開かれた目が焦点を失い、へたり込んだまま力が抜けてしまった体が小刻みに震え続けている。
もう大丈夫だと、助かったと思い、下手に気を抜いた瞬間に更なる脅威を目の当たりにしたゼルダは、身も心も恐怖に呑まれてしまっていた。

逃げることすら出来ない獲物を相手に、急ぐことは無いとでも思っているのか。
それとも、更なる恐怖を煽ろうとでもしているのか、大股で、それでもゆっくりと近づいてくるモリブリン。
背中越しにその気配に気づき、ギリッと歯を噛みしめた少年は、動けずにいるゼルダへと背を向けて一人駆けだした。
一人で逃げられたと、見捨てられたと思い、絶望したゼルダだったが。
次の瞬間、ほんの一瞬でもそんな考えを抱いてしまったことを、彼を疑ってしまったことを、辛うじて保たれている意識の全てで謝った。
離れた所から石を投げ、再び抜いた剣を振るい、巨大な魔物の気を引きつけようとするその行動は、我が身を危険に晒してまで、動けずにいるゼルダを守ろうとしている行為に他ならなかったから。

「だ……だめ、です。
おね、がい、にげて……」

震える舌を、唇を必死に抑え、途切れ途切れながらも辛うじて紡ぎ出した言葉は、助けを求めるものではなかった。
恐くて堪らないのは変わらない、「死にたくない」とだって当然思っている。
だけど…自分のことを諦めれば、一人でならば逃げられる筈の彼を巻き添えにしてしまうことは、そんなことよりもずっと怖くて耐えられないと思った。
そんな彼女の一番の誤算は、少年もまた、自分と同じようなことを同じように思いながらこの場に留まり、抵抗する道を選んでいたことだった。
危機に瀕したことで張り詰め、研ぎ澄まされた思考の中で、掠れて途切れ途切れとなったゼルダの声を聞きとった少年は、戦闘の最中の昂りのままに声を張り上げた。

「君を…ゼルダを見捨てるなんてそんなこと、考えることだってしたくない!!」

自分は彼に、名前を教えていたっけ。

現状にそぐわな過ぎる、そんな些細な疑問は、小石に足を取られて体勢を崩した少年へと向けて、モリブリンが巨大な拳を振りかぶった光景で掻き消された。

胸の内の、更に深い底の底、魂から湧き上がる衝動のままに、ゼルダは叫んだ。

「リンク!!」

どこからか飛び出してきたそれが、未だ聞いていない筈の少年の名だということを、ゼルダは不思議と確信していた。

その名が彼女に力をくれた…心身を侵していた恐怖が掃われ、手近なところに転がっていた石を渾身の力と怒りを込めて投げつける。

少女の細腕と、それで投げられる程度の大きさの石では、例え完璧に当たったとしても魔物相手に大した痛手を与えられるような代物ではない。

しかし、『彼』にとってはそれで、後頭部に受けた衝撃に思わず気が散った僅かな隙で十分だった。

全身に力を漲らせる、腹の底からの渾身の雄叫びと共に、目の前の巨体へと飛びかかる。

反射的に振り返った先に見た、獲物でしかなかった筈の少年の猛々しい姿とその手が振るう刃のきらめきが、モリブリンの瞳が最後に捉えた光景となった。

必死の剣幕で駆け込んできた少年の言葉を受けて、カカリコ村は大変な騒ぎに見舞われた。
遊びに出ていた子供達を急いで家へと戻す者、捜索隊の一員として支度を急ぐ者、危険の只中にいる孫を案じて半狂乱になる老婆を必死に宥める者。
森の奥に作られたと思われる魔物の巣は、近いうちに必ず見つけて掃討しなければならないものの、今の段階で何よりも優先しなければならないことは他にある。
止めなければ村を飛び出しかねない勢いだった老婆と、担ぎ込まれた村で治療を施されながら少女を案じ続けていた女性の為にも、一刻も早く探し出して保護しなければ。
魔物に強襲される可能性を考え、怯えながら、それでも懸命に森へと踏み込んでいた村人達は、数時間の捜索を経た後に見つけることとなる。
固く手を握り合い、肩を寄せ合いながら、木の幹に寄りかかって寝息を立てていた少年と少女の姿を。
二人の無事を確認してホッと一息ついた村人達は、次の瞬間、揃いも揃って盛大な悲鳴を響かせた。
無理もない、むしろ当然の反応と言える。
穏やかに眠る二人からそう離れていないところに、折れた剣を胸に

深々と突き刺した、巨大な魔物の死骸が転がっていたのだから。？

発覚

「インパ…ごめんなさい、私を庇ったあまりにこんな怪我を」
「いいえ、本望でございます」

魔物に攫われるのを見ていることしか出来なかった少女が、怪我も無い元気な姿で、この腕の中に帰ってきた。
インパにとってはそれだけで、傷の痛みを忘れることなどたやすかった。

「本当に、よくぞご無事で……」
「リンクのおかげです。
私を守ってくれたの、本当に格好良かった」

そう言いながら笑って見せたゼルダに、インパは喜ぶよりも先に驚いてしまった。
ここ数年のゼルダは、考えたり、悩んだり、悲しんだり、苦しんだりということばかりで。
こんな年相応の愛らしい笑顔なんて、信頼されていると自負しているインパでさえ、しばらく見せてくれたことが無かった。
胸の中に巣食っていた、大きく重い何かを、彼女は吹っ切ることが出来たのだ。
そのきっかけとなったであろう者、ゼルダが口にした名前の主に、インパは一人だけ心当たりがあった。

「あの緑の服の少年ですか。
確かに、あの立ち回りは素晴らしかった」
「彼は『あの本』の内容を知っていました、それに則った戦い方で魔物を圧倒していたのです」
「ということは、彼に尋ねさえすれば、本の著者が分かるのですね。

……それにしても、予想を遥かに超えた収穫でした。
著者に会いに来た先で、まさかゼルダ様の専属騎士の候補を見つけることが出来るだなんて」
「せ、専属騎士……リンクが、私の？」
「お嫌ですか？」

インパの少々意地悪な問いかけに、ゼルダは真っ赤になってしまった顔で、懸命に首を横に振る仕草で応えた。
魔物を単独で倒せる実力、群れを相手に怯まない度量、そして何より身を呈してゼルダを守ってくれた精神性。
国よりも個人への忠誠と献身が求められる専属騎士に申し分ない素質を、あの少年は既に教えられるまでもなく備えていた。
彼と、彼の家族が了承してくれさえすれば、帰る際に共に王都へと連れて行きたい。
そんなことまで考えていたインパと、彼女が提示した明るい未来の可能性に想いを馳せるゼルダの下に、数人の村人達が現れた。
インパとゼルダが、話が出来そうな程度には元気であることを確認した彼らは、当人達に了承を得た上で、村へと来た目的、襲われた際の細かい状況などを尋ねていく。
インパが自分の分まで話してくれるおかげで、少し手持ち無沙汰となってしまったゼルダは、何気なく辺りを見回していた。
そうして、あの時リンクと共に現れたもう一人の少年が、大人達に紛れてやって来ていたことに気がついた。
早々に助けが来たのは、彼が村まで人を呼びに行ってくれたからだということを思い出したゼルダは、彼にもお礼をしなければと口を開く。
そんなさり気ない仕草は、声は、インパから話を聞いていた村人達が突如上げた素っ頓狂な声で掻き消されてしまった。

「リンクが魔物を倒したって。
そんな馬鹿な、在り得ないだろ」

「馬鹿なも何も……私達は確かに彼に助けられた、彼が魔物を倒すところをこの目で見たのだ」
「そうは言うけど。
……あの『変わり者』が、まさかそんな」
「そんな度胸や能力が、あの引き篭もりにあったとは思えないんだが」
「大体あいつ、成人したばかりじゃないか」
「そう言えば着てたな、成人祝いの晴れ着。
今日がそうだったのか、知らなかった」

若干の苛立ちを、声と気配に滲ませるインパの様子に気圧されながらも、村人が口にするのはリンクの活躍を疑い、彼をあからさまな異端として遠巻きにしていたことを匂わせるような発言ばかり。
そんな状況に、『変わり者』という呼ばれように、ゼルダは覚えがあった。

（私と同じ……）

村人達が彼を見る目、語る声、彼を取り巻くこの空気は正しく、ゼルダが日々押し潰されそうに感じていた王宮のそれと同じもの。
徐々に呼吸が荒く、浅くなり始めたゼルダの様子に気付いたインパが、彼女と、更にはリンクの為に声を張り上げた。

「何なのだ、お前達のその言い様は！
彼が一体何をした、何故そうも軽んじられなければならない!!」
「な、何をしたと言うか……むしろ、何もしてないと言うか」
「実際変な奴なんだよ。
村どころか、家の外にすら殆ど出やしない」
「たまにうちの店に来た時だって、玩具や菓子になんて目もくれずに、紙やインクばかり大量に買っていくんだ。
悪い子だとは思っていないけど、どう接したらいいのかが分からなくて……」

「紙やインクって、そんなものを買って何をやってるんだ」
「あそこの家の婆さんに前聞いてみたんだけど、何でも本を作っているらしい。
部屋に閉じこもっている間、ずっと何かしら書いてるんだと」
「本を書いてる？　そんなことを、部屋にいる間ずっとだって？
何だ、やっぱり変な奴じゃないか」

自分達のことを少しずつ忘れて、いつの間にか身内で盛り上がっていた村人達のやり取りを、インパとゼルダは何も言えずに聞いていた。
正確には、驚きのあまりに言葉を発することすら出来なくなっていた。
村人達から遠巻きにされ、孤立していた少年。
この様子から察するに、村の誰かと特別に親しく話したり、何かを教えてもらったりしていたようには思えない。
なのに彼は『例の本』の内容を知っていた、それも実践で使いこなせるほどの習熟度でもって。
それらに加えて、彼が普段、多くの時間を何かしらの執筆に費やしていたという情報を考慮すれば。
導き出される答えはひとつだった、例えそれが信じがたいものだったとしても。

「……ひとつ、伺いたい。
以前、王都へと送られた献上品の荷馬車に、予定外の本を混ぜた者が誰なのかを知っているか？」
「なに、本だって？
カカリコ村の名産品は牛乳や革製品だぞ、誰がそんな半端なものを」
「あの本は、半端なものなどでは…っ！」

誇りある仕事を邪魔された、下らない悪戯で水を差された。

そんな声が聞こえそうな、屈辱と不快感に顔をしかめた村人達に、ついに我慢が出来なくなったゼルダが声を上げる。
しかし、それが村人達の耳へと届くことはなかった。
ゼルダと同じ瞬間、彼女が発した声を掻き消す勢いで、更なる声を張り上げた者がいたのだから。

「やっぱりあんた達、あの本を読んでここまで来たのか!!
あいつの凄さに気付いてくれたんだな!!」

大人達の陰に隠れながら、息をひそめて状況を窺い続けていた少年が、興奮のあまりに声を上ずらせながら飛び出してきた。
ゼルダとインパが疑問の全てを解消するのは、話を聞いて堪らなくなったゼルダが緑衣の少年の姿を求めて部屋を飛び出すことになるのは、もう少しだけ後のこと。

故郷からの旅立ち

「この国には……私には、あなたが必要なのです」

村外れの高台の、周囲を一望できる大樹の下という絵になりすぎる状況で、姫自身の心からの言葉で請われた俺は、流れのままに頷いていた。

……と言うと、自分自身の本当の意思に沿わないことだったかのように思われそうだけど、そんなことは無い。

バドが例の本を王都に送る馬車に勝手に乗せて、それがなぜか王様のところまで届いて、偉い人達を含めた大勢に読まれたと聞いた時は、頭を抱えながら悶え転げたい衝動を堪えるのに必死だったけれど。

その内容が本当に役に立ったこと、前線で戦う兵士を含めた大勢の人を救う力を持っていること、俺を好待遇で召し抱えようという話が城では積極的に進められているということを、ゼルダは、自身が姫であることを明かした後に教えてくれた。

自分のことしか考えられずに、狭い世界に閉じこもって燻っていた思考を思いっきり殴りつけられたかのような、目の前が明るく晴れていくような感覚を覚えた。

自分の為でしかなかった筈の執筆が、物語をきちんと書くための資料集のつもりでまとめた魔物の本が。

俺の行いが誰かを助けることが、この世界に貢献することが出来たなんて。

俺はもう、立派にこの世界の一員だったと言ってもらえたように、認めてもらえたように思えて、涙が溢れるくらいに嬉しかった。

そんな時に、手を取られながら真剣な眼差しで『力を貸してください』と頼まれれば、それはもう引き受けるしか無いだろう。

『勇者らしく』とか、『リンクならば』とか、そんなことを考えなかった訳ではないけれど。

最終的に後押ししたのは、目の前の彼女の力になりたいという、俺自身の想いだった。

手を繋ぎながら村の、インパのところまで戻り、姫の説得を受けて仕官を了承したことを伝えたら、思わず引くような勢いで喜ばれた。

何でもゼルダは、責任感の強さと真面目さが高じたあまりに一生懸命になりすぎて、空回りを続けたあげくに、城ですっかり孤立してしまっていたらしい。

本人は何やら吹っ切って、心機一転して頑張るつもりでいるらしいけれど、頼れる味方が少ないという現状は変わらなかった。

そんな時に、俺というゼルダの味方になってくれる人材を得られたことは、ゼルダを案ずるインパにとっては正しく渡りに船の思いだったそうだ。

何があってもゼルダの味方でいると、きちんと言葉にして誓った俺に、インパは心から感謝してくれた。

ばあちゃんを説得するのが一番の難関だと思っていたけれど、意外にもばあちゃんは冷静で、俺が王都へと行くことを二つ返事で認めてくれた。

確かに寂しいし、心配だけれど……人と共に生きていくことを諦めていたようにも見えていた俺が、進みたいと思える道を見つけて踏み出してくれたことが嬉しいと。

涙ながらに言われてしまっては、長年に渡り心配をかけ続けてしまったことを謝り、何も言わずに送り出してくれることへの感謝を述べることしか出来なかった。

行商の馬車の出発に合わせて村を出ようとした俺達を、バドが見送りに来てくれた。

たまに腹が立つくらいに強引だった彼が、こんなギリギリになるまで顔を見せなかったことについて問い質してみれば、彼らしくなさすぎて気持ちが悪くなりそうな煮え切らなさで口を開いた。
何でも、例の本を勝手に王都へと送った件で、俺が怒っているんじゃないかと思っていたらしい。
……分かってるじゃないか。
ならば遠慮はいらないなと、若干俯いた脳天に拳を落とした。
個人的にもとんでもなく恥ずかしかったし、一歩間違えればカカリコ村全体の信用に関わる事態にだってなりかねなかったのだ。
結果的にいい方向に動いたからって、そこを大目に見てはいけない。
突然の暴挙に驚いたゼルダとインパが、取り成そうと割って入る前に、俺は最後の言葉を伝えるために口を開いた。
今までありがとう、と。
一緒に過ごしてくれて、俺のために色々なことをしてくれて、本当に嬉しかった、と。
ばあちゃんと、そしてお前がいてくれたから、俺はこの世界で今まで頑張れたんだ、と。
ずっと思っていた、言う機会が無かった本心を俯くバドの特徴的な髪型に向けて一方的に吐き出した俺は、バドの答えを待つことなくそのまま村を飛び出した。
慌てて追いかけてきたゼルダ達が、あんな別れ方で良かったのかと聞いてきたけれど。
これでいいんだ。
俯いて見えずにいた彼の目元から零れて、地面に滴っていたものが何なのかなんて、男友達の仲においては野暮な追及でしかないのだから。

これが俺の、『リンク』の、今生における旅立ちである。
……例の緑の服を着たままだったということに、城に着くどころか王様に会うまで気付かず。
この格好が俺の故郷において由緒あるものだということを、気を使ったインパが説明してくれたおかげで、この服が俺にとっての正装として城内で定着してしまうという謎の展開が待ち構えていることを、この時の俺は知る由も無かった。

王宮で過ごす日々

『戦術顧問』という前提で、リンクを王宮へと連れて帰った私達だったけれど、彼を前にした皆の反応は芳しいものではなかった。

それ自体は無理もないと、私自身もそう思う。

長年に渡って優秀な人材が不足していて、能力さえあれば相応の地位で取り立てると公言してはいるけれど。

それが成人の区切りを迎えたばかりの……散々子ども扱いしてきた姫と同い年の少年だなどとは、流石に考えてはいなかっただろうから。

それでもお父様は、あの本を独学で書き上げたというリンクの能力を純粋に、高く評価し、公言していた通りの『戦術顧問』の役職で以って迎えようとしたのだけれど。

例え王にその気があったとしても、信頼する重鎮達から渋られてしまえば無視は出来ない。

家族や友人の下を離れてまで、彼が一人こんな遠いところまで来てくれたのは、私達の助けを求める声に応えてくれたからなのに。

申し訳なさと居た堪れなさに縮こまる私を励まそうとするかのように、自身を疑う声が飛び交う中で、リンクは堂々とその一歩を踏み出した。

そうしてリンクは、戦術顧問ではなく、私付きの専属騎士見習いとして城に入ることとなった。

今後の活躍と功績を、生まれや年齢の色眼鏡で見るようなことはせずに、正当な評価で以って判断すること。

役職についてはその結果によって改めて決めることを自ら提案したリンクに、本当に実力があるならばそれくらい成し遂げて当然だと追随した重鎮達に押し通される形で、お父様はその案を受け入れた。

……後から考えれば、取り立てられる者と、それに反対する者が意見を合わせていたあの光景は、結構おかしなものだったような気がする。

役職に就くことを目標に、活躍の場と功績を求めるならば、基本私の傍に控えていなければならない立場に意味はない。
むしろ、城中から持て余されてしまっている姫の側付きなんて、一緒に遠巻きにされてしまってもおかしくはないのに。
それでもリンクは、何よりも私の助けとなる為にここまで来たのだと言って、お父様に直談判をしてまでその為の立場を得てくれた。
その気持ちは本当に、間違いなく嬉しかったのだけれど。
彼は私とは違い、今すぐにだって国のために役立てられる程の力を持っているのに。
それを、私のような『執務ごっこ』しか出来ない者の傍で燻らせてしまうなんて。
吹っ切った筈なのに、また落ち込んで考え出してしまった私の自嘲交じりの呟きに、彼は本当に何気ない様子で口を開いた

「いいんじゃないかな、『執務ごっこ』で……と言うより、遊び感覚から始めて。
人間でも動物でも、子供の頃の『遊び』っていうのは、大人になった時の為の練習なんだ。
ゼルダは真面目だから、『大事な執務で遊びなんて』って思うかもしれないけれど。
『執務で遊ぶ』んじゃない、『遊びを執務に生かす』んだ。
ゼルダは今まで、遊んだこと…練習したこと、あんまり無いんだろ？
ぶっつけ本番じゃあ失敗するのは無理もない、まずはそこを自覚しないと」

そんなリンクの発言は、今まで悩み続けてきた私にとっては、世界が開けるような衝撃だった。
頭の中で、胸の奥で凝り固まっていたものが、あっけなくポロリと零れ落ちたかのような感覚を味わった。
拳を握り、気合いを込めて「遊びます!!」と叫んだ私に笑みを零したリンクは、「まずは探検だ」と私の手を引いて広い城内へと歩み出した。
慣れ親しんだ筈の、大きく広すぎて重苦しかった筈の城内が、探検だと思うだけ、心の持ちようが変わるだけ、同じ思いを分かち合いながら共に歩んでくれる者がいるだけで一変する。
未だかつて覚えのない、不思議な感覚だった。

姫と新顔の少年が共に、楽しげに城内を巡る様子に驚く者達もいたけれど、リンクが「姫様が城を案内してくれている」と言うだけで皆が納得してくれた。
『また遊んでいる』と思われていそうな気がして、人と接するのは苦手だったのだけれど。
全く気にならなかった、だって今は本当に遊んでいるのだから。
そうして城の者達と改めて、きちんと接してみれば。
……私は、私自身が思い込んでいた程に疎まれてはいなかった。
むしろ皆が、いつも一人で悩んでいた私を案じてくれていた。
年相応に笑う姿にホッと胸を撫で下ろす者、もう一人ではなくなったことを喜んでくれる者、姫様をくれぐれも頼んだぞとリンクに念を押す者。
殻に閉じこもったせいで、気付けずにいただけで、皆は私を愛してくれていたのだ。
ようやく気付けた事実に堪らなくなり、物陰で泣き崩れてしまった

時も、リンクは変わらず傍にいて慰めてくれた。
仕事場にお邪魔した時は、どこでも流石に嫌な顔をされてしまったけれど。
「子供は我が儘を言うもの、そして子供扱いしているのは向こうの方だ」と言いながら手を引いてくれたリンクのおかげで、勇気を出して足を踏み出せた。
邪魔にならないように出来る限り隅に寄り、皆がそれぞれの仕事や役割を真剣にこなしていくさまに、口を挟むのではなく静かに耳を傾け、目を輝かせる。
そうしている内に、何時からかそっと椅子を用意してくれたり、仕事が落ち着いた頃合いで皆の方から声をかけてくれるようになったのだ。
厨房で料理やお菓子の試作品を味見させてもらったり、女中達のまるで魔法のような掃除の技を見せてもらったり。
『あの』恐怖を味わう者を少しでも減らそうとしている兵士達の鍛錬を見守ったり、図書室にて文官達から教えてもらったお勧めの本を二人で暗くなるまで読んだり。
それに加えて、探し物や届け物など、今の私達でも出来るような簡単な手伝いを毎日、少しずつこなしていった日々の中で。
楽しく遊んでいただけだった筈の私達は、いつの間にか、城のどこに行っても親しく名を呼ばれ、誰からも笑顔で迎えられるようになっていた。

人と直接触れ合うこと、一人一人をきちんと知ること、地道な努力と信頼を積み重ねること。
たったそれだけの筈、こんな簡単で当たり前の筈のことが、私にはずっと見えていなかった。

リンクが教えてくれたこと、与えてくれたものの素晴らしさと尊さを噛みしめながら、私は、やはり今のままでは駄目だという考えを日々強めていた。
リンクの活躍はこんなものでは終わらない。
相応しい場さえあれば、もっともっと大きなことを彼は為せるのだという確信があった。
そうだ……もしや彼ならば、『あの謎』を解くことが出来るのでは。
そう考えた私は、リンクが城を訪れてから一月ほどが経ったある日のこと、いつもの当てのない探検と思わせて彼をある場所へと連れて行った。
その結果、彼は見事に、ハイラル王家を長年に渡って悩ませていた謎を解いてみせた。
これがリンクの…少し先の未来で、ハイラル王国史上最年少の戦術顧問として名を馳せることとなる彼が、最初に成し遂げた功績となる。

伝説を知る者

「ここは、『開かずの宝物庫』と呼ばれている場所です。
収められているのは国宝級の宝ばかり…ご先祖様が、後の者達への試練として遺されたと伝わってはいるのですが。
記録によれば、閉じられて以来一度たりとも、この扉が開かれたことはありません。
扉に刻まれたこの暗号を、誰一人として解くことが出来なかったのです」

明確な目的を持って何処かへと向かうゼルダに、何も言わずについていった俺は、城の地下にて、剥き出しの岩肌に仰々しく聳える巨大な扉の前へと案内された。
その説明と、縋るような期待の眼差しを向けられてしまえば、彼女が自分に何を求めているのかは言われずとも察することが出来た。
普通だったら、城勤めするようになったとは言え、一介の元村人に何という無茶ぶりを……と、文句を言うようなことなのだろうが。
生憎とこれに関しては、ゼルダの考えは正しかったと言えるだろう。
何せ俺には、多くの知恵者が散っていったという、扉に描かれた暗号の謎が理解できるのだから。
……いや。これに関しては、むしろハイリア人に理解しろと言う方が無茶ぶりかもしれない。
知らなければ、ただの等間隔で真横に引かれた線の束と、その上に何らかの法則性で以って並べられた丸い印以外の何にも見えないであろうそれは、紛れもない『五線譜』だった。
『ゼルダの伝説』において、音楽要素は非常に大きく重要なものである。
オカリナやタクトなどタイトルに音楽関係の単語が盛り込まれていたり、攻略を進める中で大きな力や意味を持っていたり。

多くのゼル伝プレイヤーの例に漏れず、俺も簡単な楽譜なら読めるし、俺でも使える楽器さえあれば弾くことだって出来る。
なので、記されている音階を奏でることが鍵だというのなら、解くこと自体は問題なく出来るのだが……生憎と、予想外だった為に楽器の持ち合わせが無かった。
暗号の解き方に心当たりが出来たから、一旦戻って準備をしたい。
言おうとしたその言葉は、何人分もの気配が急に近づき、辺りが騒がしくなったことで妨げられた。

「お父様、なぜここに…」
「見ての通りです、陛下!!
貴き者に相応しくない振る舞いを続け、斯様な田舎者を重用した挙句にこんなところにまで連れてくるなんて!!
近頃の姫様はおかしくなられてしまった、全ての原因はあの者ですぞ!!」

そんな発言をしている者の顔に覚えがあった、俺を取り立てることに躊躇うを通り越して断固反対を貫いていた奴だ。
ゼルダ曰く、貴族至上主義で平民を軽視してあまり評判が良くないものの、先祖代々尽くしてきた功績と王家への忠誠は持ち得ていることから、王の側近を任されている者らしい。
そりゃあ確かに、そんな立場の人からすれば、ぽっと出の分際で姫の傍にいることを許されているような奴は目障りだろうけれど。
……側近だと言うならせめて気づけよ、お前の発言を受ける陛下の表情がどんどん不機嫌になっていることに。
立場上明言こそ出来ないでいるものの、多くの人と接し、良い関係を築き、色々なことを学びながら楽しそうに笑うようになった最近のゼルダを、陛下は喜んで見守っていると、少し前にインパが教えてくれたのだ。
そもそも、平民であろうと能力があるのならば取り立てると公言している陛下に、平民軽視の思想をもろにぶつけてどうする。

……いや、今はそんなことに気を取られている場合じゃない。
王家の機密とも言える場所に、ただの見習い騎士でしかない存在を独断で連れてきてしまったゼルダの立場が危ないのは、紛れもない事実なのだ。
この状況を一発で覆すには、ゼルダの判断と行動が間違っていなかったことを、彼女が信じたものが正しかったことを、今すぐ証明してみせるしかない。
さっきは楽器が無いって言っていたけど、実際にはある。
多くの生き物が、生まれながらに持ち得ている原初の楽器が、『声』がある。
練習した覚えはないし、恥ずかしいけれど、今はやるしかない。
そう思って、覚悟を決めて、大きく息を吸った……その瞬間。
覚えのある感覚が、執筆をしている時によく起こっていた追体験が、予想外のタイミングで現れた。
俺のものではない…その筈の記憶の中で、『俺』は歌っていた。
高大な雪山を望む北の村の高台で、父親によく似て歌が大好きな、よく母親を困らせる元気で愛らしい五人姉妹と共に、楽しそうに歌っていた。
息の出し方を、吸い方を。
『歌い方』というものを、俺は知っている。
そう認識し、受け入れると同時に、初めての行いに対して抱いていた筈の緊張は瞬く間に解けた。

勝手な行動を咎められ、追い詰められていた筈の状況でいきなり歌い出した俺に、ゼルダを含めた一同は呆気に取られた様子だった。
何が起こっているのかを把握しきれず、言葉なく立ち尽くしてしまっていたのは、ほんの僅かな間だけのこと。
俺の歌声に辺りの岩肌が共鳴し、扉の五線譜が青い光を放ち出した

ことで、先程までとは違う喧騒が起こり始めた。
そんな中でただ一人、冷静に状況の移り変わりを見定めていた俺は、五線譜の光が予想とは違う変化を見せ始めたことに逸早く気がついた。
少しの間周囲を飛びまわっていた光が扉の前に集まり、収縮し、短い文章を形作る。
それは、新たな『問いかけ』だった。
五線譜の仕掛けがこれを解放するための鍵でしかなかったことに気付き、軽く舌を打ちながらも、今更この流れを止める訳にはいかない。
青い光に触れながら意識すれば干渉できることに気付いたので、それを使って解答を続けた。

『創世の三女神とは』
「ディン、フロル、ネール」

『永遠に子供の姿をした森の民は』
「コキリ族」

『かつて空の島で暮らしていた人々が心を通わせ、共に空を飛んでいた生物は』
「ロフトバード」

『黄昏の姫君の名は』
「ミドナ」

答え始めた当初こそ、分からない質問が出てきたらどうしようと思っていたけれど、数問答えた頃にはその不安は消えていた。
出てくる問題は、『ゼルダの伝説』を知らなければ答えようがないけれど、シリーズを通して多少プレイしてさえいれば分かる程度のものばかりだったからだ。

そうして、問いかけに答えることに夢中になっていた俺は……目の前で解かれながらも、その答えの意味を全く理解できないような問いかけに、次から次へと問題なく答えていくさまを、居合わせた者達が呆然としながら見ていたことに気付けなかった。

そうして、ほぼ無心で答え続けた十八問目。

問いかけは文章だけでなく、形を伴って示された。

『勇気・知恵・力を正しい在り方で構築せよ』

その一文の真下で、青い光が正三角形を形作る。

問いの意味を理解した俺は、その正三角形に触れながら、『正しい在り方』をイメージした。

上が『力』、左下が『知恵』、そして右下が『勇気』。

完成した聖三角…トライフォースがそれまでになかった眩い輝きを放ち出し、扉がついに開かれた。

轟音と振動を伴いながら、数百年ぶりに開かれた宝物庫の扉の向こうに、たまたまこの場に居合わせることとなった全ての者が目を奪われる。

思わず駆け込んでいった大人達の後に、ゆっくりと続いた俺とゼルダの瞳に映った光景は、正しく『宝物庫』の名に相応しい煌びやかさだった。

王の冠や錫杖に誂えてもおかしくないような、質も大きさも見るからに最上級の宝石が、そこらに幾つも転がっていたり。

至る所に安置されている武器や鎧は、その全てが名のある騎士の家で家宝とされていてもおかしくないような品だった。

彫刻や絵画などの美術品の類いも、最低でも数百年の時を経たとは思えないような保存状態の良さを保っていた。

恐らくは扉だけでなく、この宝物庫全体が魔法によって守られていたのだろう。

興奮に上気した頬で、上擦った声でそのようなことを口にしたゼルダだったが、生憎と俺は聞けていなかった。
宝物の山にさり気なく紛れていた『とあるもの』に、目と意識を完全に奪われてしまっていたから。

「リンクよ、でかしたぞ！
わしからの褒美だ、ここにあるものをどれかひとつくれてやろう。
何でも構わん、好きに選ぶがいい」

この以上ない程の上機嫌でそう言って、側近の猛反対を「リンクが扉を開けなければ何ひとつとして手に入らなかったのだぞ」と一笑に伏して。
そんな王様の言葉を、数秒の間を置いてようやく理解した俺は、込み上げる興奮に息を荒げながら、既に手にしていたものを突き出した。

「そ、それでは陛下…これを頂きます！」
「……何だ、その石の板は。
お主はゼルダの騎士なのだから、立派な武器などを選んだ方が良いのではないか？」
「お気遣い痛み入ります……しかし私は、本当にこれが欲しいのです」
「お主がそこまで言うのならば否は言わん、好きにするが良い」
「ありがとうございます！」

価値ある宝を差し置いて、あんな変なものを選ぶなんて見る目がない……という視線があからさまに向けられているのを感じたけれど、これっぽっちも気にならなかった。
飛び跳ねて喜びたいほどの興奮を必死に抑える俺の手元を、興味津々といった様子でゼルダが覗き込んでくる。
どうやら彼女は、俺が見る目が無くて変なものを選んだのではなく、むしろその逆、誰もが気付けなかった本当のお宝を見出したのだ

と思ってくれたようだった。

「リンク、それは一体何なのですか？」

「ちょっと待って」

かつての感覚に従って壁面に触れる、想定通りに動き出してくれたことで笑みがより一層深くなるのを感じた。

「ゼルダ、こっち向いて」

キョトンとした彼女の顔が、俺が構えた石板へと向けられた瞬間に狙いの機能を稼働させる。

『カシャリ』という謎の音が鳴り、驚いて息を呑んだゼルダに『本命』の品を見せてみれば、思わず声を上げるという予想以上の反応を見せてくれた。

「これ、私です！」

『ウツシエ』は問題なし。

あとは、どんな機能が残ってるかな」

（それにしても……『今』の世は、シリーズで最も新しいとされていたあのタイトルより、更に後の時代だったんだなあ）

今自分がいるのは、時系列のどのタイミング、どの隙間の部分なのだろうかと、随分と考えてはいたのだが。

まさか最も後の時代にいるとは思わなかった、それをこんな形で知ることになるとも。

手の中にある『シーカーストーン』の重みが何故か懐かしく、そしてやけに感慨深く思えた。

先ほどの、扉を開ける際の最後の問いかけが、トライフォースが、消えずに手へと吸い込まれたように見えていたのだけれど。

この時の俺は気のせいだと一蹴して、シーカーストーンというお宝に夢中になって、あっという間に忘れてしまっていた。

嘆願と実力行使

その後数日かけて、俺とゼルダはシーカーストーンで遊び倒した。
何の機能が残っているのかと、それをきちんと動かせるのかを確認する為に始めたことだったけれど、そんな真面目な話が頭から完全にすっぽ抜けるのにあまり時間はかからなかった。
驚いたことに、『ブレス・オブ・ザ・ワイルド』においては百年置いた時点で多少出てしまっていた不具合が、数百年ぶりの起動の筈なのに全く見受けられなかった。
マグネキャッチやビタロックなど、重要かつ強力な機能のどれもが問題なく使うことができた。
これはやはり、宝物庫にかけられていたであろう魔法の影響か…プルアや、彼女の後に続いたであろう技術者達の努力の賜物かもしれない。
一番便利で頼りにしていた、この時代にはタワー以前に入力する為の元データが無いので諦めていたマップ機能が、自分で作成・編集できる柔軟な仕様へと改造されていたことからも、本編終了後の語られない歴史の中でも頑張っていた人達が居たことは見受けられた。
確認を進めるうちに、期待以上のものを見つけることもできた。
何と『ワープマーカー』、更には『マスターバイク零式』といったダウンロードコンテンツのアイテムまでもが収納されていたのだ。
馬の訓練施設を貸してもらって、後ろにゼルダを乗せて…何気にスピード狂だったことが明らかになってしまった彼女の歓声と、騒ぎを聞きつけて集まってきた野次馬達の驚愕の喧騒を聞きながら、俺はとある重大な決意を固めていた。

シーカーストーンの仕様確認を、城の至る所で、隠す気も無いまま行なっていたおかげで、「先日賜った品に関して王に申し上げたいことがある」という申請はあっさりと通った。

仰々しく通された謁見の間にて、俺の手の中にあるシーカーストーンに、あの時は豪華な宝物の中になぜか紛れていた石のガラクタとしか思われていなかったものに、痛いほどの視線が注がれているのを感じる。

仲良くなった文官から聞いた話を、例の側近が「あんな凄いものを平民上がりに持たせることはありません、徴収しましょう！」と王に訴え、「彼に見る目があっただけの話だ」と一蹴されていたということを思い出した俺とゼルダは、張り詰めた空気の中でこっそりと笑い合った。

城内で噂になっていたおかげで、もはや説明するまでもなかったシーカーストーンの存在を軸に申し出たのは、俺とゼルダに旅に出る許可を与えてほしいというものだった。

ゼルダの傍にいるかぎり、功績を上げる機会に恵まれないと言うのならば……ゼルダを連れてその機会を探しに行けばいいだけのこと、逆転の発想というやつだ。

シーカーストーンに満載された便利機能に加えて、魔物に囲まれたとしても問題なく逃げ切れる速さと耐久性を備えているマスターバイクと、例え本当の危機に陥ったとしても瞬時に帰還することができ

るワープマーカーの存在を押し出せば、許可をもぎ取れる自信は十分あった。
予め話を通したことでやる気になっていたゼルダ自身も、自らの言葉で必死の思いをぶつける。
自分が未だ無知で未熟であること、与えられた知識では理解したつもりになるだけだということ。
城の者達から教えられた広い世界をこの目で見て、感じて、王家の務めを果たさなければならなくなる時の為の備えとしたいこと。
王や重鎮達の忙しく責任のある立場でそれは叶わない。
幼く、未熟で、だからこそ自由な自分だからこそ果たせる務めだと思っていること。
それは、『姫』という臣下から『王』へと向けられる嘆願という形で発せられた、『娘』から『父』への渾身の我がままだった。
王が『王』としてだけでなく『父』としても揺れ始めていることに気付いた側近が、慌てた様子でこの話の至らない部分を探し出す。
そうして見つけたのは、姫の護衛役が俺一人になってしまうということの不安と不信だった。
その点を、城内一の強者たる兵士長にして、ゼルダガチ勢の筆頭でもあるインパに対して指摘することで、賛同者を増やして流れを掴もうとする手腕自体は流石だと思うけれど。
……生憎と、既に手は打ってあるのだった。

「リンクが付きっきりで御守りすると言うのならば、私に不安はありませんね。
もはや一兵卒程度では、束になってかかろうとも相手にならなくなってしまいましたから」
「……は？」

思わず間抜けな声を漏らしてしまった側近の、王の、その場に居合わせた重鎮達の、我が耳を疑いながらの二度見三度見が向けられる。
それを何食わぬ顔で流しながら、俺は、澄ました表情で片目を瞑っ

たインパへと口の端を僅かに上げる仕草で応えた。
前もって味方を増やしておく根回しは当然……むしろ俺にとっては、ゼルダのことを本当に大切に思っているインパに認めてもらうことは、何よりもの優先事項だった。

「信じられないと仰るならば、今この場で証明することも出来ますが」
「い、今この場で……？」
「姫様、こちらへ！」

自身を呼ぶインパの声に、ゼルダは、俺と目を合わせて頷き合ってから駆け出した。
自分の傍という安全地帯まで、ゼルダが来たことを確認したインパは、部屋の脇で置物のように立っていた鎧姿の兵士達へと合図を送る。
途端に彼らは、日々の鍛錬の成果が窺える見事な身のこなしで、俺へと向けて一斉に襲いかかってきた。
それに対して俺が背中から抜いたのは、騎士見習いに形だけでもということで支給されていた、思いっきり振れば切れないことはない程度の安物の剣。
対して相手は複数、しかも得物は王や民を守るための実戦を意識した上物の槍。
開始時の状況からして圧倒的な差があるのに加えて、成人したばかりの年下を相手に、大人げなく全力で向かってきた兵士達。
それを全員まとめて、傷ひとつ負うことなく、謁見の間の高級絨毯へと沈めてやった。

「……おいリンク、お前少しは手加減しろ」
「それは、大勢で一斉に、全力で襲ってこられた俺の台詞だと思うんだけど」
「その余裕ぶりでよく言うぜ」
「そもそも、情けも容赦も遠慮も一切要らないって言ったのはお前だ

ろ」
「まあね、ありがとう」
城で務め出してから約一ヵ月。
インパが指揮する兵士達の鍛錬に、ゼルダが見学している間で参加させてもらった俺は、ゼルダと最初に会った時の戦闘で多少なりとも掴んでいた、『睡眠学習』ならぬ『追体験学習』で得た『リンク』の戦闘能力と勘を完全に自分のものにすべく頑張っていたのだ。
今ここで転がっているのは、みんな、その為に散々協力してもらった馴染みの顔ばかりなのである。
今日、この時の警護の当番をこの面子にする為に、インパだけでなく、鍛錬場で共に過ごした兵士達が揃って協力してくれた。
地道に築いた人脈と、気を使った根回しはやはり大切だと、何気に実感させられた一件だった。
騒めく重鎮や側近達の向こう側で、玉座に座った王様が、今にも声を上げて笑い出したいのを堪えているのが見える。
インパの傍で、目をキラキラさせながら俺のことを見守ってくれていたゼルダに、俺も渾身の笑みで応えた。

二度目の旅立ち

そうして、私達は旅に出ることとなった。
旅と言っても、使用した際には誰かがすぐに気づけるようにと、大広間に設置したワープマーカーへといつでも、少なくとも月に一度は帰ることを約束した上での、とても気軽なものだったけれど。

「気の向くまま、自由気ままな旅ってのも面白そうだけど。
『功績を立てる』っていう目的があるのなら、ある程度行動と行き先に目星をつけておいた方がいいな」

そう言ったリンクが私に尋ねたのは、『重要ではあるけれど、現状において優先事項とはなっていない問題案件とは何か』ということだった。
案をまとめて、提出して、お父様達に認めていただこうと必死になって、色々と調べものをしていた私には、そういうものに関する心当たりも確かにあった。
リンク曰く……本当に重要で早急な問題にはお父様達が既に取り組んでいる、下手に手を出しても邪魔になって印象を悪くするのがオチだと。
ならば狙うのは次点、優先順位の問題で後回しになってしまっているだけの、解決もしくは好転させることが出来れば間違いなく国の利益となるような案件だと。
リンクの懸念は正しく、以前の私がお父様達を困らせてしまっていた理由そのもので。
最も大きな問題しか見えていなかった私では、思いつくことも考えることもできなかったことをスラスラと口にするリンクは、本当に凄いと心から思った。

そうして私が、以前得た知識を元にまとめた旅の目標は、以下のようなものとなった。

『ゾーラ族との国交の再締結』
『ゴロン族から鉱石を購入する際に付加されている高額な税の緩和もしくは撤廃』
『リト族から向けられている悪感情の融和』
『ゲルド族との通商を再開し、交易場への立ち入り及び参加許可をもらう』

「どの民族も、かつてはハイラルと友好な関係を築いていたらしいのですが……」
「待って待って待ってゼルダ、昔のハイリア人は一体何をしたの」
「記録によれば……ゾーラ族の子供を、『珍しい魚』として飼うために誘拐しようとしたとか。
ゴロン族の大らかな気質を利用して、長年に渡り鉱石を買い叩いていたことが族長の代替わりで発覚したとか。
リト族の弓と歌を、見世物小屋で披露させようとした者がいたとか。
ゲルド族は男に媚びたがっていると思い込んで、交易場のゲルド族に求愛という名の侮辱をして回った者がいたとか」
「……何やってんの」
「……本当に」

信用できる資料をほんの少し見ただけで、彼らの大切な誇りと言えるものを尽く踏み躙ったことが察せられる。
彼らと再び友好な関係を結ぶことは、ハイラル王家にとっては代々の悲願なのだ。

「現状維持で特に大きな問題がないせいで、対応こそ後回しになってしまっていますが。
これらの件を何とかできれば、それは間違いなく『功績』となるでしょう」
「そうでなくても、これらに関しては個人的に何とかしたいと思うな、俺は……」

そう言って項垂れたリンクは、何やら酷い衝撃を受けたようだった。
『思い入れ』とも言えそうなものを感じるその様子を、少しだけ不思議に思いながらも、そのまま話を続けることにした。

『特定の地方で定期的に発生する異常気象の解明』
「不意に巻き起こる強風と共に、多量の落雷や氷雪、更には炎が降ってくるという謎の異常気象が報告されています。
地域の住民は不安な日々を送っているようですが、屋内にいる限り被害は免れるので、対応を後回しにされてしまっているのです」

『迷いの森の探索』
「どんなに気をつけ、目印などを残しても、迷って霧に巻かれた挙句に最初の場所へと戻ってきてしまうという謎の森です。
奥地に辿り着いたとして、何かしらの具体的な成果があるかどうかは不明ですが、多くの者達が挑みつつも出来なかったことを成し遂げればそれは快挙でしょう」

『大妖精の泉の捜索』
「稀に発見される小さな『妖精』が、人に恩恵をもたらしてくれること

は確認されています。
　その妖精を統べる者、出会った者に大いなる祝福を与えてくれるという大妖精様が暮らしている泉が、どこかに存在しているそうなのです」

『各地に点在している馬宿の実態調査』
「行商人や旅人など、人の行き来を支える重要な要となる場所なのですが、運用の殆どをその地の人に任せきりになってしまっているのが現状です。
　本来ならばきちんと視察を行ない、要望や改善点を確認した上で、きちんと支援を行うべきなのです」

『動物や植物などの詳細な生息地及び生態の調査を行なう』
「どの地域のどこに行けば、何を効率的に探し出せるか。
　これを細かくまとめることが出来れば多くの者が助かります、殆ど進んでいないせいで今は手探り状態ですから」

『訪れた場所、出会った人達の困り事や相談事に真摯に対応する』
「……ごめんなさい、これは私の我がままです。
　王家の手が届かないところで、きっと、沢山の人が色々な悩みを抱えています。
　全部をどうにか出来るとは思いません、だけど……せめて出会った人の、私達で何とか出来ることなら、してあげたいと思うのです」
　頬が熱くなるのを感じながら、俯きながらの私の言葉に、リンクは笑いながら頷いてくれた。

無為で適当な日々を過ごすことのないように、目標達成の明確な期限を作ることにした。
今から、一年よりも少し前。
私とリンクが初めて会った日、リンクの次の誕生日までに、これらの１０の案件をひとつでも多く解決していく。
改めてそう誓い合った次の日の朝、私達は、城の皆に見送られながら旅立った。？

ラネール地方

旅に出た私達は、まずはラネール地方にあるゾーラ族の里を訪れてみることにした。

長年に渡り整備がされていないためにすっかり荒れてしまい、『昔ここに道があったんだろうな』と辛うじて窺えるだけの山道を、リンクは巧みにマスターバイクを駆りながら、その頑丈さに任せて強引に登っていく。

歩き、もしくは馬で来ていれば、ここを通るだけで何日も費やしてしまっていただろう。

振動で舌を噛まないように、ひたすらリンクの背中にしがみ付くことだけを考えていた私は、急勾配を何とか登りきったところでようやく息をつくことが出来た。

「ハイリア人との交流が途絶えたことで、街道を整備する意味がなくなってしまったのですね」

「ゾーラ族だけなら、川を使えば済む話だからな」

国交を再開させるとなれば、必然的にこの道を整備する必要が出てくる。

現状で誰も困っていないのに、わざわざそんな時間と労力を注ぎ込む意味と利点がそこにあるのか。

……そんなことを問われてしまったらどうしよう。

思わず浮かんでしまった不安に、疑問に、今は答えを出すことが出来なかった。

そうして私達は、何とか里まで辿り着いたのだけど。
残念ながら、里に入ることは出来なかった。
ほんの少し近づいた時点で現れたゾーラ族から、交渉の余地もなく追い払われてしまったからだ。

「まあ、予想はしてた」
「ですよね。ハイリア人にとっては『今更』とも言えるような昔の話でも、長寿のゾーラ族には当時を知る方は居られるでしょうから」
「何とかして、『あいつらは昔のハイリア人とは違うみたいだ、話くらいは聞いてやろうかな』くらいには思ってもらわないと。
信用を得るためには、何よりも地道な実績の積み重ね……一体どうしたものか」

そんなことを考えていた私達の視界の端で、幾つかの小さな赤色と青色が動いた。
思わず振り返った先にいたのは、何とゾーラ族の子供達。
生まれて初めて間近に見るハイリア人に、言いつけよりも興味と冒険心の方が上回った様子だった。
私達と目が合ったことに驚き、慌てて散っていく魚の子達。
飛び込んだ木や岩の陰から、めげずにこちらを窺いだす可愛らしい姿に、私達は思わず顔を見合わせて吹き出してしまった。

「俺達はな、ゾーラ族の人達と仲直りをしに来たんだ」
「ケンカしたの？」
「喧嘩と言うよりも……とあるハイリア人が、ゾーラ族にとても酷いことをしてしまったんだよ。
ゾーラ族はそれに怒って、もうハイリア人と仲良くするのはやめ

るって言いだして。
昔のハイリア人は、悪いのは自分達だってことも、ゾーラ族が怒るのは当然だってこともわかっていたから、その通りにしたんだ。
だけど、昔はゾーラ族とハイリア人は本当に仲良しだったから、またそうなりたいんだよ」
「それって、リンクが小さいころのこと？」
「俺のじいちゃんのじいちゃんが小さかった頃かなあ」
「ええ～っ、そんなずっとケンカしてんの!?」
「友だちとケンカしたらすぐに仲なおりしなさいって、おかあさんたちいつも言ってるのに」
「大人の、しかも大勢でやった喧嘩っていうのは、そう簡単にはいかないんだ」

警戒心が解けて、馴染むを通りこしてすっかり懐かれた、何故か不思議と子供の相手が手慣れているリンクの様子は、思わず笑みが零れるほどに微笑ましいものだった。
ゾーラの里の近くで、しばらくの野営地と出来そうなところを見つけてひとまず落ち着いた私達は、熾した焚き火を可愛らしい客人達と共に囲みながら、改めて今後について話し合う。
「ケンカしたなら仲なおりしなきゃ」と、子供達が口々に協力を申し出てくれて、おかげで少しだけ方針を決められた。
彼らにこっそり、里の大人達が困っていること、求めているものを聞いてきてもらい、それに地道に応えていく。
……時間がかかるし、それで本当に信用を得られるかどうかも分からないけれど、今はとにかく行動するしかない。
そうして、その後私達はしばらくの間、ゾーラの里周りの山々を巡りながら、魚やカエルを獲ったり、夜光石を採掘したり、魔物を退治したりという日々を過ごした。
それを子供達に頼んで、「たまたまみつけた」「なんかやっつけられてた」という体で、里の大人達へと伝えてもらう。
最初こそ『たまにはそんなことも』と思ってくれたかもしれない大

人達も、流石に続けば不審を覚える。
実際リンクも、このところ視線を、見張られている気配を感じると言っていたし。
……いい流れだ。このまま、私達に敵意や害意など無いことを、直接その目で確かめてもらえれば。
そう思って、ここからが肝心だと気持ちを新たにした私達は、予想外の長雨にそれを妨げられることとなる。

「……止みませんね、もう三日目です」
「いい加減に薪が尽きてきた。
補充したいけど、この状況じゃあ木を伐っても……」

湿気てて到底使いものにならないだろう、乾かす場所も時間も無い。
雨が降る中での野営で体を温めない訳にもいかず、私達の猶予は何も出来ないでいる間にどんどん少なくなっていた。

「城に戻る判断は君に任せるよ」

シーカーストーンを使えばいつでも、今すぐにでも王宮へと帰ることが出来る。
だから諦めなくていい、少しくらいの無理なら大丈夫。
本当に駄目だと思ってしまうまで、気がすむまで粘ればいい。
焚き火に最も近く当たれる場所も、毛布も譲ってくれた上で、そんなことまで言ってくれる。
リンクが私の味方だということを、泣きたくなる程に頼もしく、嬉しく思いながら、私はもう少しだけ彼に甘えることにした。

「今日一日だけ、様子を見てみます」
「わかった。じゃあ、何か起きた時に備えておかないとな」

そう言ったリンクが、残った薪のほとんどを使って一気に火を強め、凍えていた体に久々の力が戻ってきた……そんな時だった。
雨で霞む景色の向こうから、私達の野営地へと近づいてくる幾つかの影が見えたのは。
咄嗟に剣を抜き、私を庇って前へと出たリンクに、影の主たちは慌てた様子で声を上げる。

「警戒することはないゾラ、危害を加える気は無いゾラ！」
「話しを聞きたいだけだゾラ！」
「ゾーラ族!?」

予想外のことに驚いた私達は、それでも咄嗟に雨よけの外套を羽織って駆け出した。
言う通り、私達への敵意や警戒心など持ち得ていない様子のゾーラ族から聞かされたのは、とんでもない事態が起こっているということだった。

「あの子達が、里を飛び出して行方不明!?」
「てっきり、君達のところへ行ったと思っていたゾラ……」
「一体どうしてそんなことに!!」

私達の必死な問いかけに、ゾーラ族達は、最近の里で起こっていた大きな変化について話してくれた。
私達の地道な活動は、ゾーラの里で予想以上に好意的に受け止められていたらしい。
当時のことをあまり詳しく知らない、若い世代を中心に、『話くらいは聞いてやろう』という風潮が生まれていたそうだ。

そんな時にこの長雨が始まり、ハイリア人はあまり体が冷えると病気になってしまうことを私達から聞いていた子供達が、「雨の間だけでも里に入れてあげよう」と大人達に訴えてくれた。
子供達の親を始めとした多くの者が『それくらいなら』と認め、王までもが融和の姿勢を見せ始めたことで、当時をまだよく覚えている老人達が逆に頑なになってしまったらしい。
子供達を集め、当時のハイリア人がいかに非道だったか、ゾーラ族がいかに苦しめられたのかを滾々と諭し続けたところ、今度は子供達が爆発してしまった。

「昔は、昔はってそればっかり!!　私たち昔の話なんてしてないの!!
今の話を……今の友だちの、リンクとゼルダの話をしているの!!」
「ひどいことしたり、苦しめたりしてるのはリンクたちじゃない!!
じいちゃんたちの方だよ!!」
「いじわるなじいちゃんたちなんか、もう知らない!!」

そう叫ぶや否や、大人達が止める間もなく飛び出してしまったそうだ。
余りのことに立ち尽くしてしまっていた私の隣で、リンクがシーカーストーンを起動させる気配がした。
青い光と共に現れたマスターバイクに驚くゾーラ族達を、悪いとは思いながらも置き去りにして、私達は絡繰り仕掛けの嘶きと共に雨の山中へと飛び出した。

「リンク、心当たりはありますか!?」
「旅の目的を決めた時と同じだ、最も可能性が高いところは既にゾーラ族が見てまわっている筈!!
ゾーラ族にとって当たり前、もしくは在り得なさすぎて考えから外れそうなところは……」

子供達と交わしてきた何気ないやり取りの全てが、リンクの頭の中

を凄まじい速さで駆け巡っているのがわかる。
マスターバイクの走りが格段と力強くなったことで、明確な目的地が定められたことがわかった。
「どこなのですか!?」
「例の湖!!」
交わされたやり取りと、リンクが想定した場所を、私も思い出すことが出来た。
知らずに近づこうとした私達を、慌てて止める子供達。
小さく、まだ泳ぎも拙い子供のゾーラ族程度なら一呑みにしてしまうような怪物が住んでいて、大人達から決して行ってはいけないと口々に言いつけられている場所なのだと。

外れていてほしいと思った予想は、残念ながら大当たりだった。
湖岸へと辿り着いた私達の目にまず飛び込んだのは、波打ち際で恐怖に震える子供達と、彼らへと向けて牙だらけの巨大な口を広げる魚の怪物。
目の前の獲物へと向かって飛びかかったその巨体を、突如発生した巨大な氷柱が真下から突き上げ、跳ね飛ばした。
空中高く吹っ飛んだその身を、更に必中の狙いで捉えたのは、山中を巡る日々の中で偶然見つけていた『雷の矢』の一撃。
込められていた魔力が雨中の大気にまで放出され、凄まじい衝撃と轟音が辺りに響く中で、私は恐怖と安堵に泣きじゃくる子供達を抱き寄せていた。
「あなた達、どうしてこんなところに…っ!!」

「リンクとゼルダのところにいこうとしたの……でも、二人を助けられないのはじいちゃんたちのせいだと思ったら、急にいけなくなっちゃって」
「あんなひどいことを言う、じいちゃんたちの言いつけなんか聞くもんかって思って……」
「気がついたら、ここに来てたの」
「何てことを…本当に心配したんだから……」
「ゼルダ、そいつらを連れて早く逃げるぞ。
　怯ませはしたけど、あんな矢一本で倒せる相手じゃない」

　リンクの言葉に頷いた私は、子供達の手を引きながら、怪物が沈んだ水面になど目もくれずに急いでその場を後にした。

　その後私達は、泣き顔から一転して自慢気に胸を張る子供達と共に、正面から堂々とゾーラの里へと迎えられた。
　子供達の親からは、改めて挨拶とお礼をされて。
　ご老人方も、ハイリア人にだって良い人と悪い人がいることを本当はわかっていたのに、意地になってしまっていたという謝罪と、子供達を助けたことへのお礼をしてくれた。
　玉座の間へと通された私達に、当代のドレファン王は、改めてのお礼の言葉を述べた後に約束してくれた。
　忌まわしい過去に囚われるのではなく、新たな友と何の憂いも引け目も無く笑い合える未来を目指して、ハイラル王国との国交再開を前向きに考えてくれることを。
　その為の条件として、ハイラル王国においては私とリンクが中心となってこの件を進めてほしいという申し出に、嬉しさと光栄のあまりに泣きだしそうになりながら頷いた。

ゾーラの里で持て成された私達は、今のハイラルでは非常に珍しいものとなっていたゾーラの品々と、ドレファン王からの親書を手土産に、ハイラル城へと帰還することとなる。
何日も野営生活を送っていたために、見るからに草臥れた装いとなっていた私達に、たまたま帰還に居合わせてしまった人達の驚きようは凄いものだった。
風呂に、着替えに、温かい食事にと大慌てで動き出す人の流れを掻き分けて、あの側近が「姫様をお守りするのではなかったのか!!」と声を張り上げながらリンクを目がけて詰め寄ってくる。
その怒鳴り声を私は、ゾーラ族の紋章入りの親書を取り出すことで黙らせた。

デスマウンテン

その後、信用のおける者達を選んで親書を託し、大使としてゾーラの里へと送った私達は、続いてデスマウンテンにあるゴロン族の里へと向かった。

常に溶岩を吐き出し続けるデスマウンテンは、宝石などの希少な鉱石が採れる場所として、ハイリア人からは非常に重要視されている地である。

しかし、そこで採掘作業を行うには、地面に直に置いただけのものが燃え出してしまうという灼熱の環境が、ハイリア人にとってはあまりにも厳しすぎる。

この環境に適応し、堅い岩盤を物ともしない剛力の持ち主でもあるゴロン族ならば、採掘作業自体は問題ない。

けれども、彼らにとっての採掘作業は食糧である岩の確保が目的であり、彼ら曰く『不味い』らしい宝石は、ハイリア人に売れることが判明するまでは作業を邪魔する厄介ものでしかなかったそうだ。

……お互いに利しかない取引だった筈なのに、当時のハイリア人はどうしてそれでは満足出来なかったのだろう。

燃えず薬のおかげで『熱い』が『暑い』で済んでいるけれど、それでも長居は無用とマスターバイクを急がせたデスマウンテンの登山道。

思ったよりも随分と短く感じられたその道中で、私はずっと、そんな答えの出ないことを考え続けていた。

ゾーラの里という前例から、多少素っ気なくされることを覚悟していた私達だけれど。

予想に反して、ゴロン族は里を訪れたハイリア人に好意的だった。
「ハイリア人なんて珍しいゴロね」と、笑いながら里へと迎えてくれた程で。
族長の家も、尋ねれば普通に教えてくれて……首を傾げながら訪れた族長の下で、その理由を知ることが出来た。
大らかで豪快で、細かいことをあまり気にしない性分のゴロン族は、当時のことをずっと覚えていたゾーラ族とは対照的に、かつてハイリア人との間に起こった揉め事のことをすっかり忘れてしまっていたのだ。
族長からして「先代からそんなことを聞いたような……」という感じだったので、私とリンクはずっと張っていた気が抜けて思わず肩を落としてしまった。
宝石の取引金額がなぜ大幅に割増しとなっているのか、どころか、そもそも割増ししてその金額になっていること自体をいつの間にか忘れてしまい。
ハイリア人が加害者側の負い目から現状に甘んじ続けたことで、宝石がなかなか売れないのは高額だからではなく需要が無いからだとばかり思っていたそうだ。
長年に渡ってとんでもない勘違いとすれ違いをしていたことに気付き、思わず崩れ落ちたくなってしまったものの、今は外交中だと自分に言い聞かせて気を取り直す。
とは言っても、その後行われたやり取りは、外交と言うよりは商談だった。
宝石を欲しがっている、必要としているハイリア人は多く、もっと値段が安く……と言うより、本来の適正価格に戻しさえすればきちんと売れるということを説明する。
旅に出る前に改めて読み込んできた資料を基に、本来の価格を一覧としてまとめた私達は、『リンク』の紹介で来た者にこの金額で取引をするという約束を結ぶことに成功した。
「ゼルダの名前でなくて良かったの？」

「姫の名をうかつに使うと、後で思いがけない問題が起こるかもしれませんから」
「それもそうか」

本当は、この件に関することをきちんとリンクの功績としたかったからというのが大きな理由だったのだけれど、彼はその説明でとりあえず納得してくれた。

「私達が一旦宝石を預かり、王都で販売した代金をお渡しする……ということも考えたのですが」
「山積みになっている在庫を片づけるだけなら、確かにそれで十分だけど。
今のゴロン族に必要なのは、色々と整えさえすれば宝石はちゃんと売れるんだってことを、直接その目で確認してもらうことだ。
もともとゴロン族は、宝石に価値を感じていなかった。
ハイリア人がそれを欲しがったから、商売として成り立っていたんだ。
その肝心のハイリア人が、長年に渡って宝石を買い渋る状況が続いたせいで、宝石を商品として扱うことそのものへの疑問がゴロン族全体に生まれている」
「商人にゴロン族の里まで赴いてもらい、直接仕入れを行なってもらうことで、宝石の需要は間違いなくあるのだということを実感してもらう必要があるのですね。
……今のハイラルに、そんな気概のある商人がいるのでしょうか」
「探すしかないな、多少あちこち回ってでも。
わざわざ足を運んでもらうからには、燃えず薬の用意くらいはこっちですべきだし」
「ここに来るまでの登山道も……私達の時は、マスターバイクで一気に登ってしまったので、あまり気になりませんでしたが。
魔物の巣をいくつか見かけました。どうにかしておかないと、人を寄越すなんて危なくてとても出来ません」

「ひとつひとつ、確実に片づけていこう」

解決すべき課題は多いけれど、すべきことはハッキリしているから大丈夫。

そんな当初の認識、予想を遥かに上回って、目的達成までの道のりは果てしない上に手間がかかるものだった。

まず最初に、大量の燃えず薬を用意するために、材料となるヒケシトカゲやヒケシアゲハを探して灼熱のデスマウンテン周辺を探索した。

ゴロン族との通商が滞り、デスマウンテンを訪れる人や機会が減ったことで燃えず薬の流通が激減していて、自分達で作った方が早かったからだ。

少しでも気を抜けば意識が遠のきそうな暑さの中で、ヒケシトカゲは逃げ足が速いし、ヒケシアゲハは小さくてなかなか見つけられないし。

私達自身も燃えず薬を使う必要があるので、目標数を揃えるのに時間がかかってしまった。

「昔のゴロンの里では、ハイリア人用の耐火装備を扱っていたそうなのですが……」

「需要が増えればまた作ってくれるだろうから、それまでは地道に頑張ろう」

探したい素材を登録すれば、近くにある時に教えてくれる機能がシーカーストーンに備わっていなければ、達成前に心が折れていたかもしれない。

そんな弱音は、素材探しと並行して周辺の魔物退治までこなしてい

たリンクの前では、口が裂けても言えなかった。
魔物に日々採掘作業を邪魔されて、他の所と同じように困っていたゴロン族達は、そんなリンクの活躍を喜んでくれた。
ハイリア人でも過ごしやすい部屋を、わざわざ拠点として用意してくれて、私達が上手く出来さえすればゴロン族との関係は必ず良くなるということを改めて確信する。
これから来ることになる商人を迎える準備として、ハイリア人用の部屋を増やしておいてもらうことを頼んだり、岩以外の食事を知らないゴロン族でも用意出来る、焼いて塩を振るだけの簡単な料理を教えたりした後で、私達は一旦デスマウンテンを後にした。

誰を仲介するのかに関しては、馬宿の実態調査を兼ねて各地を巡りながら、商売に対する気概と誠実さを兼ねた者を行商人の中から探すことにした。
姫とその騎士という立場を、そうそう振りかざすわけにはいかない私達の儲け話など、区切りとして成人を迎えただけの子供が戯言を口にしていると思われても無理はない。
店舗を構えて、安定した仕事をこなしているような商人は、そんな確証の取れない話に一か八かで乗るようなことはしないだろうと判断したからだ。
案の定、話を受ける以前に、まともに聞く姿勢を取ってくれた者すら数えられる程で。
最終的に引き受けてくれた人だって、私達が信用できる者なのかを確かめたいという理由で頼みごとをしてきて、それをこなすのもまた一手間だった。
そうやってやっと集まった数人に、デスマウンテンの登山道近くの馬宿まで赴いてもらって、そこから私達が……というより、リンクが

護衛と案内を務めながら揃ってゴロンの里へと向かった。
商人達に合わせて、改めて徒歩で登るデスマウンテンはやはり過酷だった。
女性ということで気を遣われていた私でさえそうだったのだから、なぜかすぐ逸れそうになる商人達を誘導したり、随分と退治した筈なのにまだ残っていた魔物を倒しながら先導を務めていた、リンクの苦労は相当なものだったと思う。
最後の関門と言わんばかりに、登山道の真ん中に立ち塞がるかのように現れたマグロックを倒して、ようやく里へと辿り着いた私達をゴロン族達は笑顔で歓迎してくれた。

「山積みになっていた宝石が本当に全部売れたゴロ！」
「リンクとゼルダの言っていた通りゴロ！」
「宝石を買ってくれただけでなく、珍しいものをたくさん売ってくれたゴロ！
ハイリア人はみんないい奴ゴロ！」
「宝石をこんな大量に仕入れられるわ、在庫は完売するわ。
道中は大変だったけど、ここまで来て、話に乗って本当に良かったよ」
「次からは何とか自分で来られるようにする、紹介してくれた君達の顔を潰さないように気をつけないとね」
「昔色々とあったとしても、ゴロン族は今更そんな細かいことは気にしないゴロ。
リンクとゼルダが、ゴロン族とハイリア人の為に一生懸命頑張ってくれた事実こそが大事だゴロ。
ハイリア人がもっと過ごしやすいように色々と工夫するゴロ、だからいつでも遊びに来てほしいゴロ」
「俺達は友達ゴロよ」

その言葉を受けて、苦労の連続に全身を煤けさせていたリンクが、疲れを忘れて思わず浮かべた嬉しそうな笑顔が、私にとっては一番の

報酬に思えたのだった。

？

ヘブラ地方

自らの翼で空を飛び、弓と歌に秀でたリト族の村は、極寒の地と知られるヘブラ山脈の麓にある。
寒さ対策をしっかりと整えて、その地を訪れた私達がまず目にしたのは、冷たく澄んだ空を飛ぶリト族の姿だった。

「本に書かれた資料や記録ではなく、本物のリト族を見るのは生まれて初めてです。
凄いですね、あんな高いところを自由に飛んで」
「……何か、向こうも俺達に気付いたみたいだな」

リンクの言葉と、彼らの村があると思われる方向へと急に戻り始めたリト族達の様子に、夢見心地だった気分を一気に現実へと戻された。
あの様子では、どうやらリト族はゾーラ族と同様に、昔の確執を今も引きずっているらしい。

「ゾーラ族みたいに国交自体が取り止めになっていた訳じゃないから、村に入ること自体を拒否されはしないと思いたいけど」
「居心地は悪そうですね、ある意味ゾーラ族の時よりも大変かもしれません」

しかしそれは、かつて問題を起こした上に、解消するどころか国内の問題にかまけて長い間放置してしまったハイリア人側の非である。
改めて気合いを入れた私達だったが、その覚悟は思いがけなく、村に入る少し手前で挫けてしまうこととなった。

「……記録によれば、ここには村へ渡るための吊り橋があった筈なのですが」

「これもゾーラの時と同じか、もっと性質が悪いけど」

リトの村は、周囲を断崖絶壁に囲まれた湖中央、そこに塔の如く聳える高く巨大な岩に沿うような形で築かれている。

そこを訪れる為の唯一の手段であった筈の橋が、それがかつて確かにここに在ったことを辛うじて匂わせる僅かな痕跡のみと化していた。

橋が無くなったとてリト族に問題は無い、彼らは飛べるのだから。

ハイリア人との関係が悪化したことで橋の需要が無くなり、手入れがされないままいつの間にか落ちてしまって、特に不都合が無かったためそのまま放っておかれてしまったのだろう。

溜め息をつく私の横で、リンクがシーカーストーンをリトの村の方向へとかざして見ている。

遠くのものを、まるで目の前にあるかのように大きく見えやすくすることが出来る機能があったことを思い出して、見えたものについて尋ねた私に、リンクはシーカーストーンを渡してくれることで応えた。

彼に倣ってかざしたその壁面に、彼が見ていたものと同じであろう光景が映る。

家や通路の縁からこちらを窺うリト族達の表情や雰囲気に、好意的なものは少しも見受けられなかった。

「完全に警戒されてしまっていますね」

「向こうからの接触は期待しない方が良さそうだ、何とかこちらから働きかけないと」

「何か策はありますか？」

「うーん、そうだなあ……ゼルダ、ちょっとリト族宛てに手紙を書いてくれない？

過去のことを改めてお詫びして、リト族と新たな友好関係を結ぶために来ましたって辺りを、きちんとした外交にも使えるような仕様で丁寧に」

「は…はい、わかりました」

手紙を書くことは王族の大事な仕事のひとつ、当然私も幼い頃から懸命に学んできた。

その技術と心得をかつてない程の真剣さで発揮し、書き上げた渾身の一枚を、何とリンクは小さく畳んで矢に結び付けた。

私が呆気に取られている間に、その矢をつがえてリト族の村へと向けて照準を合わせ始めたリンクに、数秒遅れで慌てた声を上げる。

「リンク、手荒な真似はダメですよ!?」

「大丈夫、狙える時間と余裕が十分にある状況で間違っても外さない」

そう言い切るや否や放った矢が、高く大きな弧を空に描き、断崖も湖も越えた先のリトの村の、誰もいない広場の真ん中へと突き刺さった。

慌てて構えたシーカーストーンの壁面に、村まで届いた矢の周りに集まり、それとこちらを……遥か遠くで未だ弓を構えているリンクを、何度も何度も見直している、声が聞こえなくとも大変な騒ぎとなっているのが見てわかるリト族達の様子が映し出される。

一族の誇りとして弓を修め、多くの優れた使い手がいるとされているリト族にとっても、今の一射は神業だったのだ。

それを実感した私の胸に、「これが私の騎士なのだ」という自慢と誇りが昂りとなって満ちてくる。

「……流石です、リンク」

彼が城に来るまで、実戦どころか遊びや練習でも武器を振るったことが無かったなどと、それが紛れもない事実だと知っている筈の私自身でさえ、たまに信じられなくなってしまう。

城においては兵士達との鍛錬で、旅に出るようになってからは魔物を相手の実戦で。

見る見るうちに強くなっていく彼に、すぐ傍で見ていた私は、『鍛錬を経て強くなっている』のではなく『かつて身につけた力や技を思い出している』かのような不思議な印象を覚えていた。

「しかし……いくら、空を飛べない私達が手紙を届けるためとはいえ、村に矢など射ち込んで。

本当に大丈夫ですか？」

「親善の手紙を届けるのも確かに大事だけど、ぶっちゃけて言えば俺が届けたかった本命は矢の方なんだ。

かつて一族の誇りを踏み躙り侮辱した、碌でもないハイリア人に得意な筈の弓の技を見せつけられて、リト族の戦士が黙っていられる筈が無い。

……ほら、言ってる傍から早速動き出した」

二人で覗き込むシーカーストーンの壁面の中に、何やら興奮して騒ぎ立てているリト族の若者が一人、弓と矢を手に現れた。

何とか宥めようとしているらしい周りの言葉など一切聞かずに、先程のお返しと言わんばかりの一射を、リンクの矢が届いた広場からこちらへと向けて放ってくる。

ハイリア人などに負けじと意気込んだであろう、彼の思惑とは裏腹に、リトの村から放たれた矢は断崖で隔てられた遥か下の湖へと落ちていった。

「矢を遠くへと飛ばす、遠くのものを狙うというのが苦手でも、それは全くおかしいことじゃない。

なぜならば、リト族が普段から鍛錬を積んでいる弓の使い方とは、方向性が全くの真逆だからだ。

リト族が追求しているのは、生まれ持った飛行能力を生かした機動性と、その速さの中で瞬間的に的を捉える技術。

的が遠くにあるならば、そこまで一気に飛んで近づいてしまえばいい……それが、リト族の弓だったんだ。

向こうだって、練習していないこと、そもそも性に合っていないことは十分理解している筈。
……だからって割り切れはしない、だって彼らは誇り高きリト族なんだから」

言いながら紙を取り出し、何やら書き込んで再び矢に結び、放たれたそれが危なげなくリト族の村まで届く。
先程矢を届けられなかった例のリト族が、二本目の矢に結ばれていた手紙を凄い勢いで引ったくり、読んだ途端に地団駄を踏み始めた光景をシーカーストーン越しに見てしまった私は、何故か異様に楽しそうなリンクへと苦笑いを浮かべながら問いかけた。

「リンク、一体何て書いたのですか？」
「『惜しかった、次は頑張れ』って」
「あなたという人は……でも、まあ確かに。
丸っきり無視されるよりは、どんな形でも関わりを持った方が可能性はありますね」
「そういうこと、ちょっと覚悟して気長に構えてみよう。
今日のところはこの辺にして、野営出来そうな場所探そうか」
「そうしましょう」

今後の方針を決めて歩き出した私達の耳に、リトの村の方から、風に乗って怒号のような声がかすかに聞こえてきた気がしたのだけれど。
私もリンクも、気のせいなどではないと分かっていたのだけれど。
今日この時に関しては、敢えてそのまま立ち去ることにしたのだった。

「見つけたよハイリア人、昨日はよくもやってくれたね!!」

リトの村近くに野営をするのに丁度良い場所を見つけ、美しく澄んだ星空の下で眠りについた、その翌日の朝。

朝の陽ざしと爽やかな空気の中での朝食の席に、騒がしく飛び込んできた者がいた。

ハイリア人で例えるならば、寝癖が直しきれていない状態なのだろうか。

全身の羽毛が所々乱れてしまっているのも構わずに、もしくは気付かずに。

朝早くから、私達を探して辺りを飛び回っていたのであろう彼は、間違いなく昨日の『あの』リト族だった。

こちらから赴くことが物理的に叶わないからこそ、リンクは殆ど挑発と言ってもいいような強引さでリト族へと干渉した。

誇りを苛まれたと感じたリト族に、こうやって怒鳴り込まれること自体は予想していたし、覚悟もしていたのだけれど。

「昨日の今日で流石に早すぎ……その様子だと昨夜は眠れてなさそうだし、今朝だって日の出と同時に村を飛び出したな?」

「あんなただ遠くに飛ばすだけの、ノロマで臆病なハイリア人らしいと言っていい卑怯な弓で勝ったと思われるなんて、リト族の誇りが一時たりとも許さないんだよ!!」

「それじゃあ、実際に獲物を狩った数とかでもう一度勝負する?」

「言ったね、望むところだ!!」

「ということになったから、ちょっと行ってくる」

「朝食はどうしますか?」

「食べる、悪いけどミルクは温め直しておいて」

そう言って森へと向かったリンクは、しばらく経った後に、獲物ではなく何故か気を失ってしまっているリト族の彼を背負って帰って

きた。
　睡眠不足と空腹が重なってまともな判断が出来ず、獲物を追って木の密集地帯に飛び込んで動けなくなってしまった末に、興奮したイノシシの突撃を食らって吹っ飛んでしまったそうだ。
　これ程のみっともない姿を晒してしまったからには、流石に冷静にならざるを得なかったのだろう。
　打ち身の手当てをされ、追加でもう一人分用意した朝食の席を共にした彼は、初対面が強烈すぎた為もあってか、不気味さすら感じてしまう程に大人しく礼儀正しかった。
　上がり下がりが激しすぎるその不安定な精神状態の中に、あまりにも予想外で、かつ切実すぎるリト族の事情があったことを知ったのは、そのすぐ後のこと。
　彼曰く……他種族との交流が無くなったことで、『弓に優れたリト族』という意識を改めて見直したり実感したりする機会までもが無くなった上に、ここ数十年ほど大した事件や危機が無く、鍛え上げた弓の腕を生かせないまま平和な日々を送ってしまったリト族は、身内間の心地良い狎れあいにすっかり染まり切ってしまったのだという。
「昨日の、君が射ったあの矢……本当に素晴らしかったよ。
　リト族として恥ずかしくなったし、負けていられないと思った。
　……でも、それは僕だけだったんだ。
　村の他の連中は、確かに驚いてはいたもののそれで奮起するではなく、逆に自分達だけで慰め合って励まし合って。
　あんなのは、リトの弓と比べられるようなものじゃないんだから気にすることは無いって。
　さっさと忘れて、いつも通りの日常に戻ろうとしたんだ」
「そんな、まさかそこまで……いや、何でもない」
「遠慮はいらないよ、思った通りに正直に言ってしまえばいい。
　『まさかそこまで、リト族が誇りを忘れて腑抜けてしまっていたなんて』ってね。
　紛れもない事実だ、それこそが現実だ、全く以って情けないことに

…っ!!」

怒りと嘆きに、震える声を吐き出す彼こそが。

真面目で堅物すぎると、もっと楽に生きればいいのにと揶揄されながら。

古い価値観と風習に囚われている変わった若者として半ば孤立しながらも、毎日の弓の修行を村で唯一欠かすことなく、リト族の誇りと技を懸命に守り続けていた。

今の世でたった一人となってしまっていた、『リト族の戦士』だった。

「私達の知らない間に、リト族がそんなことになってしまっていたなんて……」

「俺達の策は、空振りで終わっていたかもしれなかったのか。

……まあ確かに。得意分野であからさまに挑発されて、その状況で黙っていられないだろうというリト族の誇り高さを、無意識の内に大前提にしていたからな」

「意味がない訳じゃなかったけどね、おかげで僕は吹っ切れた。

……リンク、君の弓の腕を見込んで頼みがある。

どうかお願いだ、僕の修行に付き合っては貰えないだろうか。

実を言うと……散々偉そうなことを言っておきながら、僕は本当は自分の腕に自信が無いんだ。

教えてくれる師も、技を競い合える相手も、至らないところを違う観点から指摘してくれる人もいない。

今やっていることが本当に正しいのかも分からないまま、独学でここまで来てしまったからね」

彼の申し出に、リンクは考えたり悩んだりすることもなく、すぐさま笑顔で頷いた。

私も彼の決断に賛成で、何も問題は無い筈だったのだけど。

この話を申し出た当の本人である筈の彼が、何故か辛そうな表情で

俯いていた。

「リト族の戦士が、弓の修行について他種族に請わなければならない事態だなんて。

……リトの誇りを汚したと、忘れたかとご先祖様方に叱責されても、これじゃあ何も言い返せないな」

「俺達が言い返すよ」

「その通りです。

あなたは紛れもなく、誰よりも立派にリト族の誇りを守り、後に伝えようとしている人。

誰かがあなたを責めるのならば……例えそれが偉大な先達だとしても、私達は心からそう断言してみせます」

その発言に、特に大きな意味や裏の意図などはなく。

本当に、ただ単に、心の底から思ったことを、何も飾らずに言葉にしただけで。

でもそれは、彼にとっては、長く続いた孤独な戦いがようやく、ほんの少しだけでも報われた瞬間だったのかもしれない。

俯きながら、言葉なく背を振るわせていた彼の姿が、私達にそんなことを思わせた。

当人の懸念をよそに、体調を整えて冷静になった彼は、紛れもなく一流の弓使いだった。

第三者の……と言うより、彼自身が認めた弓使いであるリンクのお墨付きを貰えたことで安心したのか、動きや技術がより安定したのが素人目にもわかる。

自信をつけることが出来た彼は、随分と長い間、意識しつつも踏み

出せずにいた『試練』へと挑むことを決意した。

「その試練とは、一体どういうものなのですか？」

「リトの村周辺に、幾つか存在している修行場の鍛錬内容を、全て一定の基準を越えて達成させる。

それを成し遂げた者が一人前の戦士として認められる、そんな伝統が少し前まではあったのさ。

残念ながら、今はすっかり廃れてしまっているけど。

……リンク、改めて頼みがある。

どうか僕と共に、リトの試練を成し遂げてはもらえないだろうか。

試練はどれも、空を飛べるリト族が挑むことが前提の、優れた機動力を要求されるもの。

ハイリア人である君にとっては、酷い無理強いにも聞こえるだろう。

だけど……やっぱり僕は割り切れない、まだ信じたい。

ハイリア人がリトの試練を成し遂げる、そんな言い訳や慰めの余地など欠片もない事実を目の前に突きつけられれば。

皆だってきっと、悔しいって、負けられないって思ってくれる。

リトの誇りを取り戻してくれるって……それはまだちゃんと残っているって、僕は信じたいんだ」

彼の言葉に、願いに、リンクは笑いながら頷くことで応えた。

その後リンク達は、リト族の試練を順調に達成していった。

足りない速さや高さはマスターバイクやシーカーストーンの機能で補い（ビタロックで衝撃を溜めた岩に乗り、一緒に飛ぶという強引な方法には流石に悲鳴を上げた）ながら、数日をかけてついに最後の

試練まで終えた二人は、互いの弓を掲げながら健闘を称え合った。
「僕はこれから村に戻ることにするよ、皆に発破をかけてやらないとね」
「お前の本当の戦いはこれからだな、応援してる」

私達も一旦ハイラルに帰ることを決めて、このやり取りを最後に別れようとしたのだけれど。
風に乗って、森の向こうから聞こえてきた複数の悲鳴が、私達の同行を少しだけ長引かせることとなった。
慌てて駆け付けた私達の視界に飛び込んだのは、震えて腰が引けながらも、何とか弓だけは手放さずに頑張っているリト族達と。
地に落とした彼らを踏み潰さんとばかりに、巨大な両足で轟音と共に地を揺らす、見上げるほどに大きいひとつ目の魔物の姿だった。

「あれは、森の巨人!?」
「ヒノックスだ!!」

彼が書いた魔物の本に、確かに載っていた覚えのある名前を叫びながら放たれたリンクの矢が、巨人の魔物、ヒノックスの後頭部に当たり跳ね返る。
あまり痛手ではなかったようだけれど、注意を引き、攻撃の対象を変えさせるだけの効果はあったらしい。
ズシンズシンと重い足音を立てながら振り返り、歩み寄って来るヒノックスへと咄嗟に弓を引いた彼へと、リンクは簡潔かつ的確な助言を口にする。
「ヒノックスの弱点は目だ、そのまま射抜け!!」

その言葉に明確な的を定めた彼は、狙われたことを察したヒノックスが足と同じく巨大な手で弱点を覆ったことにも動じずに、僅かな指

の隙間から見事に目玉を捉えてみせた。
それによって怯み、盛大に尻餅をついたことで無防備となった魔物の巨体は、二人の優れた戦士にとってはもはやただの大きな的だった。
そうして、騒動が落ち着いた後に残されたのは巨大な残骸と……居心地が悪そうに俯いたままの、リト族の若者達。

「お前達、まさかアレにわざわざちょっかいを出したのか!?
あの魔物が普段は眠ってばかりで、近づかずに放っておけば襲われないことくらいわかっていた筈なのに!!
僕達がすぐに駆け付けられるところに居なければどうなっていたことか、一体どういうつもりで!!」

その辺りで私が割り込んだ、どうしても確認したいことがあったから。
案の定彼らは、リンク達が試練に挑む様子をこっそりと窺っていて、それによって触発された者達だった。
ハイリア人があれだけ出来るのだから、リト族である自分達ならばもっと出来るのが当然だと思った。
……という言い分を聞いている内に、彼の全身の羽が徐々に逆立ち、力が入った全身が震え始めて。
堪え切れず爆発するのに、あまり時間はかからなかった。
魔物に、戦いに対する認識の甘さを指摘し、お前達のそれは『誇り』ではなく『驕り』『思い上がり』というのだと叱責する彼の言葉を、その正しさを、命の危機を経て流石に思い知ったらしいリト族達は黙って聞き入れる。
いい機会だと言わんばかりに、今までは抑えていた常日頃からの不満や憤りを吐き出した彼は、その勢いでこれからは遠慮も容赦もしないという決意と宣言をも口にした。

「僕は今まで、本当にやるべきことから逃げ続けていた。

本当にリトの未来を憂うなら、一人で足掻くだけじゃいけない。
一族の意識を変える、そんな努力をしなければならなかった。
それがずっと出来ずにいた、あの狭いリトの村で本当の意味で孤立するのが怖かったんだ。
だけどもう大丈夫、僕は……いや、僕達はちゃんと頑張れるから」
「今の俺達じゃあ、見世物として誘われたって怒れない。
……いや、そもそも見世物にすらならないかもしれないな。
君達のおかげで、現実に向き合うことが出来たよ」
「時間はかかるかもしれないけど、リト族としてもう一度胸を張れるように努力する」

村へと渡るための橋を、近いうちに直しておく。
だからまた、いつでも遊びに来てほしい。
今度はちゃんと村で歓迎する、その時はリト族のもうひとつの誇りである歌をぜひ聞いてくれ。
そう言って見送ってくれたリト族達に別れを告げ、私達はヘブラ地方を後にした。
リト族とハイリア人の新たな友好の証として貰った、綺麗な羽飾りを城へのお土産として。？

ゲルド砂漠

他種族の夫を迎えようとも、生まれる子供は全て女性のみという不思議な民族。
それが、砂漠の民として知られているゲルド族。
彼女達の町は男子禁制が徹底されているものの、私達の目的は交易場が開かれているその手前のオアシスの方なので、男性であるリンクと共に訪れることに問題はない。
しかし肝心の交易場には現状では入れないので、周辺で多少の情報収集を行った上で、私達はとある場所を目指すことにした。

「サヴァーク（こんにちは）」
「すみません、まだお昼ですけどお店やっていますか？」
「サヴァーク……いらっしゃい、ハイリア人のお客なんて珍しいね。見たところ酒が出せるような年じゃなさそうだし、特別に果物でも絞ってやろうか」

交易場の責任者でもあるという酒場のマスターは、突然訪ねてきたハイリア人に驚きながらも、追い出したり邪険にしたりはせずに迎えてくれた。

「お嬢ちゃん達のような可愛らしい子らが、こんな砂漠に何の用だい？
交易場が目当てだとしたら残念だね、もう何十年もハイリア人の出入りは禁止になっているんだ」
「いえ、私達の目当ては交易場ではなく、ゲルド族の細工師に依頼を出したくて来たのです。
この手の技術は、ゲルド族に勝るものは無いとお伺いしたものですから」

そう言って私は、ゴロン族から骨折りのお礼と友情の証として贈られた宝石の数々を小袋から取り出した。
大きさも輝きも、見るからに最高品質だということがわかるものを前にして一瞬呆気に取られてしまったマスターだったけれど、すぐに気を取り直して口を開く。

「こいつは凄いね、大したもんだよ。
これだけ立派な宝石なら、一流の細工を施したいと思うのは当然。
その当てとしてゲルド族を選ぶのも、また当然ってもんだ。
わかった、ゲルドの町にいる知り合いの細工師に連絡を取ろう。
出来るだけ早く完成した方がいいんだろう、だったら一刻も早く来てもらわないとね」
「ええ、お願いいたします」

今回作ってもらうのは、店頭に並べるような出来合いの品ではなく、私とリンクが身につけるための特注品。
そういう依頼に対して細工師は、その人により似合うもの、その人をより輝かせるものを作る為に、まずは本人に直接会って想像を膨らませるという。
そのことを知っていた私は、その提案に対して特に何も思うことはなく頷いたのだけれど。
途端に訝しげに目を細め、私を見つめだしたマスターに、何かを間違えたのかと思わず息を呑んでしまった。

「お嬢ちゃん、人を使うことに慣れているね。
庶民の感覚なら、わざわざ来てもらうなんて……って思うのが普通なところなんだけど。
ハイリア人の良いところのお嬢様が、碌な護衛もつけずにこんなところにまで。
一体どんな了見さね」

たった一言、ほんの僅かな気の緩みから隠し事を見抜いてきた慧眼に気圧されながらも、ここが踏ん張りどころだと気を取り直した私は、無言で見守ってくれているリンクに励まされながら、居住まいを正して改めて彼女と向き合った。

流石に姫だとは思っていなかったらしく、驚いた様子を見せた彼女だったけれど、流石の立ち直りの速さを見せて話し合いの環境はすぐに整った。

「かつてのハイリア人の愚行を申し開くつもりはありません、交易場への立ち入りを禁じられたのは仕方のないことだったと思っております。

再びの参加許可をいただけた暁には、ハイラルからも規制をかけ、犯した場合の裁定も偽りなく行なうことを誓います。

なのでどうか……ハイリア人とゲルド族の新たな友好関係について、前向きに考えて頂くことは出来ませんでしょうか」

その言葉を受けたマスターは、神妙な面持ちで考えこみ……その後に、ゆっくりと口を開いた。

そうして彼女が聞かせてくれたゲルド族の『本音』は、ハイリア人相手の交易が途絶えたことで、ハイラルの地や人を介していた通商ルートの多くが使えなくなって、ゲルド族も随分と損失を被って困っていたという事実だった。

「なあ、アンタ達……持って来た宝石なんだけど、自分達で使わない分だけで構わないし、代金だって弾むから、良ければ売ってはくれないかい？

腕のいい細工師の存在だけでなく、ゲルド族自身の需要もあって、宝石はいくらあっても足りないくらいなんだけど。

ハイリア人相手の交易が途絶えてからというもの、品不足が延々と続いていてねえ……」

「なぜですか、ゴロン族との売買は別に禁じられてはいなかったので

しょう？」
「アタシらの住むこの砂漠からじゃあ、デスマウンテンは遠すぎるんだよ。
　人生で一度は旅に出る伝統があるゲルド族は、確かに通商に秀でていて、わざわざ遠出してくれるような気概のある奴も昔から何人かはいたけれど……それでも宝石の多くは、ハイリア人の商人を経て仕入れていたのさ。
　ハイラルは広大な土地を占める大国だからねえ、人や品物の行き来はそれ相応に多い。
　アタシらゲルドも、例外なくその恩恵にあやかっていた訳さ」
「でしたら何故、今の今まで交易が途絶えるような事態に……」
「ハイリア人のヴォーイが無遠慮不躾にゲルドのヴァーイを口説きまくった例の事件のせいで、若いヴァーイ達が外の世界を怖がり、伝統のヴォーイハントに消極的になっちまったのさ。
　旅に出ないと運命のヴォーイに出会えない、出会えなければ子も残せない、それはすなわちゲルド族の存続の危機だからね。
　数年越しの損失を覚悟してでも、若者達のヴォーイに対する苦手意識を薄れさせる必要があったのさ」
「……何か、本当に。
　ハイリア人が申し訳ありません」
「アンタが頭を下げることは無いよお姫様、悪いのは一部の躾のなっていない連中だったことはアタシらもちゃんとわかっている。
　アタシらにだって問題はあったんだ、頃合いを見てこちらから関係の修復を切り出すことがどうしても出来なかった。
　何回か話は出たんだよ……でもその度に、そもそものきっかけはハイリア人だったのに、なぜこちらから譲歩する必要があるのだ、とか。
　こちらから和解を申し出たりすれば図に乗られる、不平等な約定を押しつけられたらどうする、とか。
　実際に起こっている問題よりも、意地や誇りの方を優先する頑固な連中が声を荒げて、結局案が流れるって事態が続いてねえ」
「……ハイリア人との交易を再開することの具体的な『利益』を提示す

ることが出来れば、その感情論を落ち着かせることは出来ますか？」
「可能だね、連中だって慢性的な品不足や値段の高騰には例外なく悩まされているんだ。
現物を目の前に出されてまで、意地を張り続けるのは難しいだろう」
「ということです、リンク。
行動方針は決まりましたね」
「ゲルド族を驚かせられるような品物探しだ」

急に意見を合わせて、気合いを入れ始めた私達に、流石に呆気に取られた様子のマスター。
彼女が呼んだ、久々の大仕事の予感に急いで駆けつけてきた細工師が、扉を壊すような勢いで店内に駆け込んできたのは丁度その時のことだった。

最高級の宝石、そしてそれを使用した装飾を身につけることとなる私とリンクを前にした細工師は、凄い気合いの入り様を見せながらゲルドの町へと戻っていった。

「これで、注文の品が完成するまではこのオアシスに滞在する、という確かな理由が出来ましたね。
……ところでリンク。追加で注文をしていたようでしたが、何を話していたのですか？」
「サファイアを使った装飾を真っ先に仕上げて、完成次第届けてほしいって頼んだんだ」
「……確か、サファイアが持つ冷却の魔力を生かして、耐暑効果が出るものですね。

まさかリンク、砂漠を探索するつもりなのですか？」
「狙いの品がある」
「あなたの判断を疑う訳ではありませんが……でもどうして、わざわざ危険な砂漠を。
宝石ではいけないのですか、大きな需要があるとわかっているのに」
「確かに需要があるし、喜ばれるかもしれないけど、それで交易が許可されるかとなると。
デスマウンテンに行けば比較的楽に手に入るのが分かっていて、ただ運んだだけと言われれば反論できないような宝石じゃあ、何と言うかな……そう、衝撃が弱い。
凝り固まった意地や疑心を一発で粉砕できるような、もっと強烈な力と勢いがあるようなものが必要だと思うんだ。
具体的に言えば……採れる場所に行きさえすればいいようなものではなく、手に入れることの難しさをゲルド族がよく理解していて、成し遂げることが出来れば膨大な需要が発生するもの」
「あなたの言う『狙いの品』とは、その難しい条件を成しているものなのですか？
それは一体……」
「砂鯨、モルドラジークだ」

その後私達は、酒場のマスターが『依頼が完遂するまでの間だけ特別に』と口利きしてくれたおかげで出入りが出来るようになった交易場で、『モルドラジーク』に関する情報収集を行なった。
曰く、砂の海を自在に泳ぐ、砂漠で最も巨大で恐ろしい魔物。
曰く、僅かな獲物も逃さずに、砂の下から寸分の狂いも無しに襲ってくる。

曰く、高品質な薬の材料になるという肝を目当てに多くの者が挑み、尽くが帰ってこなかった。
ただ話を聞いただけなのに、凄い剣幕で『近づくな』『興味など持つな』と戒めてくるゲルド族達に、砂漠で生まれ育った彼女達にとって非常に身近でわかりやすい脅威だったということが見て取れた。
時に避けられながら、怒られながらも少しずつ慎重に情報を集めたことで、砂漠の中のモルドラジークが生息していると思われる地域を絞り込むことができた。
その頃になって、完成したサファイアの装飾品が丁度良く届き、砂漠の探索を行なうための準備がひとつ整った。

「とても似合っていますよ、リンク」
「男に対する褒め言葉じゃ無いって……」
「でも事実です」
「はいはい、ありがとう」

本気で綺麗だと思ったのに……まともに受け取って貰えなかったことは不満だったけれど、彼らしいとも思ったのであまり気にはしなかった。
サファイアが持つ耐暑効果でも砂漠奥地の熱を完全に防ぐことは難しいので、前もって集めておいた素材を使用して、念の為のひんやり薬を量産して。
砂漠に生息しているスナザラシを捕まえ、乗りこなす練習をして。
目的地であるモルドラジークの生息地までの行程を、無理せず帰ってこられる程度まで何度か往復して。
準備も、心構えも整って、いよいよ砂漠の奥地へと挑む……となった前日、酒場のマスターが私に声をかけてきた。

「ゲルド中で話題になってるよ、アンタ達があのモルドラジークに挑むつもりだって。
多くの連中は、口だけだのすぐ逃げ帰ってくるだの言ってるけど

……その目、その腹の据わり具合、どうやら本気みたいだね」
「止めますか？」
「当たり前だ、アタシらがどんだけあの化け物を恐れてきたと思っている。
悪いことは言わない、やめておきな。
二人だけで……いや、お姫様が戦えるとは思えないから実際はあのヴォーイ一人か。
あの子だけで何が出来るっていうんだい、無謀にも程があるよ」
「彼が出来ると言った、自信を持って断言したのです。
私は、それを信じています」

そう言い切って笑った私の後ろ姿を、彼女は言葉なく見送った。
……拠点としている宿の一室を、誰にも気づかれないようにと窓からこっそり抜け出したのは、その夜のうちのことだった。

「何だか、心配して下さっているマスターさん達に申し訳が無い気がします」
「仕方ないって……部屋に鍵をかけて、閉じ込めてでも止めるつもりだったみたいだし。
その気持ちは嬉しいけど、こっちだって事情があるんだ。
怒られるのは覚悟の上、確かな成果を土産にすることで許してもらおう」

昼間とは反対に極寒の世界となる砂漠を、耐寒効果のあるピリ辛薬を飲むことで対応しながら、スナザラシを駆って奥地を目指す。
時折休みながら、砂嵐に巻かれたりしながらも懸命に進み、目的地の目印と定めていた巨大なテーブルのような岩山が見え始めたのは、昼を過ぎた頃合いのことだった。

「ゼルダ、打ち合わせ通りに!!」

砂漠の暑さではなく、緊張のあまりに唾も飲み込めない程に乾いた喉を、私は予め用意しておいた薬を一気に飲み干すことで潤した。

スナザラシを駆りながら弓を引くという器用さで以ってリンクが放ったのは、オアシスの交易場で予め手に入れておいた爆弾矢。

それを、私達の目的地である岩山からなるべく遠い地点を狙い、放った。

通常の矢よりも遥かに重く、扱い辛い筈のそれは大きな弧を描いて飛び、何の変哲もない砂漠の一画に着弾、と同時に炎と衝撃と轟音を伴って爆発した。

途端に、辺り一帯の空気が変わったのが私にもわかった。

恐れ慄き、走行がブレ始めたスナザラシに、こんな危険地帯に連れてきてしまって申し訳ないと思いつつも、もう少しだけだからと心を鬼にして懸命に手綱を引く。

轟音に釣られて、今の今まで平坦だった砂漠の一画が盛り上がる。

時折砂を噴きながら潜航したそれは、爆弾矢の着弾地点を真下から突き上げる形でその巨体を現した。

「あれがモルドラジーク……」

「急げゼルダ、次は俺達の音を狙って来るぞ!!

それより先に、岩山へ登るんだ!!」

爆弾矢の音と衝撃がモルドラジークを誘導した隙に、生息地の中央に存在する岩山へと辿り着いた私達は、無理をさせてしまったスナザラシを解放すると同時に目の前の岸壁へと手をかけた。

先程私が飲んだのは体力の上限を一時的に上げるスタミナ薬、それでも足りなかった時の為にがんばり薬も用意してある。

リンクに手伝ってもらいながら、一気に岩山を登り切った私達の視

界に、砂の下から周囲を窺うモルドラジークと未だ逃げきれていないスナザラシ達の姿が映った。

「リンク、逃がしてあげて！」
「わかっている！」

爆弾矢にあまり余裕は無いけれど、それでも見過ごす選択肢は無かった。
再び誘導されたモルドラジークが見当違いの所に食いついている間に、短い間だったけれど旅路を共にしたスナザラシ達は、生息地から逃げ切ることが出来た。

「良かった」
「ああ……そして、本番はここからだ。
あまり長引かせないで、一気に決める」

砂上の獲物の気配を音と振動で探っているモルドラジークだけれど、堅い岩などの上に乗ってしまえばそれを探知することは出来なくなる。
そんなリンクの言葉通り、岩山の上に登った私達を、モルドラジークは完全に見失ってしまった様子だった。
慎重に辺りを窺い続けるモルドラジーク……それから少し離れた地点へと向けて、リンクはシーカーストーンから取り出した青い球を、爆弾を放り投げた。
それが砂上に落ちただけの僅かな音と振動を逃さなかったモルドラジークは、獲物と見定めたものへと向かって真っすぐに潜航していく。
その瞬間を逃すまいと、リンクから渡されたシーカーストーンを手に、私はかつてない程に意識を研ぎ澄まさせていた。
目的地の手前でより深く潜り、真下から突き上げたモルドラジークの巨大な口が、青い球を呑み込んだ。

その瞬間を逃さず発した起爆の合図が、モルドラジークの腹の中で盛大な爆発を引き起こした。
身の内からの攻撃に成す術もなく、空中で体勢を崩した巨体が轟音を立てながら砂上へと落下する。
その巨大な、丸出しとなった腹部へと向けて、リンクの弓が誘導目的ではない爆弾矢を引き絞った。
三度目の轟音、衝撃が、今度は血と肉が焼ける匂いと共に巻き起こる。
内臓の動きが窺えてしまう程に、大きく抉れた肉。
その最も強く激しく動いている部分、生命維持の要である巨大な心臓へと向けて、リンクは槍を構えて飛び降りた。
高さと重さが加わり、何倍もの威力が上乗せされた穂先が、寸分の狂いもなく心臓を貫いて血を迸らせる。
重傷を負いながらも藻掻いていたモルドラジークは、それによって完全に止めを刺された。
僅かな痙攣の後に動きを止めた大きな死骸から、血まみれになりながら戻ってきたリンクへと、私は慌てて岩山を下りて水の袋を差し出した。

「大丈夫ですか!?」
「流石に気持ち悪い……顔だけでなく全身洗いたいけど、戻れるまで水は節約しないといけないんだよな」
「段取りが上手くいって、危なげなく倒せたところまでは良かったのですけれど。
……どうしましょう、これを全部持って帰るのは流石に無理ですよね」
「肝だけでなく背ビレも薬の材料に出来るし、肉だって何かに使えるかもしれないけれど。
今回は欲張らずに、確実な成果を持って帰ることだけを考えよう。
とりあえず、肝を取り出して……」

また血まみれになることにうんざりしながらも、覚悟を決めてナイフを取り出したリンクと私の耳に、砂漠の向こうから何かが近づいてくる音が聞こえてきた。
明らかに集団の、それでいて確かな意図を以って近づいてくる音に瞬時に警戒を高めたリンクが、解体用だったナイフを音の方角へと構え、私を庇いながら前へと出る。
しかし、そんな私達の懸念と警戒をよそに、砂煙の向こうからスナザラシを駆って現れたのは、会って怒られるのはもう少し先のことだとばかり思っていた人だった。

「「マスター（さん）!?」」
「馬鹿な、モルドラジークが倒されて……アンタ達、本当にやったのかい」

色々とお世話になってきた酒場のマスターと、彼女に率いられてきたらしいゲルド族の戦士達が、巨大な死骸を前に声も出せず目を剥いている。
自分達が来る前に他の誰かが……という考えは、強大な魔物とその身でもって戦ったことの何よりの証といってもいいような、返り血まみれとなっているリンクの様相が即座に却下させた。

「アンタ達の自信、お姫様の信頼は、確かな実力と実績に裏打ちされたものだったんだね。
見くびってしまって悪かった、ハイリアのヴァーイとヴォーイ……いや、ゼルダ姫とその信頼厚き騎士リンクよ。
ゲルド族とハイリア人のこれからの為に、我々からも伏して頼もう。
両民族の関係改善の為に、力を貸してはくれないかい」
「そ…それは構いませんし、むしろ力になれるのならば嬉しいですけど」
「良いのですか？

国の方針に逆らってしまっては、マスターさんの立場が悪くなるのでは……」
「前も言っただろう、利益の現物があれば反対意見なんてすぐに消えるさね。
アンタらはもう十分に頑張って努力と誠意を示してくれた、ここからはアタシらの番さ」
「……あの、すみません。
マスターってもしかして、ゲルド族で相当な立場にいたりします？
本当だったら、酒場のマスターとかとてもやってられないような、交易場の責任者どころじゃないような……」
「流石だね騎士様、アタシはゲルド族の現族長の妹だよ。
姉よりアタシの方が…って推す声が煩くてねえ、無理を言ってあの立場をもらったんだ」
「ちなみに、姉妹仲は良好なのでご心配なく。
族長様はよくお店にいらっしゃって、ゲルド族の今後について二人で話し合われていますよ」
「族長様もハイリア人との関係を良くしたいと考えておられたお一人でしたから、此度のことをきっかけに、必ずや良い方向へと進むでしょう」

思いもよらない事実を知った私達は、しばし呆気に取られた後で顔を見合わせ。
込み上げる衝動のままに吹き出し、そのまま声を上げて笑い出してしまった。

その後、ゲルドの人達に手伝ってもらいながら解体し、出来る限り持って帰ったモルドラジーク……オアシスの交易場で久方ぶりに売

り出されたハイリア人の品物は、全てに高値がついてあっという間に完売した。
モルドラジークの素材、特に肝は万病の特効薬となるので、求める者は多いのだという。
これからも是非出品してほしい、目当ての品を扱っているハイリア人の商人を紹介してほしいと声をかけてくるゲルドの人もたくさんいて。
多くの支持に推される形で、マスターは私達に、新たに結ばれた友好関係における交易場の参加許可証の、記念すべき一枚目を手渡してくれた。？

ハイラル王国各地

ハイリア王国の近隣で暮らしている、四つの民族との関係修復。
その大きな目的を達成する合間に、私達は旅立ちの当初に定めた国内の問題解消にも取り組んでいた。

村や町を繋ぐ街道の、難所や要所に設けられている馬宿を、建物ではなく立派なテントと言った方が正しいようなそれを旅の拠点として重宝しながら、多くの旅人や商人の行き来を支える人々の困りごとや要望に出来る限り応えたりもした。

「聞いて聞いてゼルダちゃん、この間つい愚痴っちゃった件なんだけどね！
近くの橋に大穴が開いて、馬や荷馬車が遠回りしなきゃいけなくなって困ってるって話してたアレよ！
あの後すぐに王都から修理の人が来てくれたの、ゼルダちゃんの言う通りに諦めないで申請を続けて良かったわ！」
「それは何よりですね」

馬宿の憂いが取り除かれて心から喜ぶ私だったけれど、リンクはなぜか表情を引き攣らせていた。
まあ、確かに……彼女から愚痴という形で馬宿の窮状を聞きつけ、城に帰るなりそういった案件を担当している筈の部署に乗りこみ、対応どころか封すら開けていない申請書の山を見つけて、担当官の了見を笑顔で問い質した私の一連の行動は、少し強引なものだったかもしれないけれど。

彼女の喜びようを前にすれば、私の胸中に浮かぶのは、頑張って行動して良かったという満足感と達成感のみなのであった。

「……ああっ、逃げてしまいました」
「大丈夫、ちゃんと撮れてるから……ほら」
「うわあ、可愛い！
リンクは動物のウツシエを撮るのが本当に上手ですね、私がやると皆すぐに逃げてしまって……」
「ゼルダが出来なくても仕方ないよ、気配の消し方は戦闘時の応用だし」
「動物が下手でも植物は得意です！
次は私にウツシエを撮らせて下さい、あちらの方で珍しい花をたくさん見かけたのですよ！」
「はいはい、どうぞ。
……シーカーストーンの容量がそろそろ限界だな、一旦帰って中身を整理しよう」

旅から帰って、王城に一時滞在している時の私達は、図書室に詰めていることが多かった。
シーカーストーンの中に残しておけるウツシエの数は無限ではなく、折角の記録を消してしまう前にきちんと形にしておきたいという考えが、私とリンクの間で一致したからだ。
王城の専属絵師を驚かせるほどの絵心があったリンクが、ウツシエに記録された動物や植物達の姿を詳細に描き写して。
その隣で私は、あまり余裕が無いことも多い旅の中で懸命に走り書きした、旅先で見かけた動植物の生息地や特徴、性質や気付いたことといった解説文を、きちんとした紙へと清書していく。

お互いに指をインクで黒くしながら懸命に取り組んだ作業、形にした記録が人々の間で想像以上に評判となっていたのを私達が知るのは、もっとずっと後。
私達に内緒で皆が形にしてくれた、著者欄に私とリンクの名が記された最新のハイラル図鑑を、図書室を経て知り合った一同がリンクへの就任祝いとして贈ってくれた時のこととなる。

雷が、氷雪が、更には炎までもが天から降り注ぐという異常気象の正体。
リンクはその原因に心当たりがあったようだったけれど、下手に推測を口にするよりも実際に見て確認した方がいいとのことだったので、私達はそのまま現地へと向かった。
……そうして、実際に現象を前にした私の目に飛び込んできたのは。
雄大に、優雅に、そして美しく夜空を泳ぐ、立派な角と爪、そして蛇のように長い体を持った謎の巨大な生き物だった。

「……リンク、あれは一体」
「あれ……何だ、ゼルダは見える人だったのか。
ごめん、だったら前もって教えておいても良かったかも」

そう言ったリンクが改めて話してくれたのは、『龍』という名の精霊についてだった。
雷のフロドラ、炎のオルドラ、そして氷のネルドラ。
女神の従属たる彼らは自然の力そのものと言っても過言ではない存在で、ただ普通に空を飛んでいるだけの体から迸る膨大な魔力が、悪気なく周囲に影響を与えてしまうのだという。

恐ろしく、それ以上に美しい存在から目を離せずにいる私達へと、この場まで案内をしてくれた地元の兵士達が恐る恐る声をかけてきた。

「ひ、姫様……申し訳ありませんが、先程から何をご覧になられているのですか？」

「異常気象が近づいています、危険なので一刻も早く退避してください」

「……あなた達は、あれが見えないのですか？」

「何をおっしゃられているのですか、まるで例の少年のようなおかしなことを」

「龍は自然の精霊なんだ、皆が皆見られる訳じゃないんだよ。

それよりも俺は、『例の少年』とやらが気になるな」

リンクと私の問いかけを受けて彼らが教えてくれたのは、異常気象に悩まされている近隣の村にて、『大きくて長い生き物が空を飛んでいた』と叫んで回り、怒られても頑として主張を曲げなかったことで、『嘘つき』としてすっかり孤立してしまっている少年がいるとのことだった。

「龍が見える子だったんだ、嘘つきなんかじゃない」

「リンク、何とかしてその子の汚名を晴らしてあげて下さい。

異常気象の理由をはっきりさせれば、例え解消が出来なかったとしても、皆の不安を多少は拭える筈です」

私のその言葉に頷いたリンクは、とある方法で少年の言葉が真実であることを、龍の存在を証明してみせた。

集めた村人達の目の前で、何と彼は龍の体を弓で射ってみせたのだ。

私と、そして例の少年の目には、リンクの矢が当たった龍の体の一部が、眩く輝き始めた光景の全てが見えていたけれど。

他の村人や兵士達は、何も無い虚空へと向けて放った筈の矢が光を伴ないながら急に弾け、更にはその光が弧を描きながら降ってきた不思議な光景を目の当たりにしていたことだろう。
何事もなかったかのように去っていく龍の姿を見送ったリンクは、地へと落ちた光の下へと駆け寄り、確かな質量を持った『それ』を私達のところまで持って来てくれた。
それは少年の言葉の正しさを、たった今までそこに目に見えない巨大な生き物がいたのだという事実を証明するもの。
人の顔と同じくらい、下手をすればそれ以上はありそうな巨大なウロコが、私達の目の前に確かに存在していた。

その後、他の二か所の地方でも同じような対処をして、一方は角の欠片、もう一方は爪の欠片を龍の存在の証として近隣の村に残して、一旦城へと帰った私達は、最初の村で起こったその後の顛末についてを知ることとなった。
急な病が流行り、村人全員分の薬を用意できずに困り果てていたところに、去り際にリンクが口にしていた『龍の素材は薬になる』という発言を思い出した村長が、私達が残していったウロコを一部粉にして処方することを駄目元で試したみたところ。
病人達は瞬く間に快方へと向かい、村人達は龍を恐れるのではなく敬い感謝することを決めて、龍の動向を見守って村人達に伝える大切な役目を一躍して担うことになった例の少年は、リンクに憧れて弓の修行を始めたとのことだった。

「龍に少しでも親しんでくれれば……少しでも恐怖を和らげてもらえればと思って、本当に軽い気持ちだったんだけどなあ」
そう言って驚き、戸惑った様子で語尾を濁らせるリンクの表情は、凄く嬉しそうな笑顔だった

多くの人々と出会い、その悩み事や頼み事を解決し、旅にも慣れてきたことで自信を持った私達は、ハイラル王国一の魔境へと挑む決意を固めた。
不気味に立ち込めて、進む先どころか現在地すらも惑わせる霧。
巨大な木々の幹に開いた洞は、私が恐れているためか、化け物の目や口のように見えてしまい、只でさえ消耗していた精神を更にすり減らして来る。
時折響く獣や鳥の声、木の実が揺れているかのようなカラカラという謎の音。
あらゆる感覚が惑わされているかのような、訪れる者の全てを拒んでいるかのような得体の知れない場所。
それが『迷いの森』、誰一人として最奥にあるものを目にしたことは無いとされる場所だった。
……その事実を、共に調べ物をしたリンクは十分承知していた筈なのに。
霧の中を、目印とはならない木々の間を進むリンクの歩みには、何故か躊躇いや戸惑いという類のものが感じられなかった。
まるで、彼にとってはこの場所が、かつて何度も訪れた馴染みの場所であるかのような。
何処をどう通ったのか、何を進むための目印や根拠にしていたのか。
今までに森へと挑んで踏破が敵わなかった多くの人々と彼では、一体何が違ったのか。
その全てを、私は知る由も無い。
恐怖と不安に堅く目を瞑り、握った手を引いてくれるリンクの歩みにただ着いていくうちに、いつの間にか霧は晴れ、周囲は眩い光と鮮やかな植物達で彩られ、目の前には旅の中でも見た覚えのないような立派な大樹が堂々と聳えていたのだから。

「何て綺麗なところ……ここが、迷いの森の中心。
凄いです、滅多に見つけられない珍しい花があんなに咲いていますよ」

一輪見つけられれば十分話題になるような花が、『花畑』と言っても良さそうな数で咲いていることに感動して、思わず見入ってしまった私は、花弁と葉に紛れていた『何者か』の存在に気付いて息を呑んだ。

《ヒャアッ！》
「きゃあっ!?」
《勇者サマだ、勇者サマが迷いの森に帰ってきた!!》
《勇者サマ？》
《勇者サマだって！》
《お帰りなさい、勇者サマ!!》

花の中から飛び出してきて声を上げた、両腕で抱き上げられるくらいの小さな体に葉の仮面をつけた謎の生き物。
その最初の一匹の声に続く形で、あちこちの木々や草葉の影から、多種多様な葉の面をつけた謎の生き物達が次から次へと飛び出してきた
口々にリンクを『勇者』と呼び、彼の下へと駆け寄りながら、親愛と尊敬が感じ取れる素直な声で喜びと歓迎の言葉を口にする彼らが何者なのか、私には心当たりがあった。
偉大なる大樹の子供達と伝えられている、森の精霊『コログ族』。
悪戯好きではあるけれど、とても無邪気で素直な、幼い子供のような心を持った害の無い種族だと聞いていたのに。
それらに囲まれた中で、歓声を浴びながら立ち尽くし、顔から血の気を引かせて呼吸すら浅くなってしまっているように見えるリンクの様子は、楽観して見守っていられるようなものとはとても思えなかった。

「リンク!!」

慌てて駆け寄り、彼を輪の中から引っ張り出そうとした私だったけれど。

完全に興奮してしまっている様子のコログ族、それも大量に集まってしまっているものを掻き分けて進むのは、私の力では無理だった。

思わず絶望してしまった状況を打破してくれたのは、頭の上から突如降ってきた、年を経た賢者を思わせるような低く落ち着いた声だった。

《落ち着いて……下がっていなさい子供達、彼らとはわしが話をしよう》

口調こそ優しいものだったけれど、言うことを聞かない幼子を窘める親のような有無を言わさない迫力が込められていたその声に、コログ族達はピョンッと飛び上がってから大慌てで草葉の陰へと飛び込んでいった。

チラチラとこちらを窺う視線や動きは未だ見受けられるし、気になるけれど、今はそれに構っている場合ではない。

急いで駆け寄ったリンクは、普段の堂々とした頼もしさが見受けられない程に動揺し、焦点の合わない瞳を震えさせてしまっていた。

「リンク、大丈夫ですか!?」

「違う…違うんだ、俺は勇者じゃない。

俺なんかじゃ、勇者になんてなれない……違う、違う」

「リンク!!」

「……違う、よな?」

「リンク、しっかりして!!」

必死の願いを込めた声は、何かに怯えていた、どこか遠くを見てい

たかのようなリンクを、私のところへと連れ戻してくれた。

「……ゼルダ？」

「はい、ここにいます」

「……俺はずっと、君の傍にいられる？」

「勿論です、ずっとずっと頼りにしていますよ」

彼をこの場に留められるように、どこにも行かさないようにと想いを込めながら抱きしめているうちに、早く荒くなってしまっていたリンクの呼吸は、徐々に落ち着きを取り戻していった。

先程の声が再び聞こえてきたのは、そんな時の事だった。

《驚かせてしまってすまなかった……しかしどうか、誤解だけはしないでおくれ。

あの子達に、ぬしを責めたり追い詰めたりするようなつもりは欠片も無かったのだ。

ぬしがまた訪れてくれる時を、ぬしの帰りを、ずっとずっと待っていたのだよ。

……そしてそれは、このわし自身も同じこと》

「……デクの樹サマ」

《お帰り、リンク。

ぬしとまた会える時を、わしらは本当に楽しみにしていた》

老人の皺のような凹凸が刻まれた大樹の幹、それが顔のように動いて私達へと優しく語りかけてくる。

今はまだその時では無いと…『剣』が必要となった暁には、改めてこの地を訪れなさいと。

リンクとの間に交わされたやり取りの意味を私は知らない、聞けば教えてくれたのかもしれないけれど聞けなかった。

大樹（コログ達の親でデクの樹サマというらしい）がお土産として持たせてくれた、水に活けなくても瑞々しい花を咲かせ続ける一枝

は、十分に迷いの森を踏破した証となってくれたけど。
お父様はそれを王家の新たな宝として謁見の間に飾ってくれて、私とリンクはまたしてもひとつ、功績を重ねることが出来たけど。
言葉も少なく、見るからに憔悴してしまっているリンクの姿を前に、私は、こんなことになるならあの森に挑むのではなかったと後悔を募らせるばかりだった。

……とは言っても、それはほんの数日の間だけだったけれど。
気分転換にと思って、それまで訪れたことのないところへと足を運んだ私達は、目の前に広がる凄まじい光景に、今の今まで気が沈んでいたことも忘れて呆気に取られてしまっていた。
その光景を一言で説明すると……とにかく『派手』だった。
キラキラを通りすぎて、もうとんでもなくギラギラしていた。
家一軒分ほどの大きさはありそうな巨大な花、その極彩色の花弁には黄金の装飾が凄まじい自己主張で以ってこれでもかと施されている。
花びらの中央には美しく澄んだ水が湛えられていて……これはもしかして、『花』ではなく『泉』なのではとふと思った、その時だった。
ほっそりとした指先の、長く伸びた爪には丁寧に紅が塗られ、それらを一層映えさせる装飾で手首を彩った、美しい女性の手。
……私達など軽くひと掴みに出来そうなそれが突如泉の中から現れ、一瞬の遅れで、その本体と思われる巨大な女性の上半身が水面を突き破るかのような勢いで飛び出してきたのは。
魔物に襲われた時でさえ上げなかったような悲鳴を迸らせてしまったのは、申し訳なかったし、失礼だったと思うけれど、それと同じくらい仕方がなかったとも思っている。
巨人の女性……幻の泉に住まわれるという大妖精様は、見た目や振

る舞いこそ色々と衝撃的ではあったけれど、初対面であまりにも失礼だった私の態度を、朗らかに笑って許して下さるような優しい方だった。

私の中に眠っていたという魔法の素質に気付いて目覚めさせてくれたり、姉妹の存在を教えてくれたり、対価さえ貰えるならば泉を訪れた者に祝福を与えてもいいと約束してくれたり。

それだけでも十分過ぎるほどにありがたかったけれど、私が何よりも大妖精様に感謝したのは、かの人の色々な意味での凄まじさが、リンクを悩ませて落ち込ませていた『何か』を吹き飛ばしてくれたらしいことだった。

いつもの調子を取り戻してくれたリンクと共に、それまでと同じように各地を巡りながら、気になったものを記録して、出会った人と交流して、悩み事や困り事があるのならばそれを聞いて、それが私達でどうにか出来ることなら精一杯に応えて。

そんな大変ながらも楽しい日々はあっという間に過ぎて、気付いた時には。

最初の頃に定めた目標達成の期限、リンクの１３歳の誕生日まで、残る時間はあと僅かとなっていた。？

剣術大会

リンクの13歳の誕生日……リンクとゼルダが旅を始めた当初に定めた、ハイラル城における二人の今後の進退がかかった大切な期限の日。

それを、およそ二週間先に控えたある日のこと。

ハイラルの王城と城下町から少し離れた所にある『とある施設』にて、彼は数多の視線を浴びながら剣を振るっていた。

「そこまで!!

只今の勝負、勝者はゼルダ姫の騎士リンク!!」

背も体格も、自分よりも遥かに優れていた者を相手に一歩も引くことなく攻め続け、ついには見事勝利してしまった少年騎士へと、観客席からの惜しみない歓声が向けられる。

名を呼ばれて登場した時に観衆が思わず抱いてしまった、『まだ幼いとは言え、姫様の騎士ともなれば出ざるを得なかったんだろうな。可哀想に……』という初印象を紛れもない実力で以って覆して見せた己が騎士に、貴賓席のゼルダ姫も心からの拍手と声援を送っていた。

間近に迫った期限の日を意識し始めた頃に、近々開かれる毎年恒例

の剣術大会に出場しないかと、インパから提案をされた。
彼女曰く……俺とゼルダが今まで成し遂げてきたことを、大変な思いをしながら頑張ってきたことを、時に手助けしたりされたりしながら見守ってきた城の者達はよく理解している。
今後の功績に応じて、役職を与えるか否かを判断する。
そんな当初の約束に十分応えた俺が、今後側近の一人として陛下とゼルダの傍で力を揮っていくことを、俺達を知る城の誰もが確信している。
だけど、たったひとつだけ、現状で拭い切れていない不安要素があるとのことだった。

「当然の判断だったので責めるつもりは無いが、お前とゼルダ様は身分を隠しながら旅をしていた。
この一年で二人が様々な成果を成してきたことを、多くの民は知る由も無いのだ。
現状でお前が要職に召し上げられたとして、それが正当な評価だと知っている私達に異存が無くとも、何も知らない民達が、それが陛下の正しいご判断であると素直に受け止めてくれるとは限らない。
姫様の騎士に箔を与えるためのあくまでお飾り、名ばかりの就任と思われてしまえば、それを撤回するための余計な手間が、今後の役目にことごとく着いてまわることになるだろう」
「故にお前には、今度の剣術大会に姫様の騎士として堂々と出場し、民の前で活躍を見せることを勧めたいと思う。
確かな実力があることを証明すれば、少なくとも名ばかりのお飾りと思われることだけは無い。
お前がただ戦士として優れているだけでなく、文官としての適性と能力も備えていることは、今後の働きを見せさえすれば自然と理解してもらえることだろう」

インパの考えは尤もだと思ったけれど、その場ですぐに返事はせずに、ゼルダと相談してから決めることを告げた。

剣術大会に出場すること、俺の存在を名実ともに知らしめることは、俺達の旅の終わりを意味していたからだ。
俺達の身元が明らかになれば、今までのような当てのない気の向くままの旅をしたり、一般の人達と何気ないやり取りを交わすことは当然出来なくなる。
最近は未開の地へと挑むことも少なくなり、以前対応した件のその後を確認したり、旅先で知り合った人に会いに行くことが旅の主な目的となっていた。
旅に出ること自体も減って、城で過ごす時間の方が長くなってきて。
俺もゼルダも、大変だったけれどそれ以上に楽しかった日々が終わりに近づいていることを、そんな空気を何となくは感じていたけれど。

（その為に頑張ってきたのは間違いないけれど。
それでも、いざその時を前にしてみると、やっぱり少し寂しいな）

王国周辺の民族達との新たな友好関係を築くという最大の目標はどれも無事に達成できたし、それ以外の国内向けの案件も順調にこなしてきた。
俺とゼルダの功績は既に城中の皆から認められていて、旅を始めた目的は成し遂げられたと思っていいだろう。

（心残りは無い……ああ、でもひとつだけ。
迷いの森に行った時のことをちゃんと覚えていないのは残念だな、デクの樹サマやコログ達に会えるのを楽しみにしてたのに）

迷いの森を抜けて懐かしい大樹の前へと歩み出たその瞬間から、大妖精様を前にしたことで盛大に殴られたかのような衝撃を受けた時までの数日間の記憶が、何故か曖昧になっている。
そこで何が起こったのか……ゼルダなら当然知っているだろうけ

れど、あれ以来彼女は、迷いの森に関する話題を明らかに避けているからとても聞く気にはなれない。

（俺もゼルダも無事に帰って来ているし、デクの樹サマが持たせてくれたらしい土産もちゃんとあったから、何かが起こったとしてもそんなに深刻なことじゃない筈なんだけど。

……当分は無理だろうけれど、いつか時間に余裕が出来たら、また改めて行ってみようか）

そんなことを考えた俺は、その件に関することを一旦忘れてゼルダの下へと向かう。

俺の活躍を皆が見てくれること、知ってくれることを喜んだゼルダの笑顔が、決断を促してくれた。

王都近くの闘技場で行なわれる毎年恒例の剣術大会には、純粋な娯楽として以外に、兵士達にとっては地道な鍛錬の成果を観衆の前で発揮できる晴れ舞台、一般市民にとっては自分達を守ってくれている兵士達の強さを実感して安心することができるという意味合いもある。

前途有望な少年騎士の登場と活躍によって、今年の大会は例年にない盛り上がりを見せていた。

「ゼルダ、ただいま」

「お帰りなさいリンク、決勝進出おめでとうございます」

順調に勝利を修めて戻ってきたリンクと、そんな彼を笑顔で迎えるゼルダを、王を始めとした貴賓席の一同は温かく見守っていた。

彼が城を訪れた当初こそ、リンクを重用することに対して慎重な意見を抱き、それを口にする者は多かったけれど。

彼の確かな能力と、何があってもゼルダの力になるという気概が明らかになった今現在では、文句や不安の声が聞こえてくることは無くなっていた。

（まあ……出していないだけ、って人はいるみたいだけど）

王やゼルダから多少離れた席、そこから刺さるような視線が向けられていることを察したリンクは、振り返ることも無いまま心の中だけでため息を付いた。

一人、また一人とリンクとその活躍を認める者が増えていく中でも諦めず、生まれ育った環境が培う貴き心構えの大切さを、要するに碌な教育を受けていない田舎育ちの平民など頼りにしてはいけないという意見を、例の側近だけが一人、声高々に上げ続けていた。

長年支え続けてくれた人だからと、国を思うが故だからと一生懸命大目に見ていた陛下だったけれど、最近になって溜まり溜まった苛立ちが遂に爆発したらしく、免職こそされなかったものの陛下の側近と言えるような立ち位置からは遠ざけられ、発言までも制限されてしまったらしい。

その原因もリンクにあると考えたのか、リンクの姿が視界に入ろうものなら、それが消えるまで延々と睨み続けるのだ。

「先日、お父様が珍しく人前で嘆いておられました。

平民であろうと構わない、能力の有無こそを重視するという自身の考えは昔からのもので、彼もそれを知っていた筈なのに……と」

「それで実際に、平民が要職に大抜擢なんて例は無かったから、実行す

る気は無いあくまで口だけの宣言だとでも思っていたんじゃないかな」

忠臣と信じていた者が、実際には自身の理想を欠片も理解してくれていなかった。

ようやく受け止められた事実は王を心底落ち込ませている筈なのに、悠然とした態度で試合を見守る彼の表情からは、そんな内心は欠片も窺うことが出来ない。

心から信頼できる者、遠慮なく本音で話せる者、自身の心を理解してそれを叶えようと尽力してくれる者。

リンクのような得がたい存在を幼くして得ることが出来た幸福と幸運を噛みしめながら、ゼルダは恐らく生まれて初めて、自身の目からは常に立派な王の姿に見えていた父の、『人』としての苦労と苦悩に想いを馳せた。

「リンク、お願いです。

大会で優勝して、お父様を少しでも元気づけてあげて下さい」

「了解した」

命令する姫とそれに応える騎士の図にしてはあまりにも気軽な、お互いを信頼しきっているが故のやり取りを交わす二人の前で、リンクの決勝戦の相手が決まった。

健闘を称える惜しみない拍手と歓声に、笑顔で応える偉丈夫。

ゼルダとのやり取りに夢中になっていたリンクは、彼の顔を城内で見かけた覚えがないことに遅ればせながら気がついた。

「ゼルダ、あの人誰だか知ってる?」

「いえ、私には覚えが」

「わしも知らぬ。

インパ、あれは一体どこの者だ」

「……とある方から、頼りにしている私兵として推された者です。

外部からの出場を許可する書類には王の印が確かに押されていました、なのにご存じでないと？」

周囲の者を混乱させないため、叫び出したいのを懸命に堪えているインパの声が、強張った体が僅かに震えている。

彼女の言葉が意味するものを瞬時に察し、貴賓席の椅子を蹴倒す勢いで立ち上がった王だったけれど……闘技場中に響くような声を発するよりも、謎の男が行動に移る方が僅かに早かった。

歓声に応えていた朗らかな笑顔が怖気をもたらす様な嘲笑へと変わり、途端に巻き起こった白煙と無数の赤い札が人々の視界を一瞬で埋め尽くす。

人々が目の前で起こったことを受け入れ、理解するよりも先に、魂が掻き消されるような恐ろしい咆哮が白煙を吹き飛ばしながら轟いた。

馬の下半身に人の両腕、獅子の顔に角を生やし、膂力に溢れた巨躯と目の前に立つ者を情け容赦なく鏖殺する戦闘意欲を併せ持つ最強と名高いその魔物は、獣人ライネル。

王族や多くの一般市民が集まっている場所に突如現れたそれは、決して免れることは出来ない惨劇の先触れでしかなかった。

一転して恐怖と混乱に支配された場内でただ一人狼狽えず、目の前の魔物に誰もが恐れ慄いていた中でその眼差しを決して逸らすことの無かった、緑衣の少年がいなかったならば。

？

ＶＳ　ライネル

獲物を探すライネルの目に、運悪く最初に捉えられてしまったのは、出場は叶わずとも会場の警備という形で大会を担っていた兵士達だった。

この場には王や姫、守るべき多くの民がいる。

自分達は国を守る兵士だと、彼らの為に戦わなければと頭ではわかるのに、心では思っているのに。

命の危機という最も分かりやすく忌避すべき恐怖を前に、その体は完全に竦み、迫る脅威から目を逸らすことすら出来ずにいた。

雄叫びを上げながら強靭な四肢で地を蹴るライネル、獲物から反撃されることなど欠片も考えていないその頭へと、渾身の一射が打ち込まれた。

たったそれだけで倒せるようなものなら、ライネルは最強の魔物とは呼ばれない。

しかし、急所に思いがけず食らった強烈な一撃は、ほんの一瞬だけライネルの思考を飛ばすことに成功した。

出口を求めて逃げ惑っていた人々は、その目に飛び込んだ光景によって頭を殴り飛ばされたかのような衝撃を味わい、失ってしまっていた冷静さを強引に取り戻させられた。

混乱する人々の波で埋まった観客席を、手すりや席の背凭れといった僅かな足場を用いることで瞬く間に駆け下りながら。

全速力で飛び石渡りをしているかのような、まともな狙いなど到底つけられない筈の状況で放った矢が、恐ろしい獣人の急所を見事に捉えて。

その身がほんの一瞬硬直した隙を逃さずに、ライネルと対峙するにあたって最も安全と考えられる場所、にも関わらずそこに至るまでがあまりにも危険すぎて笑い話のネタでしかなかった筈の場所、馬に酷似した背の上へと飛び降りてみせた。

戦意ではなく怒りと屈辱に咆哮を上げ、前脚を振り上げるライネル

の後背で無謀すぎる乗りこなしに挑んでいたのは、ゼルダ姫の騎士という触れ込みの少年だった。

「今のうちです姫様、お逃げください!!」

「民を逃がすのが先です、それに慌てる必要はありません。

武器を取って駆け出す際に、リンクは『勝ってくる』と言っていました。

ならば勝ちます、彼は私に嘘は言いません」

誰もが逃げることしか考えられなかった魔物相手に果敢に挑んだ少年と、彼を信じて泰然と構える少女。

そんな二人の姿こそが人々を問答無用で落ち着かせた、『もしかして大丈夫なのか？』と思わせた。

一人、また一人と逃げることばかりに必死になっていた足を止め、振り返る者が現れ始めていることにも気付かずに、リンクはかつてない強敵との激闘に必死になって集中していた。

（流石はライネル、振り落とされないだけで精一杯だ……だけどっ!!）

ゼルダの下から駆け出したのは、戦場に向かって飛び降りたのは勝つ為だ。時間稼ぎをする為ではない。

馬の背と人の背をそれぞれ渾身の力で踏みしめ、少しでも怯ませられればという期待を以って鬣を掴んで引きながら、リンクは片手で抜いた刃を目の前の重厚な筋肉へと向けて突き立てた。

途端に響いた絶叫が鼓膜を貫き、遠くなりかけた意識を懸命に繋ぎ止める。

それがあと一瞬間に合わなければ、鬱陶しいだけでなく食らいつきまでする背の上の異物を一刻も早く振り払わんと、より一層激しく暴れ出したライネルの背からあっという間に弾き飛ばされてしまっていたことだろう。

馬のそれなど可愛らしく思えてしまうような暴れっぷりで闘技場

内を駆けまわるライネルを、馬相手には絶対に出来ないどころかする気もない、背骨が折れても構わないむしろ折れろと言わんばかりの勢いで踏みしめる足と。
進む先を指示するための手綱ではなく、我が身を固定させるための命綱代わりとして、鬣を全力で引く手でもって牽制しながら、ほんの僅かでもライネルが怯んだ瞬間を見逃さずに刃を突き立てる。
上下左右に盛大に振り回される中で、それでもただ闇雲に剣を振るうのではなく、同じ個所、既に付けた傷をより大きく深くすることを目的に振るわれ続けた刃が、その身を守っていた分厚く強靭な皮膚を遂に貫いた。
血の通った赤い肉へと深々と突き刺さった刃に、決定的な痛手に、ライネルは明らかに苦痛から発せられたものとわかる絶叫を迸らせながら背上のリンクを振り飛ばした。
強引に乗り続けたことで既に手足が限界だったのに加えて、痛みに対して体が思わず反応した勢いも上乗せされていたそれを耐え切ることは、いくら彼でも流石にきつかったらしい。
それでもリンクは決して、力負けして振り落とされてしまったことに黙って甘んじたりはしなかった。
体勢を立て直すのは着地のためではない、決定的な痛手を受けて集中力が途切れているライネルに更なる追撃を与えるため。
空中で必死に引き絞った矢が、全力を込めすぎて放つと同時に壊れてしまった弓と引き換えに、またしてもライネルの頭を捉えることに成功した。
耐え切れず崩れ落ち、遂に膝をついたライネルに、周囲から『オオオオッ!!』なんて歓声が上がった気がしたリンクだったけど、今は戦い以外のことを気にかけていられる状況ではないので一瞬で思考から追い出した。
弓を引くことに集中したため、着地どころか受け身すら取れなかった体がもろに地へと叩きつけられる。
頭の先から足の先まで貫くような痛みが走ったけれど、体のどこかから何か嫌な音が聞こえた気もしたけれど、それもこれも全てが今は

どうでもいい。
弓はたった今壊れた、剣はライネルの背中に刺さったまま、そして自分の体は体力的にも損傷的にも既に満身創痍。
残された攻撃手段はあとひとつだけ、これで決められなければ終わる。
流石の体力と耐久力で徐々に立ち上がろうとしているライネルへと向けて、身じろぐたびに体のどこかに激痛が走るせいで身を起こすのがやっとのリンクは、辛うじて守った利き腕を伸ばし……その身に残された渾身の『力』を込めて、指を鳴らした。
途端に走った閃光が、逆った轟音が、破壊力を伴ないながら炸裂した。

（あの人達色々と強烈だから……正直言って、最初はあまり乗り気じゃなかったけれど。
泉を探しておいて、会っておいて良かった。
ありがとうございます、大妖精様）

リンクの身の内……と言うより、魂に付随しているという力の存在に気付いた大妖精達は、対価と引き換えではあったもののそれらを目覚めさせてくれた。
今のはその中のひとつ、魔力の雷を広範囲にわたって落とすという最も過激で攻撃的な力。
ただでさえ食らえば無事では済まないそれを、敢えて一点集中で、しかも背に刺さった剣を通して体の中に直接ぶち込まれれば、いくらライネルでもひとたまりもない。
身の内の肉が焦げる嫌な音を立てながら、今度こそ本当に力尽きたライネルに、リンクはようやく強張っていた体の力を抜き……途端に沸き起こった嵐のような大歓声に、驚きのあまり飛び上がったことで、忘れていた激痛がぶり返して悶え苦しむ羽目になった。

「おいリンク、大丈夫か!?」

「早く医者、時間かかるようならとりあえず薬だけでも持ってこい!!」

大会で戦った、もしくは戦っているところを見た覚えのある知り合いの兵士達が駆け寄り、一人では動かせずにいたその身を助け起こしてくれる。

その時になってリンクはようやく、とっくに逃げたとばかり思っていた人々の多くが逃げていなかったことを、自身とライネルの激闘を見守っていたことを知ったのだった。

顛末と成果

決勝戦に当たる部分でとんでもない事態が起こってしまったけれど、それでも結果だけを言うならば、今年の剣術大会は大成功だった。
参加者以外の怪我人はゼロ、唯一重傷を負った俺もすぐに治療を受けたお蔭で特に問題なく回復できるとのことだし、何よりもトラウマものの体験をしてしまった筈の民達の盛り上がりようが凄かった。
あのライネルを真っ向勝負で倒してしまえるような強い騎士が今のハイラルには居ること、それが次代を担う姫様の信頼厚き忠臣であること。
更には誰がどこで漏らしたのか、此度の功績によって俺が重臣として取り立てられるという、少しだけ違うけれど概ね正しい話までもが広まっていて。
俺の戦術顧問への就任は、城の皆が認めてくれているだけでなく、多くの人々が待ち望んでいることとなっていた。
当初考えられていた懸念事項への対応は、どれも順調に進められている。
対処しなければならないのは、その流れの中で新たに生まれてしまった問題に関してだった。

「ハイラル王国と、王の血筋に反感と憎しみを持つ無法者の集まり、イーガ団。
……まだ残ってたのか。前の時代からどれだけ経ってるのか知らないけど、しぶとい連中」
「リンク、今何かおっしゃいましたか？」
「何でも無いよ、イーガ団について考えていただけ」

闘技場内に残されていたイーガ団の象徴、上下逆さにした目を模した印が描かれた紙を手に、言葉の通り考えごとをしていた俺は、それを一旦やめて目の前で行なわれていることへと意識を戻した。

俺達が今いるのは城の謁見の間、主役は冷静な面立ちと態度の下で滾る怒りを懸命に抑え込んでいる王と……王のみに限らず、謁見の間に集まった全ての者からの冷たい眼差しを一身に浴びながら、青を通り越した真っ白い顔色で震えながら、それでも必死に自身が犯してしまった誤ちへと向き合っている、あの側近。

事件が起こってしまうまでの流れは、実に単純なものだった。

俺に対する色んな意味での不満と、それを抱くことは決して間違っていないという自信を保ったまま王の傍から遠ざけられたことで喪心し、正常な判断が出来ずにいたところを唆されてしまったそうだ。

あんな得体の知れない田舎者の小僧に、今まで守り続けてきたハイラル王国を好きにされてしまっていいのかと。

正しい危機感を抱いているのは貴方だけ、貴方がこの国を救わなければならないのだと。

国と、王と、姫の為に、手段を選んでいられるような状況ではないのだと。

言葉を巧みに使いながら思考と行動を誘導し、王や姫を含めた多くの重臣と、それよりも遥かに多くの民が集まる場所の中心地へと、まんまと入り込むことに成功したのだ。

思い込みと情動が激しく、自身の中で一度定まった価値観をそうそう見直せない頑固者で。

それでも彼は、国と王家の為に力を尽くしていた、紛れもない忠臣の一人だった。

冷静さを取り戻し、落ち着いて考えることさえ出来れば、自身が取ってしまった行動がいかに危険であり得ないことだったのかを理解できる聡明さだってある。

釈明する気も、抗う気も、逃げる気もない彼は、この後自分の身に降りかかるであろう全てを受け入れ、罪を償う覚悟を既に決めている様子だった。

（俺以外に）被害は無いし、実行犯はイーガ団であることを大勢の民が目撃している上に、当人が心から悔やみ反省している。

情状酌量の、命までは取らずとも事態を修められる余地は十分にあ

る。
しかしそれでは多くの者が納得しない、罰を与える者はそこに個人の情を交えさせてはならないのだ。
例えそれが、長年に渡って信頼し、重宝してきた側近だったとしても。
彼の異様な偏屈さにただ呆れて遠ざけるのではなく、変に思って気を配ってやってさえいれば……一人で悩んでいた彼に、理解者を装って毒の言葉を囁く真の元凶の存在に気付けたのではないかという後悔が、頭の中を巡っていたとしても。
王の、父の苦悩を察したのか、辛そうな表情を浮かべたゼルダに気付いた俺は、意を決して口を開いた。

「国王陛下、僭越ながら申し上げます。
此度成し遂げたライネル討伐の褒賞として、その者を裁く権限をいただけませんでしょうか」

居心地の悪い沈黙が支配してしまっていた謁見の間に響いた俺の声に、その内容に、視線と注目が一気に集まる。
長年の側近を裁くことを躊躇してしまっていた王へと、俺が助け舟を出したのだということに数秒遅れて気がついた一同は、一人、また一人とそれを認め、勧める発言を口にし始めた。
彼が俺を散々に冷遇していたことは城中の者が知ることだったし、そんな俺ならば躊躇いも手心もない順当な罰を与えられると思ったのだろう。
場の流れが変わったことを察した王は、掴む手に力を込めすぎたあまりに玉座の肘掛けを軋ませるという分かりやすい動揺と苦悩を見せながらも、最終的にはそれを許可した。

許しを得て歩み出し、膝をつき首を垂れる自身を見下ろす位置へと立った俺に、彼はホッとした様子を見せた。
王をこれ以上苦しませずに済んだと、権利だけでなく確かな理由ま

で持っている者に正当に裁いてもらえるのだと、そう思って安心したようだけれど。
……温い、甘い。あれだけの事態を起こしたことへの罰が、その程度で済むとでも思ったのか。
命、人生、文字通り彼の全てを以って償わせるべく、俺は冷徹に口を開いた。

「陛下の傍で、陛下の意図や望みを今度こそ正しく察しながら、今まで以上の成果を出して働き続けること。
それが、俺が与えるあんたの罰だ」
「……えっ、は？」
「それのどこが罰なんだとか、俺が情けをかけたとか。
そんなことを考えているのだとしたら大きな間違いだ、これほど酷い罰は無いと自負している。
頑として認めようとしなかった俺が、国の中枢で働くことになる様を間近にしながら。
周りの全てから疑心の目で見られながら、何よりも自分で自分の死にたくなる程の罪と恥を自覚しながら。
それでも自ら死ぬこと、投げ出すこと、妥協すること、諦めることは許さない。
命が尽きるまで、人生の全てを以って、今度こそ国と陛下の為に尽くしきってもらう。
その屈辱に、過酷さに、あんたは耐えられるかな」

長い時間をかけ、俺の言葉の意味をようやく察し、受け入れることが出来た彼は、額を床に擦りつけんばかりの勢いで深く深く頭を下げた。
『すまない』なんて言葉が後ろの玉座から聞こえてきて、ふと視線を向けた先のゼルダは満面の笑みを浮かべていて。
……そんなに喜ばれるようなことじゃないんだけどな、辛く大変な日々を過ごすことになるのは紛れもない事実な訳だし。

だけど陛下と彼なら、どうにか罰をこじつけられないかと考えて、そうやって辛うじて繋いだ最後の機会を、今度こそきちんと生かすことが出来るような気がするのだ。

満足のいく成果を導けたことにホッとして思わず笑みを浮かべた、この瞬間が、『彼ならば構わない』ではなく『彼でなければならない』と多くの者が確信を抱いた時であったと、後日陛下が教えてくれた。

『開かずの宝物庫の謎解き』でひとつ。

『周辺諸国の四つの民族と関係を改善させる』ことで四つ。

『馬宿を基点とした国内の交通網の整備・改善に努めた』ことでひとつ、『民の様々な不安や悩みに耳を傾け、解決することで多くの民の支持を得た』で更にひとつ。

『謎の異常気象の原因解明』、『迷いの森の踏破』、『大妖精の泉の発見』、『より詳細な挿絵と記述が記された新たなハイラル図鑑の刊行』、そして止めにこの間の『獣人ライネルの討伐』。

以上、一年という短い期間の中で十二もの偉業を成し遂げた功績を以って、俺は晴れて『戦術顧問』という重職に就くこととなった。

１３歳の誕生日に重なる形で開かれた就任式は、城中の者達が準備に奔走してくれたこともあって、一般庶民出身の身としては気後れしてしまう程に立派なものだった。
インパとゼルダが気を遣って、祝いの一環として嬉しい驚きも仕組んでくれていた。
何と、ばあちゃんとバドが駆けつけてくれたのだ。
丸々一年ぶりとなった再会をばあちゃんは泣いて喜んでくれて、バドは敢えて村の時と同じような感じで接してくれたのが嬉しくて。
ばあちゃんは流石に帰らなければならないけれど、何とバドはこの一年で努力を重ね、王都の騎士学校の入学試験に合格していたらしい。
「未来の大将軍バド様だ、どうだ参ったか」と胸を張る彼に、「就任式を務めてやるよ」と本気で返す俺。
何気ないやり取りが本当に楽しく、かけがえの無いものに思えた。
こんなさり気なくも尊い幸せを全て、余すことなく守っていくのがこれからの俺の……俺達の、大切な役目となる。

「ありがとうゼルダ、君のおかげでここまで来られた」
「お礼を言うのは私の方です、道を開いてくれたのはあなたでした。
……約束です、リンク。
ずっとずっと、私の傍で、共に頑張ってくださいね」
「ああ、約束する」

この言葉に嘘は無かった。
何が何でも守り抜くと、この時は確かに、心から思っていた。
運命が再び動き出すのは、およそ二年後。
短い期間に幾つもの大きな変化を迎えたハイラル王国が、ようやく落ち着きを見せ始めた頃のこととなる。

在りし日のハイラル

どこまでも抜けるかのような青空の下、人々の明るい声と行き交う騒めきが華やかな街並みに響き渡る。
通りの店先には国中から集まった様々な商品が豊富に並び、子供達が元気にはしゃぎ回り、大人達はそれを何の不安も無いかのような笑顔で見守りつつ、自分達も他愛ないおしゃべりに興じる。
由緒正しき、偉大なるハイラル王国の城下町。
その正しく平和と豊かさの表れと言うべき光景を、感慨深げにその目に焼き付ける若者達の姿があった。

「凄いなあ、これが王都の賑わいか」
「俺の村もこの何年かで、前とは比べ物にならないくらい豊かになったけど……」
「流石にこれには敵わないな。
どうしよう……まだ来たばかりなのに、土産話がもう山みたいになってる」

生まれも育ちも全く違う彼らだけれど、同じ時期に、同じ理由で遥々と王都までやってきたと言う共通点から、早々に打ち解けていた。

「お前は確か、村長の息子だっけ」
「小さい村だけどね。
でもまあ、村の暮らしと連中は好きだし、頑張るつもりでいるよ」
「偉いなあ、ちゃんと責任感があって。
俺なんか、他にやる奴がいないから仕方なく務めてただけだってのに、話が来た途端に村中から指名されて……」
「『仕方なく』で出来るほど、村の防衛は楽じゃないよ。
やめたければやめれば良かったじゃないか、怪我だって何度もした

んだろ？」
「だから、仕方なかったんだって……俺以外は家の生計支えてて危険を冒せない奴か、まだ小さなガキばかりだったんだから。
俺んちは一人だけだからその辺り気楽だし、後追いすることもなく育つことが出来たのは村中で面倒看てくれたからだし。
やらなきゃと思ったことをやってただけなのに、それを評価されてもなあ……」
「……なるほど。
君は正しく『村で最も有望な若者』だよ、君自身がどう思おうとね」

優秀な若者を王都に集め、個人の素養や希望を考慮した上で、交易のいろはから魔物への対処法に至るまでの、村を守り発展させるための様々な指導を行う。
それだけで十分すぎるほどにありがたい話が、王都での衣食住を保証する上に、その若者が現時点で村に無くてはならない人物であるならば、代わりを務められる者を派遣するまでしてくれるとのことで。
至れり尽くせりすぎて逆に怪しかった話が、間違いなく王が自ら許可を出した国の施策の一環だったことを、若者達は今になってようやく実感を以って受け入れ始めていた。

「この案を出した王家の『戦術顧問』って、一体どんな人なんだろう」
「つーか、何で『戦術顧問』が、若者を集めて指導しようって話を王様に出すんだ。
兵を指揮して魔物を倒したり、その為の作戦を考えるのが、戦術顧問の仕事ってやつじゃないのか？」
「仕官したきっかけは確かにそれだったけれど、戦術に留まらない有能ぶりから、それ以外のところで意見を求められることも多いんだって。
王都のこの賑わいや、僕達の村がこの数年で一気に豊かになったのだって、元を辿れば戦術顧問の活躍があってこそだからね。
魔物が簡単に、あっという間に退治されるようになったことで、人

や品物の行き来がずっと楽で頻繁になって、国中がどんどん栄えている……って、村に来る行商人が教えてくれたんだ」
「そりゃあ、確かに凄いな。
……だとしたら、あの話はやっぱり嘘なんじゃないのか？
そのもの凄い戦術顧問様が、俺達と同じくらい、下手すれば年下のガキだなんて」
「だからこそ『若者を育てよう』って案が出たし、王様もそれを重く受け止めたって話もあったけど。
……やっぱり信じがたいよねえ、王都で勉強している間に会える機会ってあるかなあ」

揃って首を傾げた若者達の耳に、何かが壊れる音と悲鳴が、華やかな賑わいを遮りながら聞こえてきた。
気付いたと同時に中心地へと向けて走り出した、ほとんど条件反射とも言えそうな振る舞いは、それぞれの村で若い身ながら頼りにされる立場に在ったからこそ。
しかし、駆け付けた先にあった光景を目にした彼らは、一瞬それを受け入れられずに固まってしまった。
明かな脅威と言えば、たまに遭遇してしまう魔物くらい。
人間関係においては非常に穏やかなものだった村においては、絶対に考えられない騒動が起こっていた。
体格と腕力、怒号でもって脅しつけて、対価も無しに店から商品をたかろうとするような振る舞い。
そんなことを平気で出来るような野蛮な存在など、知るどころか想像するような機会すら無かったのだから。

「遠いところから苦労して運んできた品です、お代をいただけないと困ります!!」
「そうやって運んで来られたのは、俺達のような傭兵が体を張って魔物を倒しているからだろうが!!
礼をもらいたいのはこっちの方なんだよ、それをコレで許してやろ

うっていう気遣いがわかんねえのか!?」
「ひいいっ!!」
「あの野郎、何をふざけたことを…っ！」
「ちょっ、待って待って！」

村で荒事を一手に引き受けていたことと、生来の真っ直ぐな性分からあっという間に我慢の針が振り切れた若者が、咄嗟に伸ばされた相方の手を払って歩み出る。
そんな彼を制したのは、後ろからではなく、進行方向に伸ばされて歩みを遮った手だった。
苛立ちのままにその持ち主へと振り返った若者は、噴火寸前の思考をあっという間に鎮火させられる羽目となった。
手の持ち主……肩下まで伸ばして纏めた金の髪と、宝石のような青い瞳の、自分達より僅かに年下と思われる少年の色と面立ちの美しさに驚いたのと、その美貌をライネルを彷彿とさせるような怒りでもって滾らせるさまに、一瞬で竦み上がってしまったのが原因で。
茫然と立ち尽くしてしまっていた彼の肩を、騒動を遠巻きにする人込みを掻き分けてようやく追いついたもう一人の若者が息を荒げながら揺さぶった。

「明らかな傭兵相手に無茶しないでよ!!
見逃せとは言わないから、もっと落ち着いて考えて……ほら、衛兵が来たからもう大丈夫」

管理が行き届いていない田舎町ならまだしも、ここは国の中心とも言うべき城下町である。
実力も気概も信用できる、あんなチンピラ程度すぐに対処してくれる筈。
そんな若者の予想は、騒動を治めるべく駆けつけてきた筈の衛兵達が、何故か人込みに分け入る手前でその足を止めてしまったことで裏切られた。

（明らかな非常事態を前に何で直立不動、しかも何で敬礼!?
あの金髪の子が手を上げた動き、まるで制止をかけたようにも見えたんだけど……）

落ち着いて、改めて周りを見回してみれば、集まった野次馬達の表情に悲壮なものは見受けられない。
こういう状況から守り、遠ざけるべきであろう子供達を、むしろ優先して最前列に通している様子に危険への危惧は全く無く。
未だ理不尽に晒されている真っ最中である筈の店主までもが、安堵の表情で胸を撫で下ろしていた。
先ほどと今とで、一体何が違うのか。
その答えであろう少年が、木製の剣を片手に暴漢へと歩み寄っていた。

「確かに……少し前までは、国の兵士だけで賄えなかった街道の防衛、行商の護衛を、あんた達みたいなのに補ってもらっていた部分はあったけれど」
「何だガキ、すっこんでろ」
「魔物への対処法と、単独で無理に戦わない心構えを周知させた上に、街道沿いの整備を本格的に行なったことで、『守ってやってる』なんて的外れな上から目線で理不尽を強いるような、あんたみたいな性質の悪い連中に、無理に依頼しなければならないような事態はまず無くなった」
「……ああっ？」
「真っ当に依頼を受けて、こなして、正当な報酬を得ている良心的な傭兵には、国の方から信用状を出して、傭兵ならではの速さと自由さで警備と警護の穴を埋めてもらっている。
そんなことも知らずに、未だに脅しがまかり通ると思っている奴が『傭兵』を名乗るな、まともな人達に失礼だし迷惑だ!!」
「黙って聞いてりゃあ、ふざけやがって!!」

「危ない!!」

激昂すると同時に、前置きも宣言も無しにいきなり振り上げられた武骨な大剣が、無防備に立つ少年へと向けて真上から振り下ろされる。

咄嗟に声を上げはしたけれど、あまりにも突然すぎて体を動かすことは出来なかった若者達の前で……事態は、一瞬で収着した。

村を守るために時折魔物と戦い、それなりに荒事には慣れていた若者でさえ全く見て取れなかった一閃でもって、岩の如く猛々しかった暴漢の体が石畳に沈む。

見守っていた町人達の歓声を少し恥ずかしそうな顔で浴びながら、野次馬の輪の一角へと向けて歩み出した少年は、一人の男の子の前で立ち止まった。

「君の剣のおかげで店の人を助けられたよ、ありがとう」

「あっ、あの……どういたしまして、ありがとうございました!」

優しい笑顔で剣の柄を差し出した少年と、それを憧れの英雄を前にした表情で目をキラキラとさせながら受け取った男の子。

彼が受け取った瞬間に、暴漢の巨躯を一瞬で沈めた素朴な木剣は、明らかに枝を削っただけの素朴を通り越して粗雑な子供のオモチャへと変わってしまった。

正確には変わったわけではない、あんなもので危なげなく戦った少年の力量がそう見せてしまっていただけなのだ。

愛用品を通り越して宝物となった剣を振りかざしながら、苦笑する母親に宥められる男の子の下から踵を返した少年は、笑顔から一変させた鋭い眼差しで、先ほどの暴漢とそれを拘束する衛兵達へと歩み寄る。

「あとは、任せても大丈夫?」

「はっ、問題ありません!」

「それにしても、なぜ未だ城下に？
休暇を取って里帰りなされたと聞いていたのですが」
「ばあちゃんへの土産を選んでたら、良さそうな品物が多すぎて目移りしてさ。
まあ良かったよ、おかげで大きな騒動になる前に治められたし。
……流石にそろそろ行かないと、村に着くのが夜になる。
しばらく城を空けるけど、町と、人と……王と、姫を頼んだよ」
「はっ！」
「お任せください、戦術顧問殿！」
「行ってらっしゃいませ、リンク様！」

一糸乱れぬ直立不動と敬礼で送られた少年は、何も言わずとも人込みの中に自然と開けられた道を抜けて、賑わいの、街の中心地の反対側、城門の方へと向けて歩いていく。
その背を、幸運にもこの場に居合わせた人々は、様々な思惑でもって見送った。

「今日はついてたなあ」
「ハイラル王家の誇る秀才、最年少戦術顧問の活躍をこの目に出来るなんて。
これは、いい土産話が出来たよ」
「何度見てもお綺麗な方だわ」
「女の私達が潔く認めるしかない……を通り越して、純粋に憧れるんだから相当なものよね」
「ぼく、おおきくなったらへいしになる！
へいしになって、リンクさまといっしょにハイラルをまもるんだ！」

尊敬や憧れといった想い、言葉が飛び交う中で、困惑のままに呆然と立ち尽くす者達がいた。
言うまでもなく、この町を訪れたばかりの若者達である。

「……あいつが、『リンク様』」
「……王国史上最年少の戦術顧問、あの子が」
「『魔物早見』の執筆者……あの本のおかげで、うちの村は魔物の被害がほとんど無くなったんだ」
「僕のところだってそうだよ。
　あれを全ての町や村に届けるべきだと進言して、実行までこぎつけたのもあの人なんだって」
「王様だけでなく、お姫様からも絶大な信頼を得ていて、次の代でも間違いなく側近として取り立てられるだろうって」
「側近どころかいずれ結婚するなんて話を聞いたよ。
　王様を含めた周りがとにかく乗り気で、本人達も外堀を埋められたら諦めるくらいには仲がいいって、皆が言ってた」
「武芸を学んだのは王都に来てからなのに、あっという間に誰も敵わなくなったって」
「周りが止めないと、倒れるまで働きかねないほどの仕事熱心で」
「自分が綺麗だってことに無自覚で、それで周りが振り回されてることにも全然気づかなくて」
「王様から本当の意味で信頼されたきっかけは、魔物早見じゃなくて、真面目で責任感が強いあまりに追い詰められていた姫様を救ってくれたからだって」
「こんなに頑張って、誰も文句を言えない成果を出しているのに、本人は少しも満足していないって」
「……戦術顧問は、リンクさんはこの場所で、ここの人達に、本当に愛されてるんだなあって思ったよ」

　故郷の村を遠く離れて、一人訪れた王城でガチガチになって緊張していた若者達に、多くの者が見かねて声をかけてくれた。
　それは喉の渇きを察して水を出してくれた女中だったり、制度と今後の生活の詳細について説明してくれた文官だったり、城下町を見てくることを薦めてくれた兵士だったり。

前もっての打ち合わせなどしていなかった筈なのに、まるで示し合せたかのように、だれもが話題として同じ人物のことを口にした。

「君達よりも、もっと幼い頃からここに来て、一生懸命に努力して、結果を出して。

今は誰からも信頼されて、愛されるようになった子がいるんですよ」

「あの人が国の、民の、何よりも直接の統治がどうしても行き届かない村々の為に考えて、一生懸命に詰めた案なのだから心配は要らない」

「あの人と姫様が並んで、城下の賑わいを見守りながら笑い合う。

そんな光景をこれからもずっと見ていきたい、その為に頑張ろうと思えるんだ」

大量の情報を一気に詰め込まれた上に、その内容があまりにも並外れていることで実感に乏しかった、ハイラルの若き英雄。

それが、姿と活躍を実際に目の当たりにしたことで、見る見るうちに胸中で形を成して来る。

大切な村を、大事な人々をこれからも守っていくための勉強を、あの人の傍で行なっていくことが出来るのだ。

ようやく本当の意味で実感し、受け入れることが出来た明るい未来に、若者達は顔を見合わせながら笑みを浮かべていた。

赤き月の夜

ハイラルのため、ゼルダのため。
俺が出来ることを懸命にこなしながら、あっという間に駆け抜けた二年間。
１５歳を迎えた俺は、仕事や情勢が落ち着き始めた頃合いを見計らってまとまった休暇を取り、カカリコ村へ里帰りをした。
大きな目的はふたつ、ばあちゃんに会うことと……旅立ちの際に部屋に置いてきた分と、王宮で過ごすようになってからも書き続けた分を合わせて、『伝説』をきちんと完成させること。
誰にも見せられないし、見せる気が無いのも今のところは変わらない、完全に自己満足の代物だけど。
この大きな区切りをつけることはとても大切で、必要なことだと思う気持ちもまた、幼い頃から変わっていない。
ばあちゃんが食事を用意してくれている懐かしい音と匂いを感じながら、随分と小さくなってしまった机で無心にペンを動かし続けた俺に、その瞬間が遂に訪れた。

「……出来た」

立派な装丁が施されている訳ではない。
自己流の拙い手つきで、辛うじて本の体裁を取っただけの、それでも分厚さだけは辞書並みにある代物が締めて１８冊。
その表紙に俺なりに記したタイトルを、不思議な感慨深さを以って見定めていく。

ゼルダの伝説・第一章『スカイウォードソード』
ゼルダの伝説・第二章『ふしぎのぼうし』
ゼルダの伝説・第三章『４つの剣』

ゼルダの伝説・第四章『時のオカリナ』

ゼルダの伝説・魔王ガノン封印後の第一章『神々のトライフォース』
ゼルダの伝説・魔王ガノン封印後の第二章『夢をみる島』
ゼルダの伝説・魔王ガノン封印後の第三章『ふしぎの木の実』
ゼルダの伝説・魔王ガノン封印後の第四章『神々のトライフォース2』
ゼルダの伝説・魔王ガノン封印後の第五章『トライフォース三銃士』
ゼルダの伝説・魔王ガノン封印後の第六章『ゼルダの伝説』
ゼルダの伝説・魔王ガノン封印後の第七章『リンクの冒険』

ゼルダの伝説・新たな風の勇者の第一章『風のタクト』
ゼルダの伝説・新たな風の勇者の第二章『夢幻の砂時計』
ゼルダの伝説・新たな風の勇者の第三章『大地の汽笛』

ゼルダの伝説・時の勇者の末裔の第一章『ムジュラの仮面』
ゼルダの伝説・時の勇者の末裔の第二章『トワイライトプリンセス』
ゼルダの伝説・時の勇者の末裔の第三章『４つの剣＋』

ゼルダの伝説・全ての最後を飾る章『ブレス・オブ・ザ・ワイルド』

「ちょっとかっこつけすぎた気がしないでもないけど。
まあいいか、どうせ俺以外に誰も見ないんだし」
ああ、でも……いつか俺が、本当の意味でこの伝説を、今の自分とは関係ない遠い過去の物語と割り切れた時には。
「ハイラルの地を舞台に、皆をモデルにして、こんな物語を考えてみたんだ」とでも言って、皆に見せてみてもいいかもしれない。
孤独な戦いを送った『リンク達』も、自分達の物語を多くの人々が知ってくれるなら、きっとそれを喜ぶことだろうと思うから。
休暇ももう終わる、明日には王宮に帰らなければ。

大きな区切りを無事に迎えられた新しい気持ちで、今までと同じようで違う日々を、ゼルダ達と共に歩み続けるのだ。

そうして、十年越しの執筆の末に『ゼルダの伝説』を書き上げた。
これを区切りに前世など割り切って生きていこうと、改めてそう思えた……その日の夜のことだった。
天に昇った赤い月が、世界を禍々しい血色で染め上げたのは。

本当はわかっていたんだ。
そんな都合のいい、優しい未来なんかある訳ないって。
『リンク』と『ゼルダ』が出会った時点で、運命は始まってしまっていたんだって。
……ごめんな、ゼルダ。
一緒にいるって約束、もしかしたら守れないかもしれない。

退魔の剣と勇者

血色の月が、禍々しい魔力をハイラルの大地へと降り注いだ夜が明けて。

各地から魔物の異常発生とその被害の報告が殺到していた王宮は、朝早くから対応に追われていた。

その忙しさと先への不安に加えて、昼も近い頃合いになってから明らかになったとある事実が、それを伝えられることを許された一部の者達を憔悴させていた。

異様な魔力を感じて真夜中に飛び起き、思わず駆け出した赤い月光の下で昏倒してしまったゼルダが、大勢を心配させた後にようやく目を覚ました開口一番で口にした、女神ハイリアの神託。

世界の危機に巫女として目覚めた彼女の口を経て告げられたのは、伝説やお伽噺の類いとされていた世界を滅ぼす厄災ガノンの存在が事実であったことと、赤い月の出現はその復活が近づいている証だということ。

どうすればいいのかと必死に尋ねるゼルダに、彼女の夢に現れた女神ハイリアは答えた。

新たな託宣を時の神殿で与える、退魔の剣を携えた勇者と共に訪れなさいと。

女神が口にした三つの単語のうちのひとつ、『時の神殿』に関しては問題なかった。

王都から少し離れた所にある、何時誰が建てたともしれない謎の神殿が、人々の間でそう呼ばれていることを知る者がいたからだ。

問題は『退魔の剣』と『勇者』だった。

言い伝えには厄災ガノンの存在と共に、それに唯一対抗できる神剣と繰り手たる勇者についても確かに語られてはいたものの、それが今現在どこにあってどこに居るのかまでは皆目見当がつかない。

「ゼルダよ、あちこち旅をしていた際にそれらしい話や噂を聞いた覚

えは無いか？」
「そうですね……」

藁をも掴むような思いなのだろう、娘に尋ねることへの恥や躊躇いは今の王からは見受けられない。
ゼルダ自身も、今現在この場に居る者の中で最も王都の外を見聞きしてきたのは自分だという自信があったので、特に躊躇うことなく考えを巡らせた。
その中でふと辿り着いたのは、旅の記憶の中でも意図して深いところにしまい込んでおいたもの。

「迷いの森……デクの樹サマは、『剣が必要になった際にはまた来なさい』と仰っていました。
その剣とはもしかしたら、『退魔の剣』のことなのではないでしょうか」
「なるほど、確かめてみる価値はある。
リンクが戻った暁には、共にその地へと赴いて確かめてくるのだ」

魔境と名高いあの森を踏破した経験があるのは、現状では二人だけ。
切羽詰まった中で確実性を求めて、その当人達を派遣することを決めた王の判断は至極正しい。
そう思って頷きながらも、リンクの異様な怯え方を未だ鮮明に覚えていたゼルダの、内心の躊躇いは大きかった。
しかし、そんな彼女の懸念は、リンクが戻り次第派遣を命じるつもりだった王の思惑は、当初の予定から随分と遅れたリンクの帰還報告によって遮られた。
大広間のワープマーカーへと彼が帰ってきたことを知らされた、言い表しようのない不安に苛まれ続けていたゼルダは、すぐに駆け付けてくれるであろう彼を待てずに走りだした。
一刻も早く顔を見たかった、安心させてほしかった。

その一心で城内を急いだゼルダの走りを止めたのは、自身と同じように不安に苛まれ、それを王国最強の騎士に払拭してもらうことを願って集まってきた人々の喧騒。
それらを丁寧にかき分けながら、また引き連れながら。
ゼルダが彼に会いたいと願ったように、彼もまたゼルダに会いたいと願って歩みを急がせていたリンクと、数日ぶりとはとても思えないような心地での再会を果たした。

「……ただいまゼルダ、遅くなってごめん」
「リンク…っ！」

込み上げる衝動のままに駆け寄ろうとしたゼルダを、リンクはそっと突き出した手のひらで制した。
進むことも、戻ることも出来ずに立ち尽くすゼルダの前で、リンクは背に負っていた剣の柄へと手を伸ばし……うっすらと青く輝く美しい刀身を、一気に抜き放った。
その剣を目にしたゼルダは言葉も無いまま息を呑んだ、女神ハイリアの声を夢で聞いた時とのものとよく似た不思議な確信が胸中に満ちる。
あの声が女神のものだと、何の根拠も無いまま自然と受け入れた時と同じように。
リンクが手にしているあの剣こそが正しく、夢で告げられた『退魔の剣』なのだと。

「……退魔の剣」
「正確には、マスターソードっていうんだ。
デクの樹サマとコログ達がずっと守ってくれていたのを、ひとっ走りして取ってきた」
「リンク……あなたが、勇者なのですね」

神々しい神剣を携え、背を伸ばしながら笑って頷いたリンクの堂々

とした姿は、人々の不安など一発で吹き飛ばしてくれるほどに頼もしかった。
彼がいるならば大丈夫だと誰もが思った。
堪える気もない衝動のままに抱き着いたゼルダが、その胸元に安堵の涙を沁み込ませるのを咎める者は居なかった。
人々の期待と信頼を一身に背負うリンクの顔色が、憔悴と覚悟が入り混じった痛々しいものだったことに。
今にも崩れそうな手足の震えを必死に堪えながら立っていたことに、やっとの思いで作った笑顔がそれら全てを覆い隠して『勇者』となるためのものだったことに。
気付くことが出来た者もまた、残念ながら居なかった。

破滅への抵抗

夢のお告げ通りに、退魔の剣を携えた勇者と共に時の神殿へと赴いたゼルダ。

彼女に与えられた新たな神託は、此度は厄災ガノンを封じるのではなく完全に滅しなければならないという事実と、それを成し遂げるための具体的な方法だった。

遥か太古に七人の賢者が施した封印を、厄災を封じる他にこの地に固定させる楔としての役割をも果たしてしまっていたそれを解き、完全な自由を取り戻したガノンに勇者が今度こそ止めを刺す。

危険すぎると、万が一失敗すれば封印から解き放たれた厄災ガノンが何の妨げも無いまま世界を滅ぼしてしまうと。

何か他の手段は無いのかと尋ねるゼルダに、女神ハイリアは残酷な事実を告げた。

ハイリアの滅亡は、もはや逃れられない運命。

選ぶことが出来るのは、厄災ガノンの蹂躙によって恐怖と絶望の中で滅ぶか、かの者の脅威が取り除かれた世界にて緩やかな衰退を経て滅ぶかの二択のみだと。

すぐに滅ぶか、後に滅ぶか。

選び難い、それでも選ばなければならない答えは、ひとつしかなかった。

そうしてリンクとゼルダは、かつてお忍びの姫とその騎士として歩んだ世界へと、今度はその世界を救うという重責を負った勇者と巫女として再び旅立つこととなった。

厄災ガノンの存在と、それを討伐するという任を女神ハイリアから託された勇者と姫巫女が、今後各地へと赴くこと。

それらの事実を広く公開することにした王の決断は、人々を驚かせ、慄かせるのと同時に、安心もさせた。

世界の命運を託された二人が、未だ若い身で既に多くの功績が知ら

れている姫と戦術顧問であるという事実もまた、同じく公開されたからだ。
城内で懸命に務めを果たす姿を日々見守っていた者達が、旅の空の下で出会った二人が大層な立場のある者だったことを後に知って驚いた者達が。
二人の活躍を実際に目の当たりにした、実際に助けられた多くの者達が、困難な務めをあの二人ならば必ず成し遂げられると心から信じて。
平和な日々が取り戻されるまでを何としても生き抜くという、自分達の戦いに向き合う覚悟を決めた。

不定期に夜空に昇るようになった赤い月の影響で、魔物の動きが活性化した世界での旅は、あの頃よりも遥かに危険で困難なものとなっていた。
それでも、退魔の聖剣を携えた上に、身体的に成長したことで更なる強さを身につけていたリンクと、大妖精が目覚めさせた魔法の素質をこの二年で磨き上げ、魔物との戦闘にも危なげなく参加することが出来るようになっていたゼルダにとって、その旅路は困難ではあっても無謀なものではなかった。
厄災ガノン討伐を達成するまでの行程、その第一段階はかつて七賢者が施した封印を解くこと。
もちろんただ解くだけではいけない、準備不足の段階でガノンが復活するような事態になってしまえばハイラルはその時点で崩壊する。
なので二人が、封印を解くための前準備として取り掛かったのは、当代の賢者探しだった。
正確には、賢者の務めを果たせられる程の強い心を持った者。
その条件を満たした上で協力の要請に頷いてくれた者に、ハイラルの地の何処かに存在するという封印の基点まで同行してもらい、大地に施されたそれをその身でもって代わりに担ってもらうのだ。
そうすれば、準備が万全に整った任意の段階で一斉に封印を解き、厄災討伐に臨むことが出来る。

賢者の一人はゼルダが担うことが既に決まっている、探すべきはあと六人。
かつての旅で築いていた縁が、ここで力となった。
子供達をきっかけに交流が再開されて以来、国の次代を担う者同士としてリンクとゼルダの良き友となっていたゾーラ族の王子が。
昔の確執など知らぬと一番最初に笑い飛ばし、ハイリア人にとっては過酷すぎる環境で頑張る二人を、常に気遣ってくれたゴロン族の次期族長が。
腹をくくった甲斐があって既にある程度成し遂げられた一族の意識改革を、ハイリア人の友のおかげと感謝し続けてくれていたリト族の戦士が。
あの頃よりは育ちながらも、それでもまだ十分若すぎると言っていい身で世界の命運を背負うことになってしまった少年と少女を、大人としての謝罪と申し訳なさを込めながら抱き締めてくれたゲルド族の女傑が。
それぞれ、『水』『炎』『光』『魂』の賢者の役を担ってくれることとなった。
更にインパが『闇』の賢者を快く引き受けてくれて、残る一人となった『森』の賢者は、何とハイラル王自らが名乗りを上げた。
若者達のみに世界の未来を負わせることを、王としてだけでなく父としても忌んだからこその申し出を、ゼルダもまた、姫として娘として受け入れた。

片割れの苦悩

結界の基点までの道案内を女神ハイリアの巫女たるゼルダが務め、時に強大な魔物が立ちはだかることもある道中の妨げをリンクが尽く切り開き、当代の賢者はそんな二人を心から信じて危険な道行きを共に急ぐ。

懸命に務めを果たそうとする彼らだけでなく、彼らの奮闘を知る全ての者が一丸となって、世界の危機へと立ち向かっていた。

聖剣の勇者と女神の巫女を中心に、全てが順調に回っている。

世界は間違いなく救われると、全ての者が疑うことなくそう思っていた。

不安を、違和感を覚えたのは、気付くことが出来たのはただ一人。

世界を回す輪の中心で、共に、隣に立っていた彼女だけだった。

「リンク…リンク、ごめんなさい……」

勇者と呼ばれるに相応しい優れた戦闘の才を持ち得ている彼の心が、強者の矜持と慢心ではなく、弱者の慈愛と憂虞にこそ寄り添えるものであることを、自分は知っていた筈なのに。

彼が、世界を救う務めと人々の信頼に潰されそうになっていたことにようやく気付いた、気付けた時には、もはや手遅れだった。

その重荷を誰にも負わせず、悟らせず、たった一人で最後まで抱え続けることが自身の、『勇者』の務めなのだと。

そんな悲しい覚悟を、たった一人で固めてしまっていた。

恐くて、辛くて、泣きたくて。

今すぐにでも投げ出してしまいたいのが本音なのに、優しい彼はそれが出来ない。

開き直ってしまえるほどに強くない、しかし潰されてしまうほどに弱くもない彼は、自分なら大丈夫だからと、まだ耐えられるからと、『不安』という人々の重荷を片っ端から引き受けてしまっている。

あなた一人で背負わないでと、どうか私にも分けてほしいと。
……そんなことが、今更言える筈もなかった。
そんな彼に真っ先に自身の重荷を預けてしまったのは、彼も同じように不安で堪らなかったことを察せられずに一人でさっさと安心してしまったのは、他でもない自分だったから。
不安と戸惑い、恐怖に揺れながら自らの立ち位置を必死になって探していた彼に、間違った勇者像を植え付けてしまったのは、紛れもない自分自身だったから。
厄災ガノンを討伐するまでの旅路の中で、彼が自分に弱みを見せてくれること、その重荷を分けてくれることだけは絶対に在り得ないと、ゼルダは確信してしまっていた。
疎まれているのではなく、むしろ誰よりも信頼し合っていたからこそ。
我が身を削ってでも大切に、守るべき人だと思ってくれているからこそだということを、欠片の疑いも抱くことなく察してしまえたが故に。
勇者と姫巫女、世界の命運を負った二人の心境を置き去りに、厄災討伐の準備は哀しいほどに順調に、着々と進んでいく。
少しずつ、しかし確実に、決戦の時は近づいてきていた。

『力』の魔王

長い時間と労力を費やしながら各地を巡り、遥か太古に築かれたと思われる謎の遺跡や自然が作り出した迷宮を踏破し、その最奥で番人かのように立ち塞がった強大な魔物を倒しながらの旅路がついに終わり、厄災ガノン討伐の準備は万端に整えられた。

ゼルダを含めた七人の賢者達が一斉に封印を解き、代わりの結界で以ってガノンを閉じ込めた、最後の決戦の地と定められたのは、討伐の旅の始まりとなった時の神殿。

壮大かつ幽玄な大聖堂内を禍々しい気で満たすガノンは、正しく怨念の化身と称するに相応しい化け物だった。

ハイラル全土を一瞬で侵すことも可能なほどのそれを、神殿内に欠片も漏らすことなく押し止めるために、賢者達は結界の構成と維持に全力を注がなければならない。

結果的に彼らは、勇者と厄災の世界の命運を賭けた一騎打ちを、すぐ目の前で繰り広げられるそれを。

助けに入ることを許されない不甲斐なさを、結局は彼一人に全てを背負わせてしまった悔しさを噛み締めながら、信じて見守るしかない状況を強いられてしまっていた。

怨念の炎に焼かれ、光線に貫かれ、刃に裂かれた、火傷と血にまみれたボロボロの体で尚も退魔の剣を振るう勇者に、もういいと、もう逃げろと何度も叫びかけて、それを同じ数だけ毒を飲むような思いで噛み殺した。

自分が死ぬだけならば構わない。この場から逃げ去る彼の背を、命が尽きるその瞬間まで、心からの安堵を以って見送ってやれる自信がある。

彼に戦ってもらわなければ世界が滅ぶという現実が、守らなければならないものがあるという責任が。

たった一人で世界という重荷を負った彼を、既に十分頑張った大切な友人をもう解放してやりたいという、個としての願いを許してくれ

ない。
姫として、女神の巫女として、出してはいけない発言を懸命に堪えながら……代わりに彼の名を、どんなに吐き出しても足りない謝罪の言葉を叫びながら、泣きじゃくるゼルダの痛ましい姿が、一同の心を切り裂き見えない血を流させた。
旅の途中で発現した女神の祝福を手の甲に輝かせ、崩れそうな体や遠のきそうな意識を懸命に繋ぎ止めながら、厄災ガノンの体を構成する怨念の塊を切り裂き続けたリンクの奮闘によって、禍々しい巨体は徐々に小さくなっていった。
戦いの轟音が神殿内を支配していた時間は、長かったのか、それとも短かったのか。
それすらもわからない激戦の末に、不意に訪れた静寂の中で、二人の人影が向き合っていた。
火傷と血にまみれた今にも崩れ落ちそうな体を、床石に立てたマスターソードに縋ることで辛うじて持たせているリンクと。
そんな彼を、怒りも憎しみも見出せない、不思議な静けさと力強さを湛えた瞳で見据える褐色の肌と赤毛の大男……長年の封印によって、溜まりに溜まってしまっていた怨念を全て削り取った先に現れた、太古の魔王。
もはや満身創痍で、鍛えられた剛腕をただ単に振るうだけで止めを刺してしまえそうな少年へと、憎しみの対象であった筈の勇者へと、魔王は静かに語り掛けた。
《『核』を残そうなどとしなければ、むしろ早々に破壊してさえいれば、そこまで苦戦することも無かったろうに。
何故あんな回りくどい真似をした、魔王を倒すのが勇者の宿命だったのではないのか？》
「……それだよ、それが嫌だった。
押しつけられた理由で殺し合うのは、もう嫌だったんだ。
勇者と魔王だから、俺とお前だから……ずっと昔からそうだったから、運命だからだなんて。

そんな下らない因縁に、抗ってやったっていいじゃないかって思ったんだ。
何も知らずに……ただ示されるまま、流されるままに、碌でもない運命に翻弄されてしまった『俺達』の分も」
《小僧、貴様……覚えているのか》
「そんなことより、どうするガノン……いや、ガノンドロフ。
自分で言うのも何だけど今なら簡単だ、遥か古よりの宿命に倣って勇者を殺すか？」
《下らない因縁などに従う気は更々無いが。
口の利き方には気をつけろ、貴様個人に抱いた殺意を堪える気は無いぞ》
「おお怖い、流石は魔王ガノンドロフ。
止めを刺される前に、先手を打たせてもらおうか」

そう言って、掠れた声で笑いながら伸ばしてくる手を。
もはや剣を握ることは叶わなくとも、その甲に聖三角の紋章が輝いているだけで十分以上の脅威であることを、誰よりも身に染みて知っていた筈のそれを、ガノンドロフは黙って受け入れた。
達観を通り越して諦めていたようにすら思えるようなその態度が、自身に干渉し始めた力の質を察した辺りで一変する。
眼を見開き、驚愕を隠し切れない表情でこちらを見てくるガノンドロフに、リンクは力ないながらも満足げな笑みを零すことで応えた。

《何のつもりだ》
「お前を解放する、封印からも因縁からも」
《何のつもりでそこまですると聞いているのだ、勇者の情けか？
ふざけるな、哀れまれるくらいならば滓も残さず消滅してやるわ》
「……ああ、それでこそお前だ。
厄災ガノン……怨念の化身、世界を滅ぼす化け物なんかじゃない。
全てを圧倒する個の力で以って大国を統べてみせた、誰をも畏れさせた、偉大なる魔王ガノンドロフ」

《……なんだと？》
「お前がしたこと、お前に奪われたものを忘れる気も許す気も無いし。
お前を倒したこと、お前を封じてきたことも後悔していない、これからだって絶対に。
だけどさ、ガノンドロフ……実を言うと。
『俺』という個人は、まだお前に何も奪われていない今の『俺』は、お前のことを結構好きなんだ」

そう言いながらリンクが浮かべた笑顔に、『怒り』や『憎しみ』が本当に無いことを察し。
むしろ、こうして相まみえることが出来たのを、純粋に嬉しく思っていることを感じ取ってしまって。
ガノンドロフの意地や気負いは、今度こそ完全に折れてしまった。

《……今代のお前が、とんだ変わり者なのかと思ったが。
今になって思い返してみれば……俺の前に現れたどの勇者も、俺を倒し、知恵の姫や世界を救うという使命こそ抱いてはいたものの、怒りや憎しみで曇らせた剣を振るってはいなかった。
お前は最初からそういう奴だったのだな、もっと早く気付いていれば他にやりようがあったのかもしれぬ》
「さよなら、ガノンドロフ。
次にどこかで、何も知らない、何にも縛られていない、新しいお前として生まれることがあったら。
今度こそ、誰もが認める立派な王になってくれよ。
お前の力と信念に憧れた多くの人が集まれば、その人達と正しい道を進めれば、不毛な砂漠にだって豊かな国を築くことは必ず出来るから」

誰も止められなかった、止めようという発想すら抱けないままにここまで来てしまった争いの因縁を、ようやく終わらせることが出来た勇者と魔王。

ようやく素直にお互いを認め合えた二人は、今度こそ本当に最後となる別れを交わした。

かつて厄災であり、魔王であった男の魂が消え去るまでを無事に見届けられたことで、ついに限界を迎えた勇者が自身の血だまりに倒れ伏す。

その左の手の甲に刻まれた聖三角の紋章の、『力』を示す上の部分がゆっくりと輝きを失ったことに、駆けつける者達が気付くことは無かった。

『勇気』の少年

全身を赤く染めたその体に、我が身が汚れることも厭わずに縋るゼルダと、いつもならばすぐに手を伸ばして拭っていた筈の彼女の涙を前に、力なく目を瞑ったままのリンク。

その姿を目にした一同は、何の他意も無く、自然な流れで思った。

あの傷、あの出血では、どんな処置もその時を先延ばしすることにしかならないと、各々が持ち得ていた知識と経験の全てが告げている。

『彼はもう駄目だ』と、自分で自分の胸倉を掴み上げて、殴ってやりたくなるような冷静さで以って思ってしまった。

このまま目覚めないのではないかという不安と、もういっそのことこのまま楽にしてやりたいという願い。

一同が抱く、相反すると共に紛れもない本心であるその想いに半分応え、半分裏切り。

この頃は、退魔の剣をずっと握ったままだったように思えてしまうリンクの手、殆ど入らない力を懸命に込めて動かした指先が、自身の存在を必死に繋ぎ止めようとしているかのように力と想いを込めるゼルダの手をそっと握り返した。

「リンク…っ！」

「ゼルダ、ごめんな。

ずっと一緒にいるって約束……果たそうと、思ってたんだけど」

「果たさなくていい、もう二度と会えなくたっていい。

世界のどこかで、あなたが幸せに笑ってくれるのならば。

その為に私は、これから先の人生を、あなたが命を賭けて繋いでくれたもの全てを賭したって構わない。

だからお願い、死なないで……あなたの勇気が、功績が、報われないなんて間違っている」

リンクの顔をちゃんと見たいのに、意図に反して止まらない涙が世界を滲ませる。
いつかのように伸ばされた指がそんなゼルダの目元をそっと拭い、かすかな血の跡と引き換えに視界を開かせた。
そこに見えたのは、心から幸せそうな、それ故に哀しすぎる笑顔だった。

「ちゃんと報われてるよ、歴代の勇者達に申し訳ないくらいに。
ありがとう、ずっと一緒にいてくれて」
「そんなことで報われたなんて言わないで、あなたが私達を助けてくれたのに!!」
「……ごめん、もう時間が無いみたいだ。
俺が死んだら、トライフォースは次の保有者の……君の下へと渡ることになる。
最後の務めを、君が果たさなければならなくなる。
そんなことはさせられない。
絶対に、他の何に代えてでも」

覚悟と決意が込められた声と共に掲げた手の甲、そこに刻まれた紋章が放った光がゼルダを包み込む。
その光が、自身を縛り付けていた『何か』から、今の今まで当然のように在り続けていて気付けずにいたものから、この身と魂を解き放ってくれた不思議な感覚をゼルダは覚えた。
恐れるリンク一人に重責を負わせていることに気付いてしまった時のような、必死で掴んでいた彼の手がすり抜けてしまったかのような、心胆が凍えるような嫌な予感と共に。

「リンク、一体何を…っ!?」

思わず上げかけたその声は、自身を急に襲った謎の浮遊感と、覚悟も虚しくあっさりと離されてしまった手に、嫌な予感で済ませること

が出来なかった目の前の現実によって遮られた。
その現象に、その感覚にゼルダは覚えがあった。
シーカーストーンの機能のひとつとして、よく使用していた遠方への転移。
それと同じような現象が、この場にいる全員の身に起こっている。
リンクを除いて。

「リンク……」
「トライフォースは俺が預かるよ、これは人の世に在っていいものじゃなかった。
たった一人の少年が、あんな辛く、恐い思いをしなければ救えない世界なんて、そんな運命なんて間違ってる。
……だから俺で最後にする、『伝説』はこれで閉幕だ」
「お願いリンク、手を伸ばして!!」
「ごめんなゼルダ、本当にごめん。
置いていかれる、一人にされる方の辛さは、よく分かってはいるんだけど。
それでも、俺は嫌なんだ……君に背負わせるくらいなら、全部抱えて持って行く。
どうか、俺に君を守らせて」
「リンクっ!!」
「さよなら、ゼルダ。
一人の女の子として、どうか、幸せに」

最後の瞬間まで、諦めずに伸ばされ続けた指先。
その全てが光の粒子と化して消え去るまでを見届けたリンクは、気を保たせていた最後の柱が消えたことで、今度こそ本当に力尽きた。
「さい、ご……えがお、みたかっ、たな」

瞳に、意識に最後に焼き付いたのが彼女の泣き顔だったことが、純

粋に残念でならない。
徐々に狭く、暗くなっていく視界の中に、二画の光を失ったトライフォースが印されている自身の手の甲と、その少し先で転がっているマスターソードが見えた。
最後の力を振り絞って手を伸ばし、激戦の中でボロボロになりながらも青く神秘的な輝きを保ち続けている刀身に、その指先を辛うじて届かせることが出来た。

「おまえも……ながいあいだ、おつかれさま。
いっしょに、ゆっくりやすもう。
……おやすみ、ファイ」

その言葉を最後に目を閉じたリンクに続くように、マスターソードの輝きもゆっくりと消えていく。
それは正しく、魂を持つ剣が主の傍らで共に眠りについた、そんな光景だった。
三画全ての光を失い、動く者が誰もいなくなった静寂の神殿内でしばし沈黙したトライフォースが、これで最後と言わんばかりの輝きを放ち始める。
その光は、死の間際に瀕していたリンクの体を癒し、立派な神殿全体を、彼の眠りを守るための安息所として時の流れから切り離した。
勇者も魔王も去り、滅びの時を静かに待つのみとなったハイリアの地に、嘆きの声を上げる姫を一人取り残して。

『知恵』の姫

そうして世界は、ハイラルは救われた。
当初の予想や危惧よりも、遥かに少なかった犠牲で以って。
しかし、それを喜べる者はいなかった。
数の上ではたった一人……しかしその一人は、多くの者から慕われていた、ハイラルの未来を担うことを期待されていた、かけがえのない一人だった。
魔王の復活と世界の破滅に瀕した中で、それでも人々の中に未来への希望があった時よりも下手をすれば悪化してしまっている状況で、父達は復興に向けて尽力した。
皆が各々の種族や集団を纏める立場にあったことに加えて、彼が命を賭して守り抜いたものを無駄にしてはならないと。
彼を親しく思っていた者の、あの戦いを見守った者の責務として受け止めたから。
それは彼らの、公としての想いと責任。
私としての彼らには、リンクを失った哀しみと喪失感に嘆き続ける私への、自分達が頑張るからそっとしておいてあげたいという思いやりがあった。
世界を救う為に奔走した英雄の片割れとして、次代を担う王家の者として、誰よりも彼の遺志を継がなければならない者として。
本当ならば私こそが、率先してそれに加わらなければならなかったのだけど。
どうしても出来なかった……彼と共に駆けたこのハイラルに、彼との思い出が無い場所など存在しなかったから。
どこに行っても、何を見ても彼のことを、彼のために何もしてあげられなかったことを思い出して落ち込んでしまう私は、ついに部屋から出ることすらままならなくなってしまった。
皆の厚意に甘んじて閉じこもりながらも、それで彼のことを吹っ切れる、忘れられる訳でもなく。

日々憔悴していく私の下に、遠方から遥々と思いがけない客人が訪れてきたのは、そんな時のことだった。

随分とお年を召されている上に、まだ大人にも成りきれていなかった唯一の孫、最後の肉親を失って。

下手をすれば、私以上に落ち込んでいてもおかしくない身で駆けつけてくれたかの人を、リンクのお婆様の訪れを、私は拒めなかった。

あの日、私と出会いさえしなければ……彼は勇者などにならずに、今もあの穏やかな村で平和に暮らしていたかもしれないのに。

そう嘆く私に、お婆様は言ってくれた。

あの子は本当に、あなたのことを大切に想っていたと。

あなたと出会ったことで、あの子はようやくこの世界で生きられるようになったのだと。

あの子のことを想うなら、あの子と出会ったことを、共に過ごしたことを悔やまないでと。

あの子は確かに幸せだったのだということを、どうか信じてあげて……と。

彼の笑顔を、疑いようもなく楽しかった日々を思い出してまた泣き出してしまった私を、お婆様は遠い記憶の母を思わせる優しさで抱きしめてくれた。

私が落ち着いた頃合いを見計らって、お婆様はとあるものを見せてくれた。

村の人達に荷造りを、城の兵士達に荷下ろしとここまで運ぶのを手伝ってもらったという荷物は、大きさの割には酷く重い代物で。

お婆様が私室を片づけていた際に見つけた、彼の遺品だというそれを前にした私は、とあることを思い出していた。

私と出会う前の彼が、部屋に籠ってひたすらに何かを書き綴る日々

を送っていたということを。
魔物早見の元となった本がその一部だったことは間違いないけれど、費やしたであろう時間を鑑みるに、それだけとはとても思えない。
お婆様が帰られた後で、一人で開けてみた荷の中身は、予想通り。
全ての始まりとなったあの本を思い出させる綴じ方で、表紙には彼の筆跡で題名らしいものが綴られている分厚い本が、いっぱいに詰まっていた。
重い筈だと思わず納得してしまいながら、一番上にあった本を手に取った次の瞬間、私の目は驚きのあまりに見開かれた。
彼が幼い頃から、私と出会うずっと前から書き続けていた筈の本の題名に、私の名前が記されていたのだから。
驚きのままに本を開いた私の、食事と就寝以外の全ての時間を『ゼルダの伝説』の物語を追うことに没頭した日々は、何日にも及んだ。
時系列に沿って一度全てを読み終えた後も、また何度も何度も読み返して。
その中で私が抱いた印象、立てた仮説はあまりにも突拍子がないもので、リンクが身近な者達を参考にして書き上げた物語だと考えた方がよほど現実的だったけれど。
それでも私は思わずにはいられなかった、説明のしようがないところで確信していた。
リンクが人生の大半を賭して綴ったこの『伝説』は、遠い過去に起こった実際の出来事なのだと。
物語に登場する『リンク』と『ゼルダ』は、紛れもない私達自身のことなのだと。

リンク……あなたは知っていたのですか、それとも覚えていたのですか。

いつどこで得たのかもわからない、様々な謎の知識を持っていたあなたに。
どことも知れない遠い世界のことを知っているかのような、不思議な印象を時折抱かせたあなたに。
隠し事があろうとも構わないと思って、むしろ変に追求すれば信頼を損ねてしまうのではないかと恐れて、結局何も聞くことが出来なかったあなたに。
勇気を出して尋ねていれば、あなたは答えてくれましたか。
最初から最後まで一人で抱えたまま、誰にも預けてくれなかったその重荷を、私達にも負わせてくれましたか。
あなたは何を思って、この『伝説』を遺したのですか。
誰にも知られない、誰にも報われない孤独な戦いに身を投じた勇者達の物語を、せめて形にして残したいと。
あくまで創作としてでも構わないから、人々に知ってもらいたいと、思う気持ちがあったのではありませんか。
だとしたら叶えてあげたかった。
あまりにも遅くなってしまったけれど、今更かもしれないけれど。
彼らに救われた多くの、全ての者達の分も込めて、何度も何度も世界を救ってくれた勇者達に、今からでも報いたかった。
何もかもが取り返しがつかなくなった今になって、尽きるどころか溢れて止まらない後悔に溺れそうになりながらも。
文字を、文章を、代々の勇者達の旅路を、必死になって追い続けた。

そして、私はまた旅立った。
舞台を紙の中から現実のハイラルへと変えて、今度はたった一人で。
表向きの理由は、復興に勤しむハイラル各地への慰問と、此度の騒

動でハイラルと同様に甚大な被害を被った諸各国、友好民族と今後に関してを改めて話し合い、確認し合うという公務。
当然こなすべきそれらに加えて、リンクが残した著書の内容が真実であることを証明したい、説明のしようがない不思議な確信以外の確かな証拠を見つけたいという、私自身の個人的な目的があった。
一国の姫が護衛もつけずに一人旅をするなど、普通ならば到底考えられないことだったけれど。
厄災ガノン……否、魔王ガノンドロフの影響が消えた世界は、最初に旅に出た頃よりもずっと安全になっていたし。
魂が因縁から解放された後も、実戦の中で自然と磨かれていた魔法の力に衰えは無くて、いつの間にか護衛の兵士達よりもずっと強くなってしまっていた私にとっては。
誰もが復興に追われている中で、それらの重要な役割を担えるだけの立場と責任のある者が何とかして猶予を作り出し、護衛団を組んで時間と労力をかけながら各地を巡るよりも、ずっと現実的で前向きな選択肢だった。
かつて彼と共に訪れた地では、彼とそこで過ごした時のことを思い出して。
初めて訪れることになった地では、彼が今共に居たら、二人でどんなやり取りを交わしただろうかと想像して。
そんな、楽しくも切ない旅路の中で私は、証拠探しには苦労するだろうという当初の予想に反して、思いがけず多くの話を聞くことが出来た。

とある地を訪れた時には、こんな話を聞かせてもらった。
遠い昔、かつてこの地に存在していた町を中心とする一帯で、謎の奇病が蔓延した。

それは痛みや苦痛を伴うようなものではなく、ただひたすらに眠り続けるという、奇妙にして非常に厄介なものだったという。
何を試しても効果は窺えず、もはや手の施しようが無いと諦めかけた……そんな時のことだった。
何日も何日も、異様な眠りの日々を送っていた人々が、何事もなかったかのように呆気なく目を覚ましたのは。
目覚めた者達の話によると、彼らはずっと同じ夢を見ていたそうだ。
カーニバル開催前の三日間を、遥か天空から迫りくる月によって滅びが定められた最後の時を。
ある者はいつも通りに、ある者は絶望し、ある者は足掻き、ある者はだからこそ決められた覚悟と決意で以って、誰もが最後の最後まで懸命に生きながら。
自覚も認識も無いままに、同じ三日間、同じ時間を、まるで舞台装置かのように、何度も何度も繰り返していたのだという。
そんな果てのない繰り返しが、なぜ突然に終わったのか。
その理由と思われるものは、多くの者の話を聞いて、それを纏めている間に発覚した。
夢の世界での三日間を繰り返している者達の話の中に、共通して登場した者がいて、その者の接触と干渉のみが、繰り返しの日々に変化を与えていたということが判明したから。
金の髪と青い瞳に、ここらでは見かけない緑の服と帽子を身につけて。
時に悪戯をしながらも、人々の様々な悩みごとを解消するために奔走してくれたのだという彼が。
あの世界の住人となっていた者達で集まって、改めて話を擦り合わせてみれば、多かれ少なかれ世話になっていない者はいなかったことが判明した彼が。
また助けてくれたのだと、大変な努力の末にやり遂げてくれたのだと。
彼を知る全ての者が心から納得し、そして感謝した。

彼がまたこの地を訪れることがあれば、心を込めて歓待し、改めて感謝の言葉を述べようと、残された人々は思っていたのだけれど。

残念ながら、緑衣の少年は二度と姿を現さなかった。

それでも、時を越える、もしくは時の干渉から逃れられる力を持っている可能性がある彼ならば、遠い未来にまたこの地を訪れてくれることもあるかもしれないと、人々は僅かな希望を抱いて。

この話と、満月の前の三日間に渡って祭りを行なう風習と、彼が救った夢の世界の名を。

彼の存在と功績の証、彼をもてなして楽しんでもらうために、彼に気付いてもらうための目印として、遥か後の世へと伝えていくことを決めた。

『タルミナ』の名は、長い年月の中で時計の町が無くなった後も、少年の活躍と冒険を親しむ者達によって確かに伝えられ、今ではその辺り一帯の地域を意味するものとなっていた。

『緑衣の勇者』の物語は、様々なところで、様々な人達から聞くことが出来た。

古くから伝わるこの地域のお伽噺だと、遠い昔の伝説だと言って、金の髪と青い瞳を持ち、緑の服を纏った少年の活躍を語ってくれた人達は、それがまさかこんな形で繋がることになるとは思ってもみなかっただろう。

伝わっている話は、全体のほんの一部や表向きのものだけだったり、真実からは少しずれた解釈をされてしまっていたりしたけれど。

それらのお伽噺や伝説の中に残された謎や秘密の、秘められた裏や空白の部分の全てがあの本の中で描かれていること、あの本の内容があれば説明できてしまうことこそが。

リンクが残した物語が、ハイラルの真の歴史書であり、世の人々の

知らないところで幾度となく世界を救った勇者達の冒険譚であったことを、疑いようもなく証明していた。

そうして、確かな証拠を以って推測を確信へと変えた私は、彼を知る多くの者達の協力を得ながら、彼と共に過ごした日々よりも長い年月をかけて、一冊の本を書き上げた。

彼は、歴代の勇者達の物語こそ詳細に、敬意を以って書き上げていたけれど。

自分自身に関することは、本どころか文章のひとつすら残していなかったから。

肝心の最終章が存在しないことが、この素晴らしい伝説が永遠に未完となってしまうことが、彼の功績がいずれ忘れられてしまうだろうことが。

私にはとても耐えられなくて、気付けばペンを手に取っていた。

そうして、書き上げたものこそが本書。

感謝と願いを込めて、素人が拙いながらも懸命に綴った、私の勇者の物語である。

この物語を、既に終焉が近いというハイラルの時代が終わりを迎えるその時まで、一人でも多くの人達に広めること。

そして、今の世が終わってしまった後の新たな人達、新たな時代にまで伝えること。

これが私の、運命に翻弄された三人の最後の一人としての、生涯をかけて全うすべき務めであると心に刻む。

百年、千年の未来では叶わなくとも。

万年、億年の未来でならば、もしかしたら。

彼が目覚め、何の運命も強いられることの無い新たな世界で、新たな人達と共に、笑いながら過ごしてくれるかもしれないから。

どうかこの伝説が、この想いが、遥か未来の人々にまで届きますように。

伝説は繋がる

強く、そして麗しい姫が、願いの全てを込めて綴ったであろう最後の一文を、万感の想いで指で辿る。

「ああ、届いた……太古の姫君よ、そなたの願いは確かに叶ったぞ」

途中から拭うことすら面倒になり、今や溢れるままとなってしまった涙がボロボロと紙面に滴ってしまっているけれど、それで文字が滲んだり、紙が傷んだりすることは無い。

守る者や直す者すらいなくなってしまってからの、幾万とも知れない長い年月を通して本を守り抜いた守護の魔法にしてみれば、その程度は羽で優しく撫でられたようなものだった。

『それ』を最初に見つけたのは開拓作業に従事していた土工達だったけれど、彼らは最初、自分達が見つけたものが何だったのかを理解できなかった。

文字を記し、文章を綴るとなれば粘土板が常識だったこの地、この時代において、『紙』やそれを用いた『本』などというものは、オーパーツ以外の何ものでも無かったのだ。

認識と扱いに困った末に、自分達には手に負えないものを見定め、管理してもらいたいという考えで、当代の王へと献上した。

全てを裁定し、かつ見通す博識と千里眼の持ち主であると名高い王は、当人も全力で自負している慧眼で以って、それが粘土板よりも遥かに多く複雑な文章と情報を収められる『本』であること、今の世では作り得ない高度な技術が生み出した代物であることを見抜いた。

ゼルダの伝説・第一章『スカイウォードソード』
ゼルダの伝説・第二章『ふしぎのぼうし』
ゼルダの伝説・第三章『４つの剣』
ゼルダの伝説・第四章『時のオカリナ』

ゼルダの伝説・魔王ガノン封印後の第一章『神々のトライフォース』
ゼルダの伝説・魔王ガノン封印後の第二章『夢をみる島』
ゼルダの伝説・魔王ガノン封印後の第三章『ふしぎの木の実』
ゼルダの伝説・魔王ガノン封印後の第四章『神々のトライフォース２』
ゼルダの伝説・魔王ガノン封印後の第五章『トライフォース三銃士』
ゼルダの伝説・魔王ガノン封印後の第六章『ゼルダの伝説』
ゼルダの伝説・魔王ガノン封印後の第七章『リンクの冒険』

ゼルダの伝説・新たな風の勇者の第一章『風のタクト』
ゼルダの伝説・新たな風の勇者の第二章『夢幻の砂時計』
ゼルダの伝説・新たな風の勇者の第三章『大地の汽笛』

ゼルダの伝説・時の勇者の末裔の第一章『ムジュラの仮面』
ゼルダの伝説・時の勇者の末裔の第二章『トワイライトプリンセス』
ゼルダの伝説・時の勇者の末裔の第三章『４つの剣＋』

ゼルダの伝説・全ての最後を飾る章『ブレス・オブ・ザ・ワイルド』

ゼルダの伝説・最終章『閉幕のトライフォース』

締めて十九巻。
その全てが、金字で題名が綴られた上に、中身を象徴していると思われる色鮮やかな絵が描かれた、豪奢な表紙で閉じられている。
薄い紙を束ねて、粘土板にも負けないような厚さで拵えたその中に

は、果たしてどんなことが書かれているのか。
神々の神殿や祭具に施されているものよりも、遥かに強固なもののように思われるほどの加護で守られ。
万が一にでも朽ちや綻びに襲われようものなら、それ自体の『時』を戻してまで修復するという冗談のような魔法がかけられ。
綴られている文章を、読者が問題なく読むことが出来る文字に、自動的に翻訳するというとてつもない機能までもが備えられていた本の山。
そこから、『何が何でもこの本を残し、人々に読んでもらわなければ』という、もはや執念とも言えてしまいそうなほどの一途な想いと願いを感じ取った王の、中身への興味は俄然と高まった。
敬われ、尊ばれ、世界を作り上げた自分達は優れた存在であると心から驕っている神々が、自分達が今の世を興すよりも遥か以前に、今とは比べようもないほどに発達した文明が存在していたなどと知ったらどれだけ面食らい、揺るがぬはずの自尊心を傷つけられることであろうか。
そんなことを考えて少しだけいい気分になりながら、就寝前の僅かな余暇の楽しみとしようと思って、本当に軽い気持ちで、あまり興味がなさそうな親友を強引に誘って第一章の1ページ目を開いたのが、一晩どころかその後数日に渡ることとなる引きこもり生活の始まりだった。

第一章の、女神によって造られた無機質かつ無感動な神剣の精霊が、勇者を相棒として様々な冒険を乗り越え、心を、感情を、掛けがえのない人との思い出を育んでいく物語の時点から、王とその親友にとっては急所ど真ん中への会心の一撃だった。
これらの本が時系列の物語になっているというのならば、勇者は、

神剣は、その後どうなったのか。
寝る間を惜しみ、仕事を優秀な部下達に丸投げし、食事を部屋まで運ばせながら、ひたすらに太古の伝説に没頭し続けた数日間の後に、ついにその時は訪れた。
神から与えられた使命にではなく、大切な姫を守りたいという自身の気持ちに殉じた勇者の。
一人残され、一時は打ちひしがれながらも気丈に立ち上がり、勇者が遺した物語と共にその後も強く歩み続けた姫の生き様に、王の慟哭は止まらない。
暴君と名高い彼らしくない様子を、いつもなら揶揄ってきそうな親友がやけに大人しいと思えば、彼は既に寝台で干からびていた。
あまりにも泣き過ぎたせいで、体を構成している泥が水分を失ってしまったらしい。

「……エルキドゥよ、水はいるか？」
「ありがとう、でも今はいいや。
……多分まだ、どんなに補充しても、すぐに流しちゃうだろうから」
「ふっ……色々な意味で正しく人形じみていた貴様が、この数日で随分と情緒豊かになったものよ」
「ねえギル、君はこれからどうするつもりだい？」
「そんなもの、改めて考えるまでもないわ。
勇者の存在を、この伝説を、人の世に余すことなく伝えゆく。
ゼルダ姫の願いを叶えた我には、それを引き継ぐ権利がある筈なのだからな」
「『義務』ではなく『権利』って言う辺りが、いかにも君らしいね」
「当然であろう、我は他人からの強制では絶対に動かぬ。
我は我がやりたいと思ったことのみをやる、叶えたいと思ったことのみを叶える。
その我がやると決めたからには、それは既に決定事項だ。
……安心するがよい、ゼルダ姫。

勇者の伝説は人理の端々にまで行き渡ることを、この我、ギルガメッシュが請け合ってやろう」

そう断言した暴君の、遥か遠いところに思いを馳せるかのような眼差しは。

彼をよく知る者こそが驚き、我が目を疑ってしまいそうなほどに、優しく穏やかなものだった。

「はあ……」

「どうしたのですか、そんな大きな溜め息なんてついて」

「さっき食堂に顔を出したら、立香から出会い頭で泣かれたんだよ。……あいつ、昨夜ようやく最終巻を読んだんだって。

思わず『泣くほどか？』って聞いたら、立香どころか居合わせた全員から全力で断言されて……そのまま、『伝説語り』が始まりそうだったから逃げてきた」
「まあ素敵、ちょっと私も行ってきますね」
「頼むからやめて、どんな罰ゲーム!?」
「……あなたはもっと、自分に自信を持っていいと思います」
「別に卑屈になってる訳じゃないよ、ただ単に恥ずかしいんだってば。……前から聞こうと思ってたんだけど、何であんなに美化した物語を書いたわけ？
出会いの時点で耐えられなくなるって相当だよ、アレさえなければ現状はもっとマシだっただろうに」
「あれは私一人が勝手に書いたわけではなく、私達を知る大勢の人達に内容を確認してもらって、小まめに修正しながら作り上げたものです。
あれは紛れもなく私達から見たあなたの真実、断じて美化なんかじゃありません。
私を責めるより先に、是非ともその辺りを自覚してください」
「……俺の知らない間に、随分と強かになったなあ」
「当たり前です、私はあなたが封印された後もずっと生きたのですから」
「……ごめん」
「謝らなくていいです、その代わり約束してください。
ずっととか、永遠とかは言いません……出来る限り、許される限り、傍に居てください」
「ああ、約束する」
「あまり気負わなくても大丈夫。
別れることは嫌だけど、でも怖くはないんですよ。
また出会える時がきっと来るって、今の私は知っていますから」
「……本当に。
強くなったね、ゼルダ」
「あなたのおかげですよ、リンク」

そう言って笑い合う、ハイラルの二人は気付かなかった。
居た堪れなさのあまりに逃げ出してしまったリンクを追ってきて、二人のやり取りに居合わせてしまった食堂の一同が、物陰で静かに咽んでいたことに。
カルデアは、今日も平和だった。